

2022 年 9 月

食料安全保障月報

(第 15 号)



令和 4 年 9 月 30 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022 年 9 月食料安全保障月報（第 15 号）

目 次

概要編

I	2022 年 9 月の主な動き	1
II	2022 年 9 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報	5
	中国・インド・パキスタンの穀物生産・貿易動向	
	【参考】“ジャスマイ”とは？	

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 0
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 1
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 2
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 4
5	食品小売価格の動向	1 8
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	1 9
7	FAO 食料価格指数	2 1

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞ 生産量は冬小麦が減少するものの春小麦が回復し前年度を上回る	
	＜カナダ＞ 生産量は回復し、前年度比 55.6%増、過去 5 年平均比 14.3%増	
	＜豪州＞ 生産量は史上 2 番目の 33.0 百万トンの見込み	
	＜EU27+英国＞ とうもろこし等の代替で、小麦の飼料用需要が上方修正	
	＜中国＞ 7 月の小麦輸入先国は豪州が 99.7%を占めた	
	＜ロシア＞ 生産量は前月から 3.0 百万トン上方修正で史上最高の 91.0 百万トン	
	＜ウクライナ＞ 生産量は前月予測から 1.0 百万トン上方修正の 20.5 百万トン	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量は収穫面積・単収減少により減産、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出増の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出税は継続	
	＜中国＞ 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し	
	＜ウクライナ＞ 輸出再開で輸出量は上方修正も、前年度より半減	
3	コメ	1 5
	＜米国＞ 生産量は収穫面積減少により 1993/94 年度以来の低水準に	
	＜インド＞ 2022 年 9 月 9 日より輸出規制中（碎米（100%）輸出禁止等）	
	＜中国＞ 2022/23 年度の生産量は南部の高温・乾燥により減少の見込み	

＜タイ＞ インドの輸出規制等により 2021/22 年度の輸出量は増加見通し
＜ベトナム＞ インドの輸出規制等により 2021/22 年度の輸出量は増加見込

II 油糧種子

大豆・・ 2 1

＜米国＞ 収穫面積・単収の下方修正により、生産量は減産、輸出減の見通し

＜ブラジル＞ 2021/22 年度は高温・乾燥の影響で減産、輸出減の見通し

＜アルゼンチン＞ 2021/22 年度は高温・乾燥で減産見通し、輸出税は継続

＜中国＞ 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し

＜カナダ＞ 収穫面積は減少も、単収の増加により増産、輸出量も増加見通し

(参考1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について(2022/23 年度)・・・ 2 7

(参考2) 単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7

特別分析トピック

「我が国と世界の農薬をめぐる動向」

【利用上の注意】

表紙写真：豪州ニューサウスウェールズ州の小麦圃場での殺菌剤の散布

(8 月 28 日撮影)

小麦価格は高価格を維持しているため、生産者は、投入コストの上昇分を
補完し、収益が改善することを期待している。

(概要編)

I 2022 年 9 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球の冬小麦は収穫が終了し、その他の作物は成熟期から収穫期を迎え、南米では今後作付けが開始される。

品目別にみると、9 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、世界の生産量が前年度より増加する見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、3 月に過去最高を更新した国際相場も侵攻前の水準まで戻しているものの、今後も注視が必要。

また、とうもろこしについては、世界の生産量が、米国や欧州の乾燥などで前年度より減少する見通し。一方、大豆については、前年度乾燥で減産となった南米を中心に世界で増産となる見通しである。いずれも期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視していく必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：8 月）については、穀物（147→145）、植物油（169→163）、乳製品（147→144）等が下落した影響により、7 月より下落（141→138）したが、引き続き高い水準を維持（参考：前年 8 月の値は 128）。

海上運賃について、バルチック海運指数（穀物輸送に主に使用される外航ばら積み船の運賃指数）は、昨年 10 月に直近 5 年間の最高値を記録して以降、下落傾向で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、9 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

ウクライナ農業政策食料省の9月8日報告によると、冬小麦は収穫がほぼ終了し、1,918万トン収穫された。とうもろこし等の夏作物は収穫が開始された。

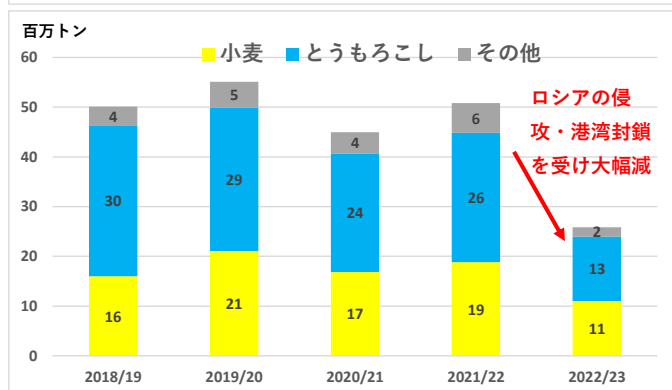
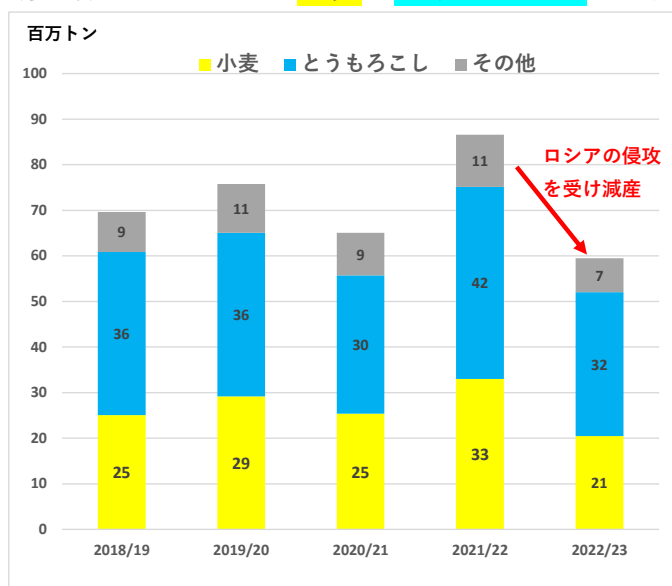
7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意を受け、8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開された。9月15日までに穀物・油糧種子が326万トン輸出された。

米国農務省（USDA）によれば、ウクライナの2022/23年度の小麦生産量は、100万トン上方修正され2,050万トンの見通し。ロシアによる侵攻の影響を受け、対前年度比38%減となっている。輸出量は8月見通しから変更はなく、前年度対比42%減の1,100万トンの見通し。

一方、とうもろこし生産量については、8月の天候に恵まれ8月見通しから150万トン上方修正され、対前年度比29%減の3,150万トン。輸出量は上方修正され、前年度対比50%減の1,250万トンの見通し。

ロシアのプーチン大統領は、9月7日のウラジオストクでの東方経済フォーラムでウクライナの穀物輸出について、アフリカの途上国向けではなくEU向けが多いと批判し、9月16日に開催された上海協力機構サミットのサイドライン会合でトルコのエルドアン大統領と協議した。

(参考)ウクライナの小麦ととうもろこしの生産量(上)、輸出量(下)の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022.9)

1 米国のとうもろこし、大豆生産見通しは8月の乾燥により下方修正

米国中西部における8月の高温乾燥により、受粉期を迎えたとうもろこしが影響を受け、USDAによれば、収穫面積、単収の引き下げにより、とうもろこしの生産量は、前月から1,050万トン下方修正され、前年度より8%減の3億5,420万トンの見通し。輸出量も250万トン下方修正され、5,780万トンの見通し。

大豆についても、同様に収穫面積、単収の引き下げにより、生産量は、前月から410万トン下方修正され、前年度より1%減の1億1,920万トンの見通し。輸出量も190万トン下方修正され、5,670万トンの見通し。

2 豪州の穀物・油糧種子は3年連続豊作の見通し

豪州農業資源経済科学局が9月6日に公表した「Crop Report」によれば、2022/23年度の冬作物は降雨に恵まれ良好に生育し、過去4位の5,550万トンの見通し。過去最高の豊作となった前年度には及ばないものの、小麦は史上2位の3,210万トンで過去10年平均を30%上回る。大麦は史上4位の1,230万トンで過去10年平均を17%上回る。菜種は史上2位の660万トンで過去10年平均を72%上回る見通し。

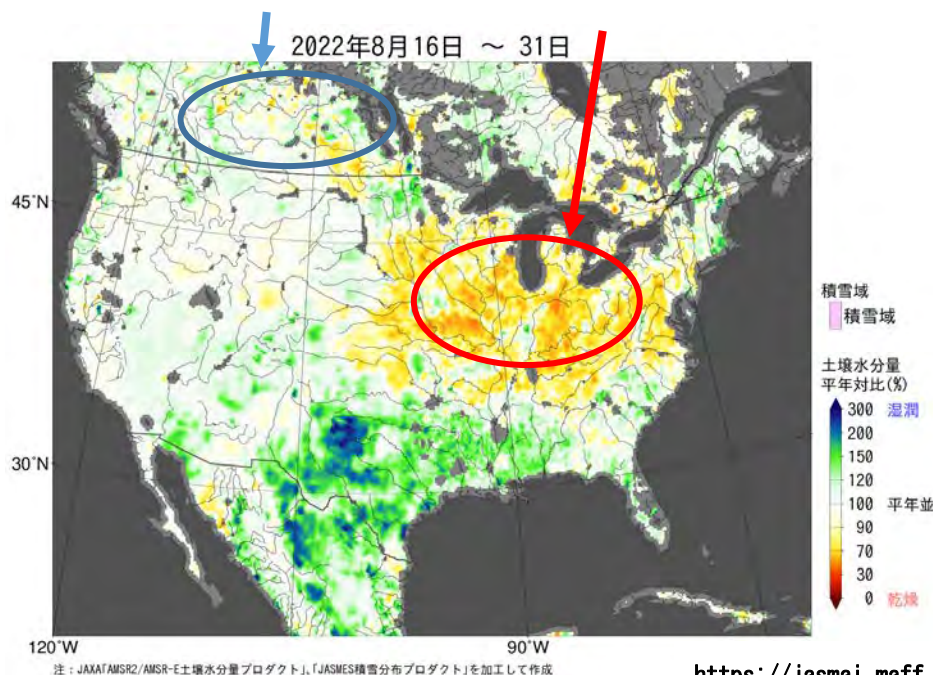
3 カナダの穀物・油糧種子は干ばつの前年度から大きく回復する見通し

カナダ統計局が9月14日に公表した穀物・油糧種子の生産見通しは、西部の平原3州が干ばつとなった前年度と違い天候に恵まれ、大きく回復する見通し。

カナダ西部で主に栽培される小麦については、3,470万トンで、前年度比56%増、対過去5年平均14%増となる見通し。うち、デュラム小麦は610万トンで、それぞれ101%増、21%増の見通し。また、菜種については、1,910万トンで、それぞれ39%増、0.2%増の見通し。

一方、主にカナダ東部で栽培される大豆については、650万トンで、対前年度比4%増も、対過去5年平均は4%減となる見通し。

(参考)北米の土壌水分量。カナダ平原州は平年並み、米国中西部は平年より少ない (JASMAI より)



https://jasmai.maff.go.jp/climate_map/

II 2022 年 9 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、8月末、290ドル/トン台後半で推移。ウクライナ産の黒海経由での輸出に関し、9月に入り、ロシア側から合意条件見直しの示唆を受け、供給懸念等から310ドル/トン台半ばに値を上げたものの、ロシアの生産量予測の増加見通しから300ドル/トン前後に値を下げた。その後、ロシア占領地の住民投票問題等により、ウクライナからの輸出が再び懸念されたことから値を上げ、9月下旬現在、320ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、8月末、260ドル/トン台半ばで推移。9月に入り、EUの高温・乾燥による作柄悪化懸念やUSDAの9月需給報告で米国の生産量が市場の予想以上に下方修正されたこと等を受け、9月中旬に280ドル/トン前後まで値を上げた。その後、世界的な景気後退への懸念や米国で収穫期を迎えたこと等から値を下げ、9月下旬現在、270ドル/トン台前半で推移。

コメは、8月末、420ドル/トン台前半で推移。9月に入り、パキスタンの洪水による被害や、インドの輸出規制（碎米輸出禁止と一部精米の20%輸出税賦課）から値を上げ続け、9月下旬現在、460ドル/トン台前半で推移。

大豆は、8月末、550ドル/トン台半ばで推移。9月に入り、中国の景気減速や新型コロナウイルス感染対策のための都市封鎖による米国産大豆の輸入需要の減退懸念等から540ドル/トン前後まで値を下げたものの、USDAの9月需給報告で米国の生産量が市場の予想以上に下方修正されたこと等から9月中旬に570ドル/トン近くまで値を上げた。その後、世界的な景気減速への懸念や米国で収穫期を迎えたこと等から値を下げ、9月下旬現在、540ドル/トン台前半で推移。

（注）小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 600 万トン下方修正され 27.6 億トン。消費量は、前月予測から 50 万トン下方修正され 27.8 億トン となり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を下回り 27.7%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦で上方修正、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.6 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正、とうもろこしで下方修正され、穀物全体で上方修正され、27.8 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦は上方修正、とうもろこし、コメで下方修正され、4.9 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.8 億トンと前月予測から下方修正、期末在庫率は、前月予測から下方修正された。

（注：数値は9月の USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による）

IV 2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.4 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トン となり、生産量が消費量を上回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を上回り、18.9%となる見込み。

（注：数値は9月の USDA「Oilseeds: World Markets and Trade」による）

V 今月の注目情報：中国・インド・パキスタンの穀物生産・貿易動向

本年は世界各国で干ばつや洪水などが発生しており、EUでは、500年に一度とも言われる干ばつで穀物生産に影響があったとみられている。中国でも中部から南部の長江流域で8月に40度を超える高温・乾燥となり、その後洪水も発生した。更に、インド北東部のガンジス川流域でも6月から7月にかけて少雨となったため、インド政府は小麦に続き、コメについても輸出規制を導入した。一方、パキスタンでは6月以降の豪雨等から史上最悪とも言われる洪水が発生した。ウクライナの黒海経由での穀物輸出が再開されたが、各国の天候不順により穀物生産・貿易が影響を受けるとみられることから、今回はアジア諸国の穀物の生産・貿易動向と世界の穀物貿易への影響についてまとめた。

注 文中の「2022/23 年度」等は穀物年度で、中国の小麦は 2022 年 7 月から 2023 年 6 月。国や作物によって異なる(品目別需給編 P. 27 参照)。

1 中国

(1) 天候の状況と穀物生産への影響

9月6日の国家気象局によるプレスリリースによれば、8月は高温・乾燥となった。このため、中国全土の平均気温は 22.4 度と平年より 1.2 度高くなり、1961 年以降史上最高となった。また、平均降水量は 82.4 ミリで平年より 23.1%下回り、史上 3 番目に少なかった。

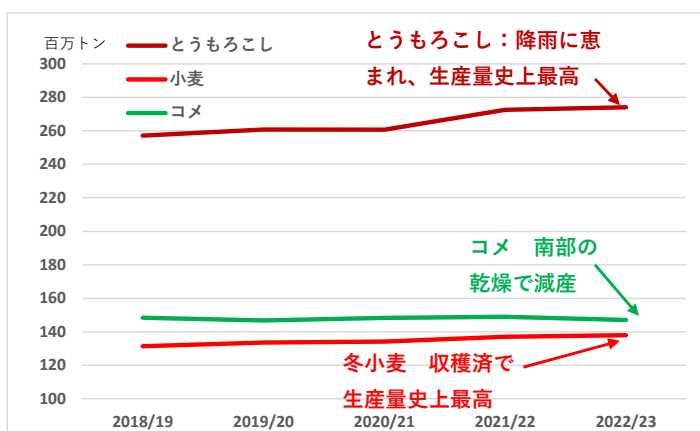
特に中国中部から南部にかけての四川省や重慶市など長江流域で、気温が 40 度を超える日が継続する等、高温・乾燥の影響が大きく、インディカ種(主に長粒)のコメなどの生育に影響があったとみられる。なお、8月下旬には逆に洪水となった。USDA の 9 月予測では、この高温・乾燥の影響により生産量が 200 万トン下方修正され 1 億 4,700 万トンの見通し。

一方、華北から東北にかけては降雨に恵まれ、とうもろこしや大豆、ジャポニカ種(中・短粒)への影響は少なかったとみられている。とうもろこしの生産量見通しは、逆に 300 万トン上方修正され 2 億 7,400 万トンと史上最高の生産量が見込まれている。また、華北平原の冬小麦はすでに収穫が終了しており、春小麦と合わせ史上最高の 1 億 3,800 万トンが見込まれており、この高温乾燥の影響はないとみられる。

(2) 今後の穀物貿易への影響

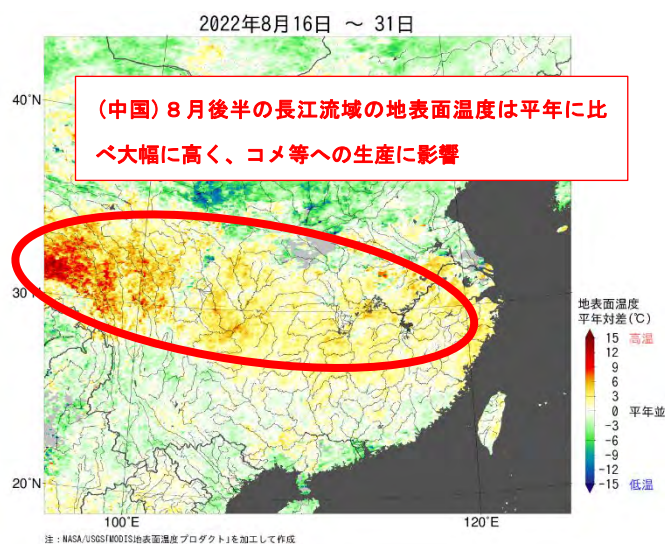
中国政府は、この干ばつ被害に対し、8月末に 100 億元(約 2000 億円)の追加支援策を公表している。USDA によれば、コメの生産量は下方修正されたものの、輸入量については 8 月

図 1 中国のコメ、小麦、とうもろこしの生産量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」(2022. 9)

図 2 中国の干ばつの様子 (JASMAI より)



見通しから上方修正はされていない。また、とうもろこしや大豆への影響が軽微とみられるため、今のところ輸入増は報告されていない。むしろ、コロナの感染拡大によるロックダウンが地域によって継続しており、経済成長の見通しも不透明なことから、USDA によれば、2022/23 年度の大豆の輸入量は 100 万トン下方修正され 9,700 万トンの見通し。

2 インド

(1) 天候の状況と穀物生産への影響

3 月から 4 月にかけての高温により、成熟期から収穫期の小麦に影響があり、インド政府は、当初 1 億 1,100 万トンの生産を見通していたが、5 月以降見通しが引き下げられた。最新の見通しでは 1 億 300 万トンとなっている。

加えて、6 月以降のモンスーンの降雨不足でインド北東部のガンジス川流域のウッタル・プラデーシュ州等（コメ主産地）でカリフ米（雨季米）の作付けが遅れた。米国農務省の 9 月見通しでは 8 月の見通しから 200 万トン下方修正され、前年度比 2.9% 減の 1 億 2,650 万トンとなる見通し。

(2) 今後の穀物貿易への影響

インドは、小麦の減産見通しを受け、輸入国の食料安全保障に支障がある場合を除き、5 月に小麦を輸出禁止とした。さらに 9 月 9 日から、コメの減産見通しに伴ない、碎米の輸出禁止と、高品質のバスマティ米やパーボイルド米を除く精米等に対し 20% の輸出税を導入した。

USDA によれば、関税賦課の対象外となるバスマティ米は年間 430 万トン輸出され、パーボイルド米は、2022 年 1 月から 7 月までで 410 万トン輸出されていた。パーボイルド米は圧力をかけ蒸したコメで、インドの一部、バングラデシュ、アフリカの一部、サウジアラビアで消費されている。

図3 インドのコメ、小麦の生産量・輸出量の推移

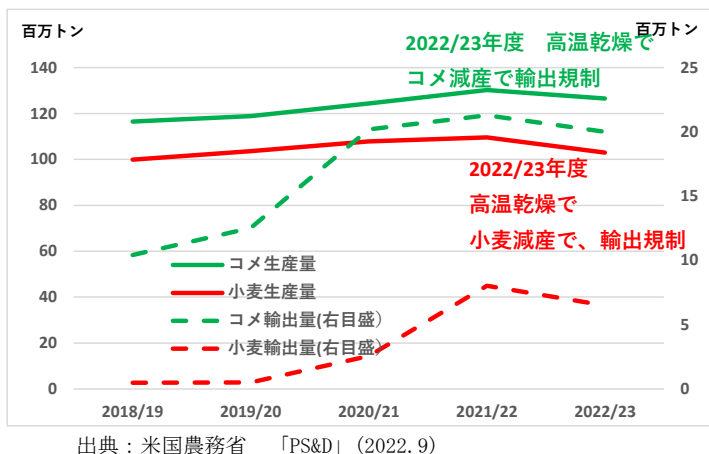
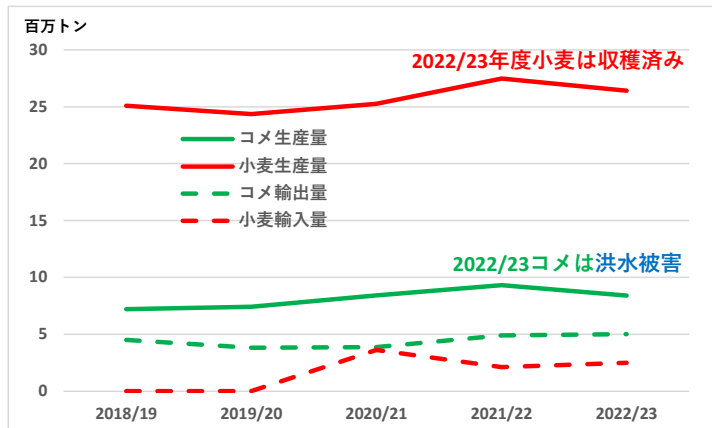
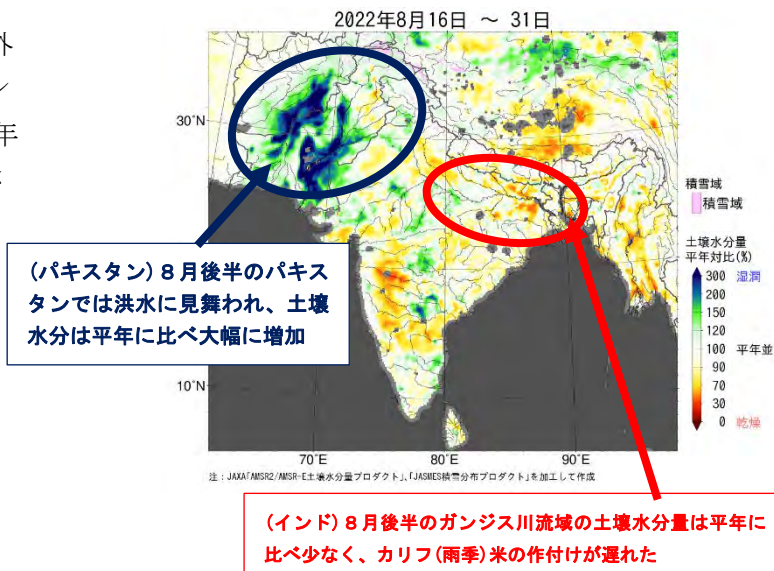


図4 パキスタンのコメ、小麦の生産量・貿易量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 9)

図5 インドの干ばつとパキスタンの洪水（JASMAI より）



3 パキスタン

(1) 天候の状況と穀物生産への影響

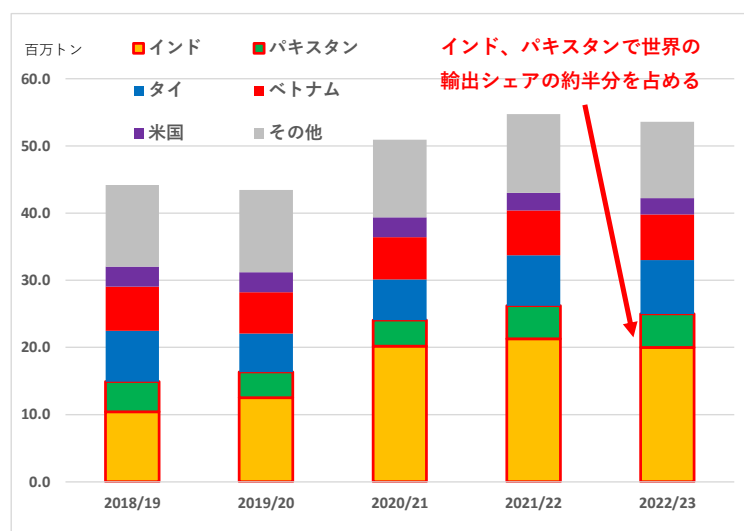
報道などによると、6月以降モンスーンによる降雨過多に加え、インダス川上流地域の氷河が溶けたことから大規模な洪水となり、8月末時点で国土の1/3が被災したとみられている。USDAのGAINレポート(農務官報告)(9月2日)などによると、洪水被害の大きいのは南部のシンド州とみられる。

USDAによれば、同州の生産シェアはパキスタンのコメの4割、小麦の1～2割程度を占めている。穀物生産シェアが最も大きいのはパキスタン東部のパンジャブ州で、コメは5割、小麦は8割を占めている。USDAの9月報告書によれば、これから収穫期を迎える2022/23年度のパキスタンのコメ生産量は8月予測の890万トンから洪水被害により50万トン下方修正され、840万トンと見込まれている。一方、小麦については、2022/23年度の小麦の収穫は既に終了しており、10月以降洪水の水が引かなければ、2023/24年度の作付けに支障が出るとみられるが、主産地のパンジャブ州は被災を免れたとみられている。

(2) 今後の穀物貿易への影響

USDAの9月見通しで、洪水被害によりコメの生産量は下方修正されたが、世界の輸出量の1割を占める輸出量はインドの輸出規制による代替需要から10万トン上方修正され、500万トンとなった。一方、小麦については今のところ2023/24年度の小麦生産量への影響は限定的とみられる。

図4 世界の主要コメ輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」(2022.9)

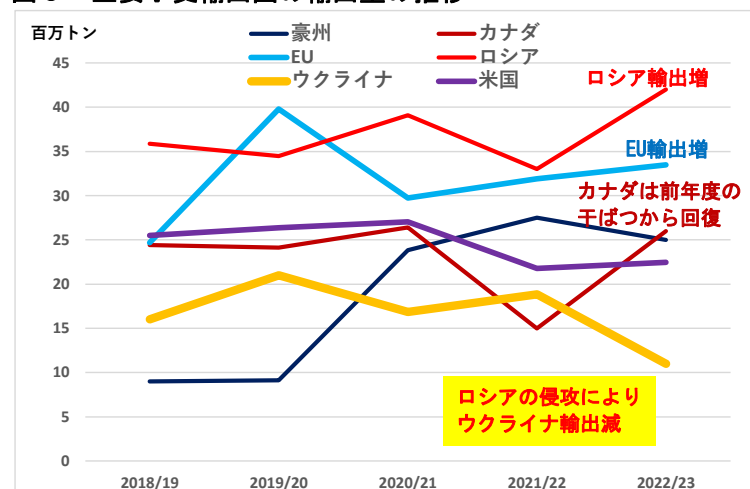
4 世界の穀物貿易への影響

(1) コメ

インドとパキスタンのコメの輸出シェアは合計すると世界のコメ貿易の約半分を占めており、今後のコメ貿易への影響が懸念されている。

パキスタンについては、2022/23年度産のコメの被害状況や、輸出インフラへの影響等についての詳細の把握がまだ進んでいないとみられる。ただ、現地報道によると、シンド州では60万ヘクタールの圃場のうち40万ヘクタールが水没、パキスタン全体で圃場の約70%が被災し、650万トンが収穫不能となった模様。

図5 主要小麦輸出国の輸出量の推移



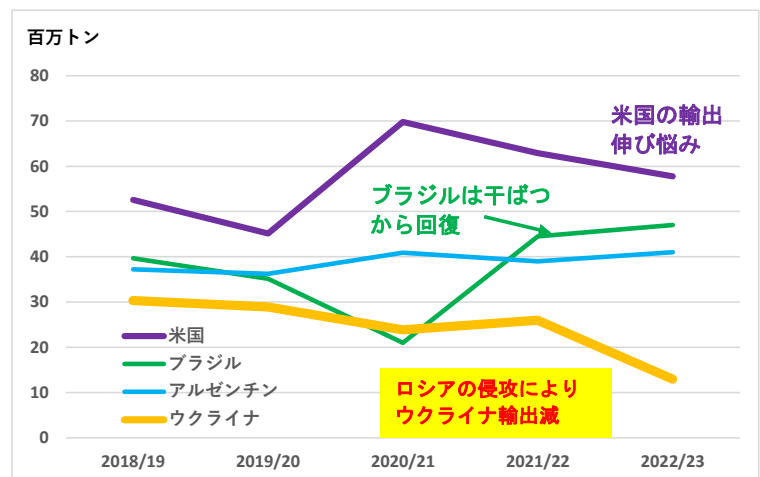
出典：米国農務省 「PS&D」(2022.9)

インドは高価格で取引されているバスマティ米及びパーボイルド米を除くコメが規制の対象となっており、途上国向けなどへの影響が懸念されるところである。

なお、USDA の 9 月見通しによれば、インドの輸出規制に伴ないタイとベトナムの輸出見通しが上方修正された。

2007 年～2008 年の穀物価格高騰時には、インドによるコメと小麦の輸出規制に対応して、他のアジア諸国でコメの輸出規制を行った国もあった。このため、アジアのコメ輸出国への影響について今後注視が必要である。

図 6 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022.9)

(2) その他穀物への影響

パキスタンの 2023/24 年度の小麦の作付けが洪水により相当遅れるようであれば、今後、世界の小麦貿易にも一定の影響はあるとみられている。

更に中国は、大豆だけでなく、コメについても世界の最大コメ輸入国であり、特に飼料向けのとうもろこしや小麦価格が高水準で推移してきたため、インド産やパキスタン産の碎米を一部飼料向け等に輸入してきた。コメ輸出国のベトナムも飼料向け需要等に一部インド産米を輸入している。

最近、米国産小麦の増産見通し、4 者合意によるウクライナの穀物の輸出再開や、ロシア産小麦の豊作見通しもあり、8 月には、小麦の国際相場は 2 月のロシアのウクライナ侵攻前の水準までは下落した。しかし、上記のようなコメに代替されていた需要がインド産米の輸出規制などにより、小麦やとうもろこしに戻ってくる可能性も想定される。コメの世界の貿易量は 5,000 万トン前後と、2 億トン近くに上る小麦やとうもろこしと比べて少ないが、引き続き穀物の貿易状況に注視が必要である。

【参考】“ジャスマイ”とは？

■農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）

農林水産省が提供する農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）は、国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構（JAXA）と米国航空宇宙局の衛星観測データを活用し、海外の主要穀物生産地帯における穀物・農作物の生育に関わる気象データ及び作物生育指標データを地図上やグラフ形式で提供している。これは、世界の主要穀物の生育状況のモニタリングなどに活用可能で、2003年1月～直近までのデータを公開している。JASMAIが提供するデータは農林水産省HP上で一般に公開されており、無償で閲覧可能。

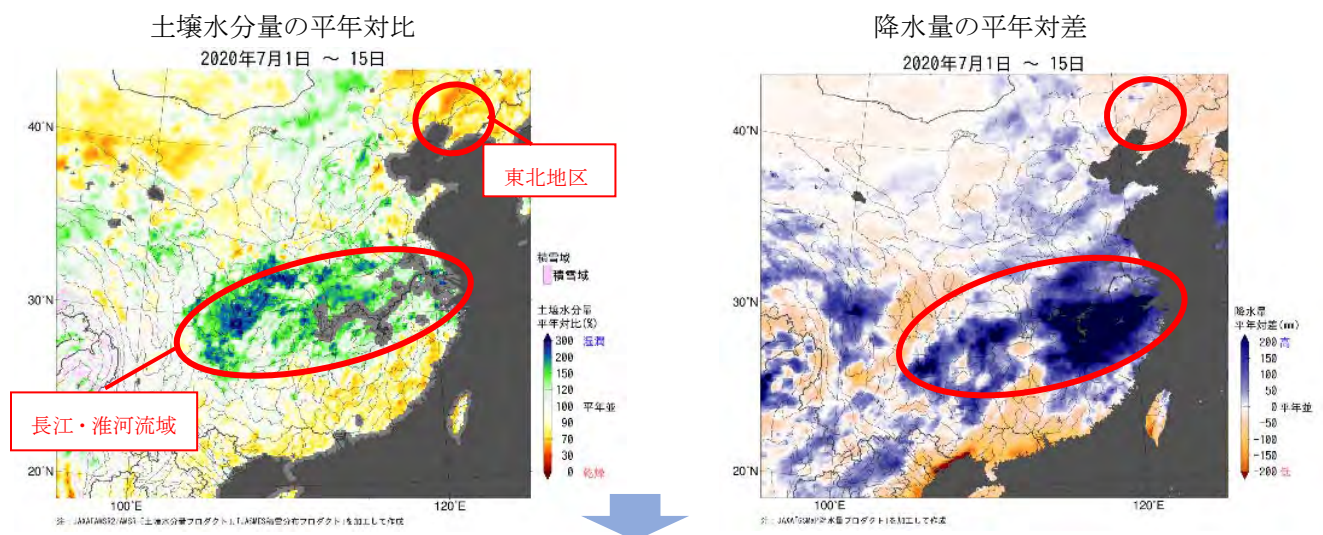
○農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）：https://jasmai.maff.go.jp/climate_map/

※JASMAIの画像・データを利用する際は、ユーザーガイドの記載に基づき出典を明示する必要。

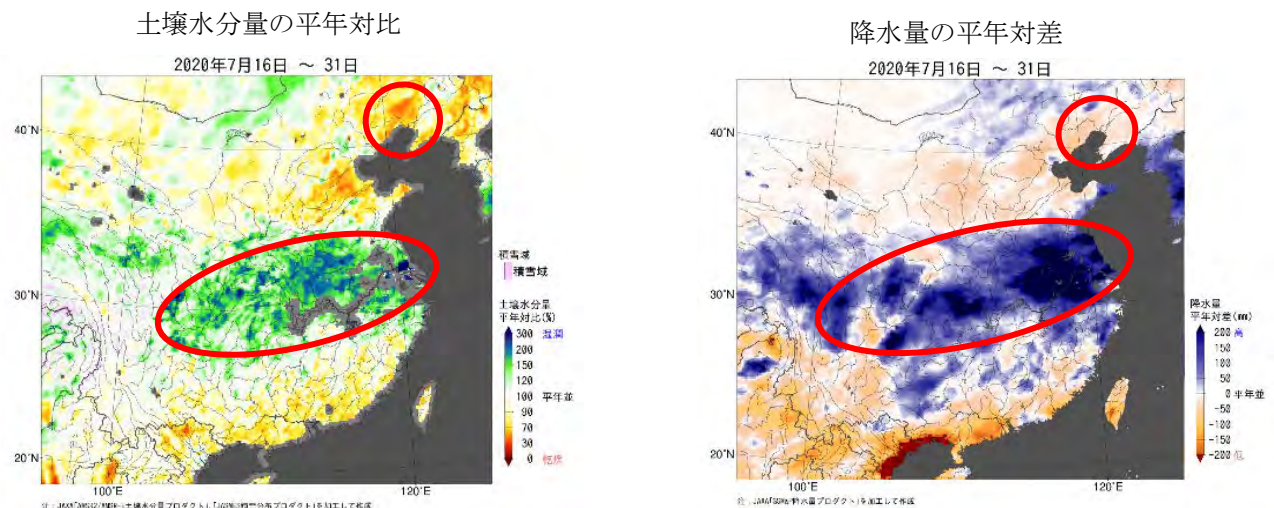
【活用事例】2020年7月中国の降雨状況をモニタリング

JASMAIの降水量年対比および土壌水分年対比の地図データを活用することで、中国の長江・淮河流域の豪雨の状況と、東北地区の降雨不足の状況を把握（海外食料需給レポート2020年8月号の報告時に掲載）。

○2020年7月1日～15日



○2020年7月16日～末日

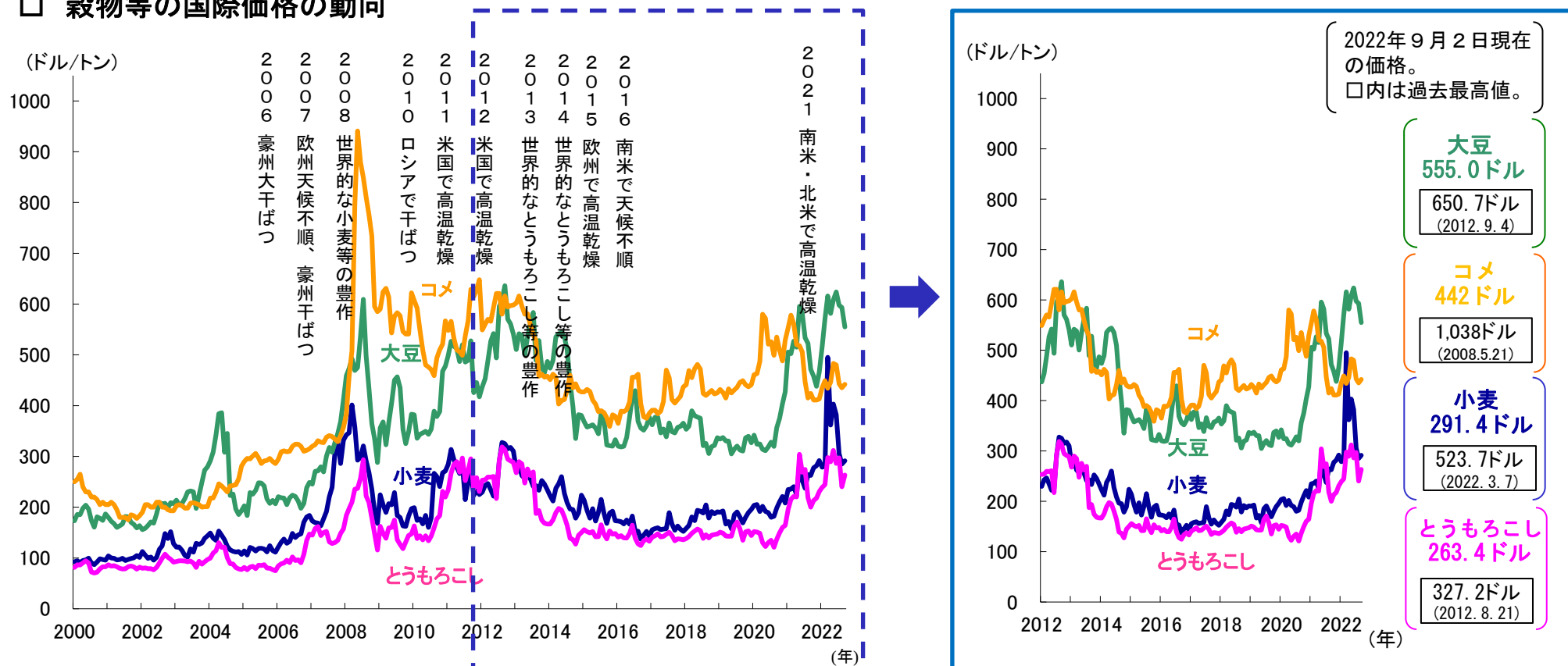


【参考】海外食料需給レポート2020年8月号（URLhttps://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/monthly/attach/pdf/r2index-19.pdf）

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



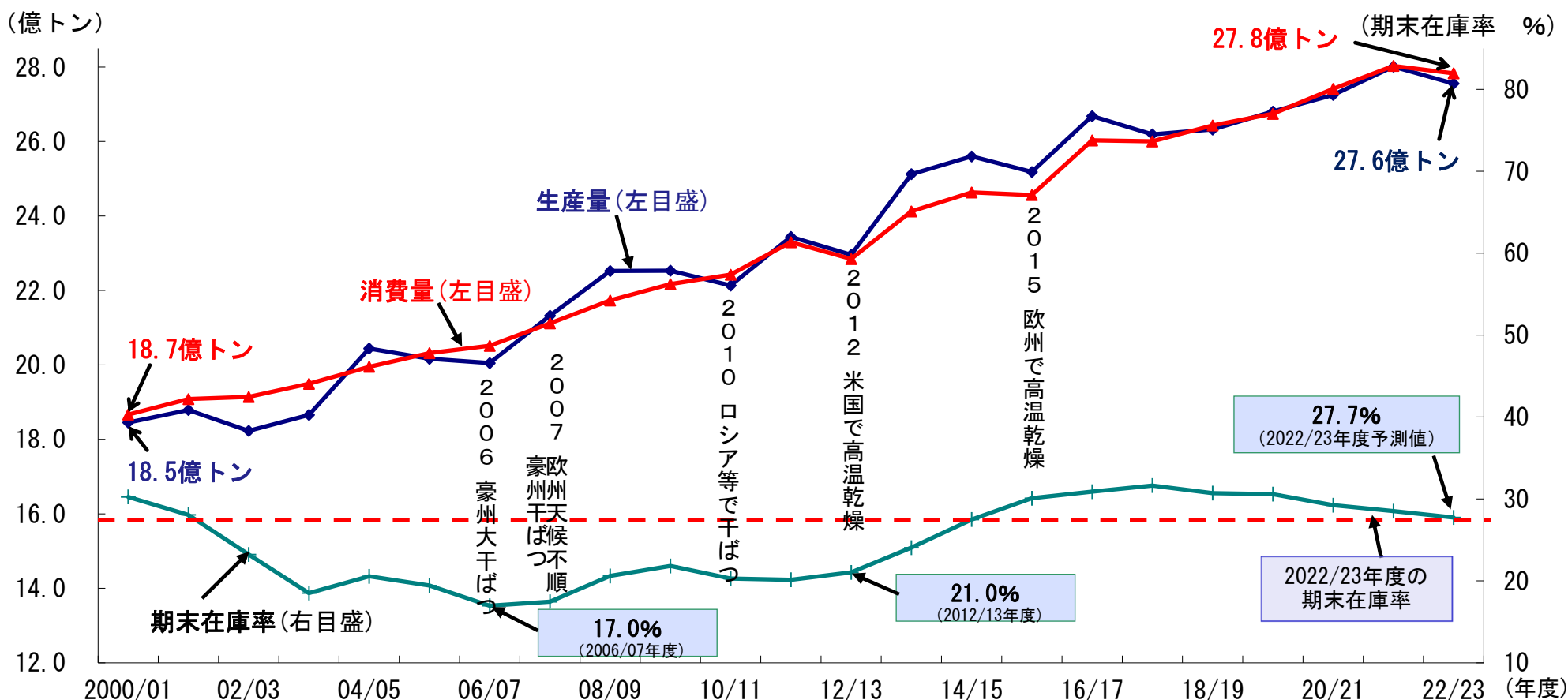
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。なお、コメの2022年9月2日現在の価格は、8月31日の価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.7%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

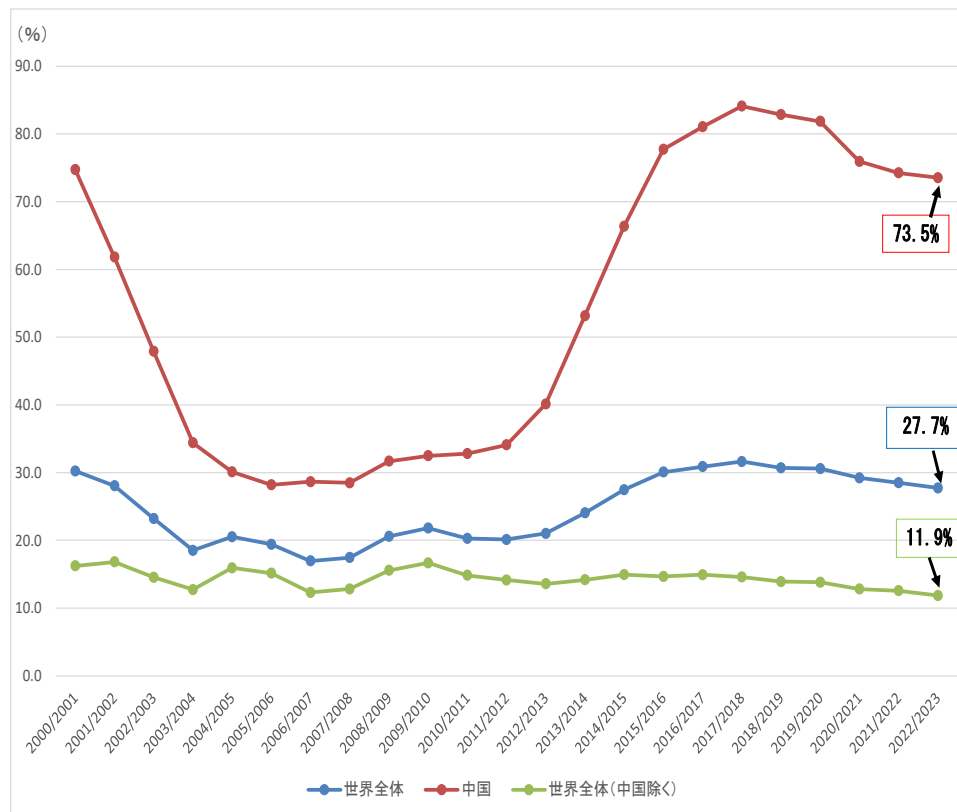


資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (September 2022)、「PS&D」

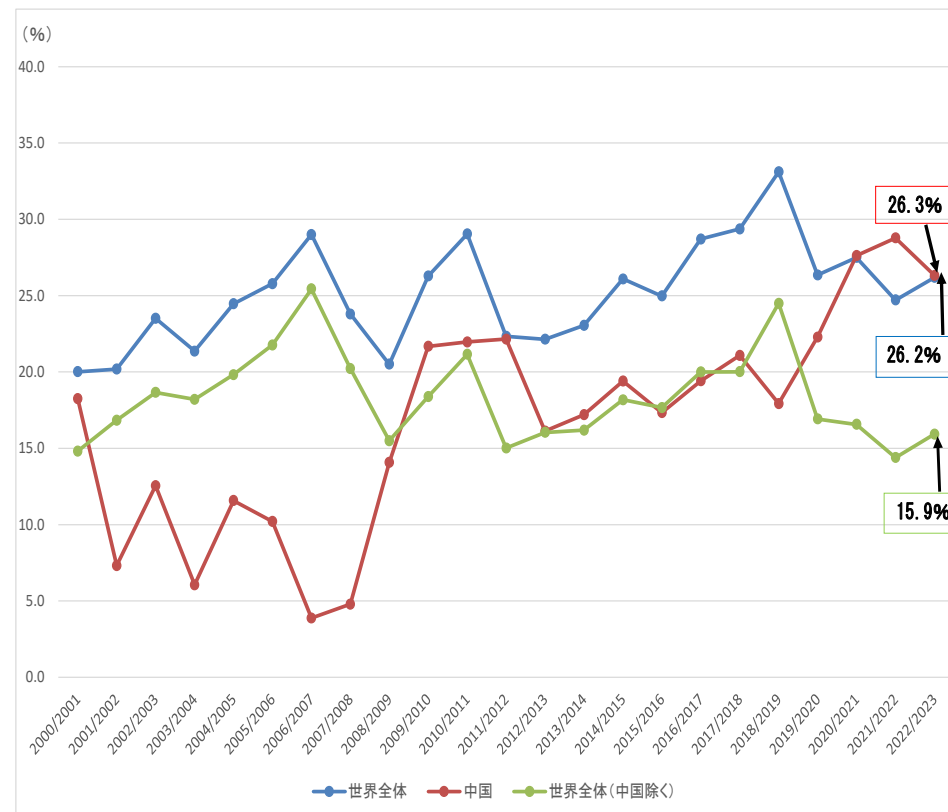
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(September 12, 2022)

注：1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

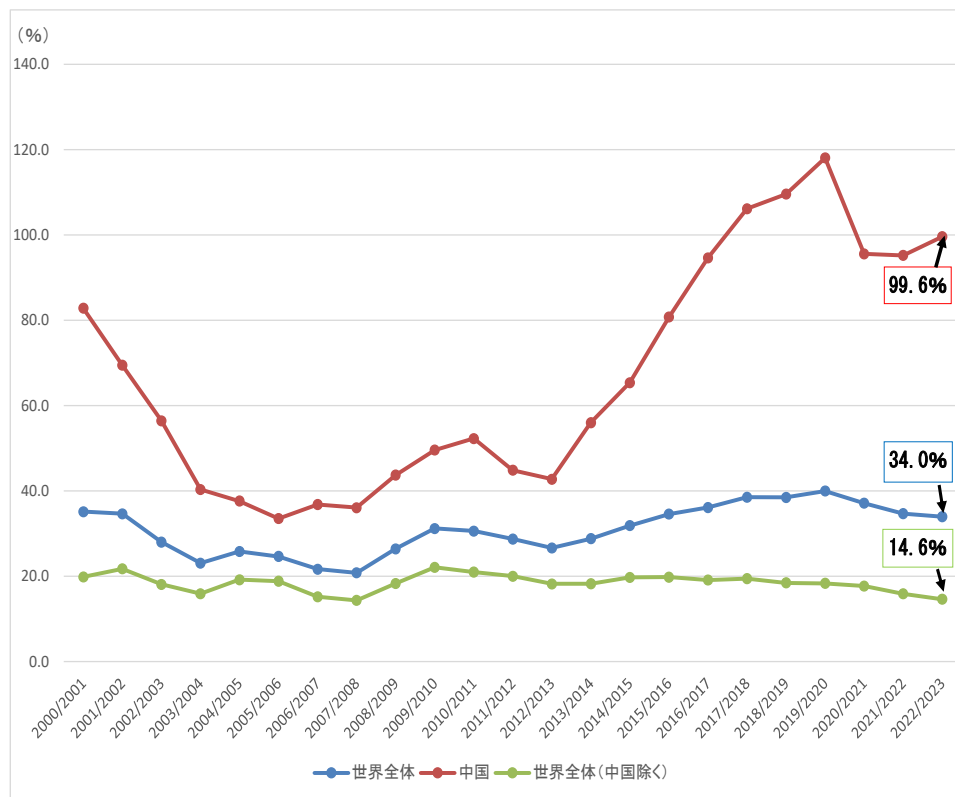
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

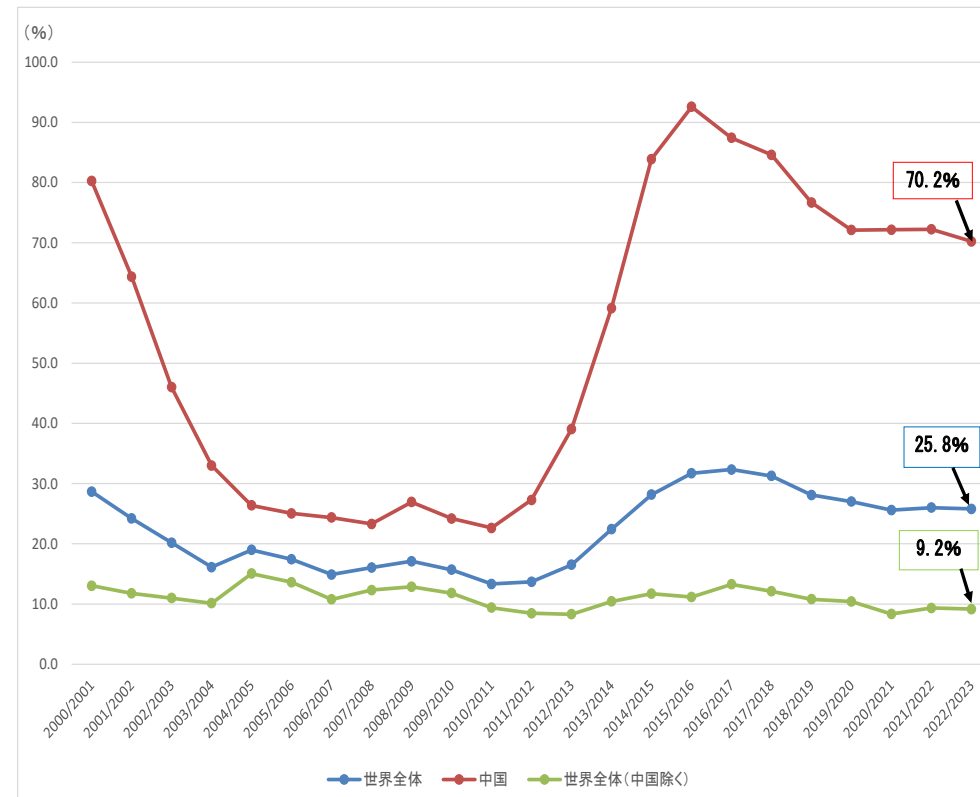
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(September 12, 2022)

注：1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

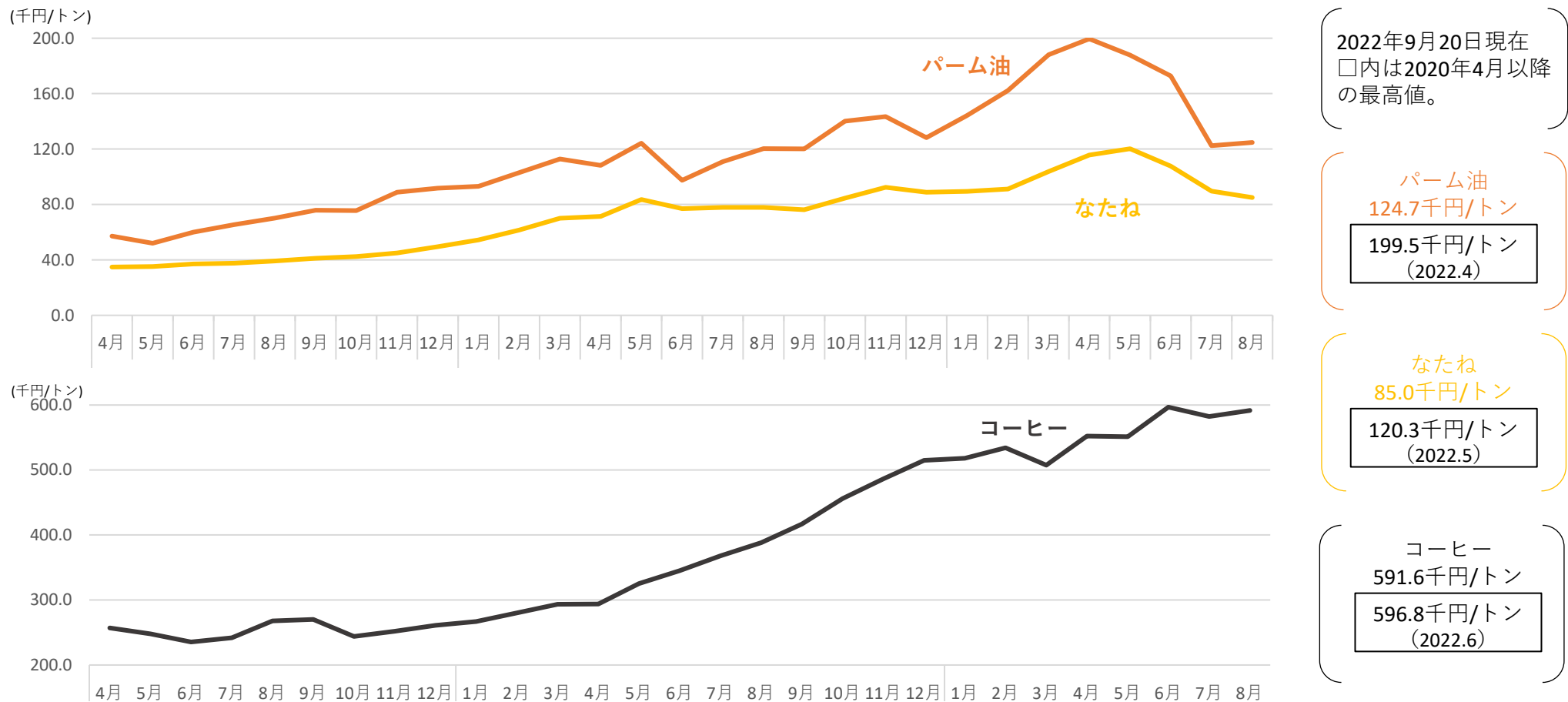
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の影響などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダで減産があったものの、作付・生育状況が良好であり、平年並みの収量が見込まれている。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置の解除（５月２３日）やマレーシアの生産量の増加予測が価格に影響を及ぼしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。

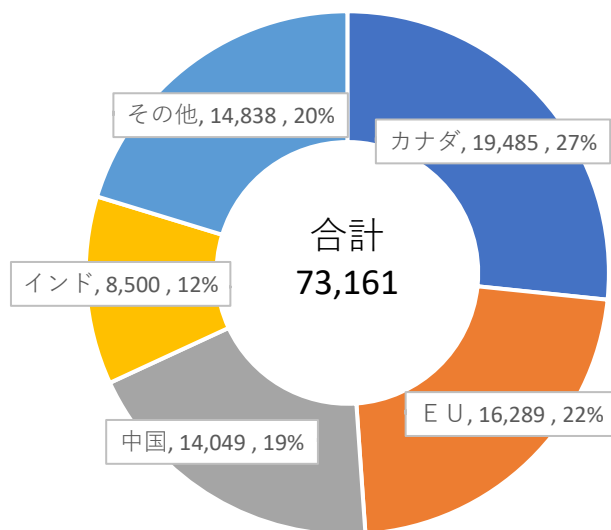


※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

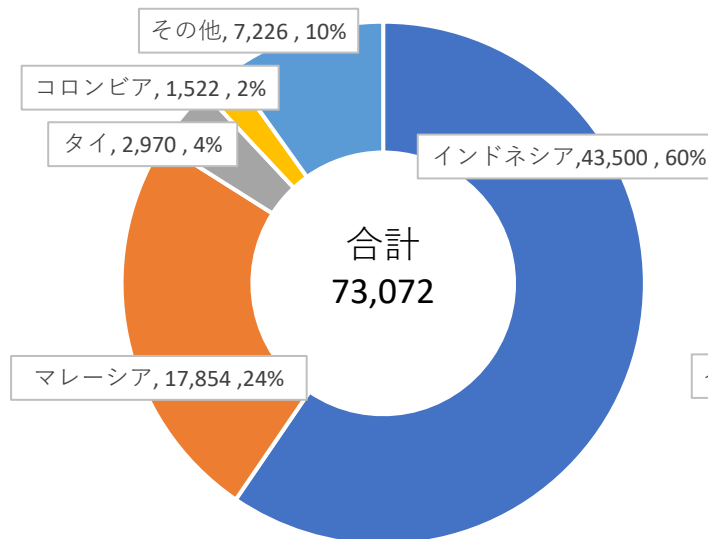
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



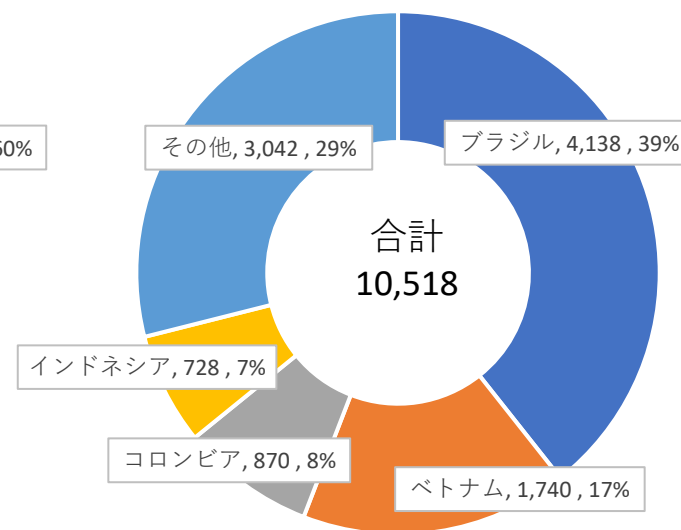
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	35.7%
ベトナム	101	24.6%
コロンビア	48	11.7%
その他	115	28.0%
合計	399	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11-22）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年										2021年												2022年							
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年										2021年												2022年							
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年							
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
コーヒ一	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6
前年同月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和4年8月の国内の加工食品の消費者物価指数は99.4～150.4（前年同月比で－0.3%～39.3%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和4年3月～令和4年8月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	3月	4月	5月	6月	7月	8月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.6	100.2	101.1	100.0	99.2	107.2	108.0	107.5	107.9	111.9	114.4	15.0%
即席めん	95.7	95.3	98.5	100.0	100.1	100.9	100.1	100.1	110.0	113.7	114.9	14.6%
豆腐	98.6	98.8	99.1	100.0	101.3	102.9	103.1	104.0	104.7	104.9	105.1	4.3%
食用油 (キャノーラ油)	102.7	101.5	100.9	100.0	106.9	132.2	134.8	135.4	139.2	145.8	150.4	39.3%
みそ	96.9	97.4	99.1	100.0	99.3	99.9	100.7	101.0	99.8	99.9	100.1	1.2%
マヨネーズ	102.3	100.8	100.7	100.0	105.6	120.3	123.9	126.1	125.0	125.2	126.5	14.7%
チーズ	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	99.3	103.0	105.3	104.0	106.2	106.6	5.9%
バター	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.7	99.1	99.5	99.3	99.1	99.4	-0.3%
生鮮食品を 除く食料	97.0	97.9	99.0	100.0	100.2	101.9	102.4	102.6	103.2	103.8	104.2	4.1%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査（農林水産省） （令和4年3月～令和4年9月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4								
品目	平均	平均	平均	平均	平均	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.6	97.9	101.3	100.0	98.6	104.6	105.1	104.6	105.9	109.8	111.1	110.7	-0.4%	12.0%
即席めん	92.6	92.4	97.9	100.0	99.2	99.0	99.0	99.0	110.0	111.2	111.2	110.0	-1.1%	11.1%
豆腐	100.8	100.1	100.9	100.0	100.6	102.0	101.6	102.4	102.9	103.3	103.7	104.2	0.5%	-0.8%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	97.9	103.5	100.0	104.1	126.4	129.6	130.8	132.7	139.1	148.3	156.8	5.7%	43.9%
みそ	91.9	96.6	100.4	100.0	99.2	98.4	99.0	99.6	98.8	99.8	100.4	101.7	1.3%	-1.0%
マヨネーズ	99.1	97.9	103.1	100.0	102.2	112.1	117.2	117.2	118.3	117.2	118.3	116.9	-1.2%	9.7%
チーズ	95.2	98.6	100.9	100.0	98.1	98.6	105.0	104.5	105.0	105.0	104.5	108.0	3.3%	4.9%
バター	98.8	99.0	99.5	100.0	99.8	99.7	99.3	99.3	99.3	99.0	99.3	98.6	-0.7%	-0.9%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

- 独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）
- 2022年10月号（9月26日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）22年上半期の牛肉輸出量は過去最高を記録

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002388.html

（豪州）牛肉輸出量、日本向けは米国産に押され大幅減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002392.html

（ブラジル）22年牛肉輸出量は前年を大幅に上回って推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002393.html

◆豚肉

（米国）22年上半期豚肉輸出量、ラテンアメリカ向けが好調

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002394.html

（EU）豚枝肉卸売価格は高水準で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002395.html

（中国）豚肉価格は急激な上昇を見せるも、需給は安定の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002396.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆鶏肉

（米国）鶏肉卸売価格は下落傾向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002389.html

（ブラジル）22年鶏肉輸出量は増加傾向で推移、輸出単価は大幅高

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002397.html

（中国）22年上半期の生産量はわずかに減少、価格は上昇基調

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002398.html

◆牛乳・乳製品

（EU）22年上半期の生乳出荷量は前年同期を下回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002399.html

（豪州）21/22年度の生乳生産量、前年度よりやや減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002400.html

（NZ）22/23年度の生乳生産量、前年割れの見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002401.html

◆飼料穀物

（世界）22/23年度の世界のトウモロコシ、期末在庫は前年度並みの見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002424.html

（世界）南米での生産増などから大豆期末在庫は1億トン台の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002391.html

（米国）22/23年度の米国トウモロコシ、在庫率は10%を割り込む見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002402.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002404.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2022.9)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量 前年度比 前月比

- ・ロシア、ウクライナ等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

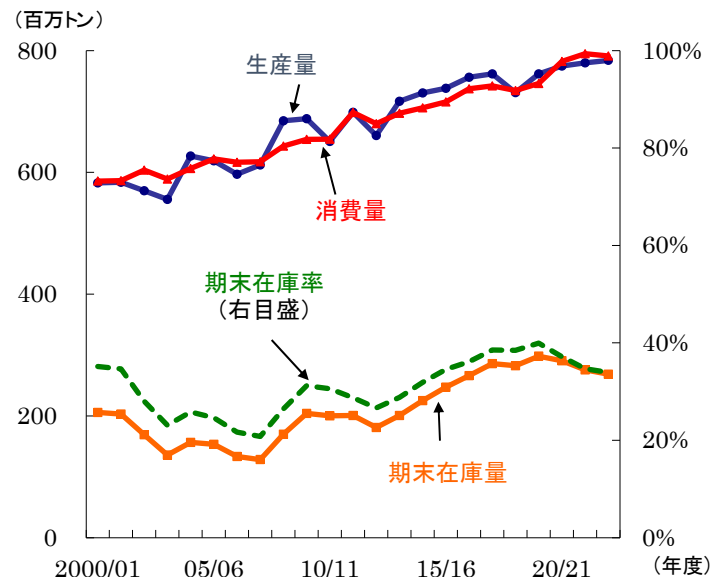
消費量 前年度比 前月比

- ・EU、ロシア、ウクライナ等で上方修正され、前月から上方修正された。

輸出量 前年度比 前月比

- ・ブラジル等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 前月比



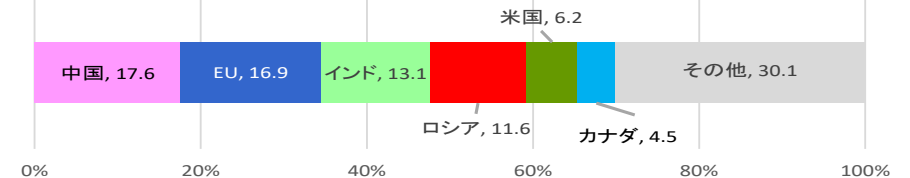
◎世界の小麦需給

(単位: 百万トン)

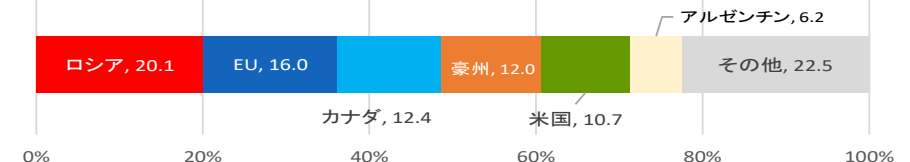
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	774.5	779.9	783.9	4.3	0.5
消 費 量	782.2	794.8	791.0	2.4	▲ 0.5
うち飼料用	157.9	161.0	155.2	2.4	▲ 3.6
輸 出 量	203.4	203.2	208.9	0.2	2.8
輸 入 量	195.4	198.0	204.1	0.3	3.1
期末在庫量	290.6	275.7	268.6	1.2	▲ 2.6
期末在庫率	37.1%	34.7%	34.0%	0.1	▲ 0.7

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (12 September 2022)

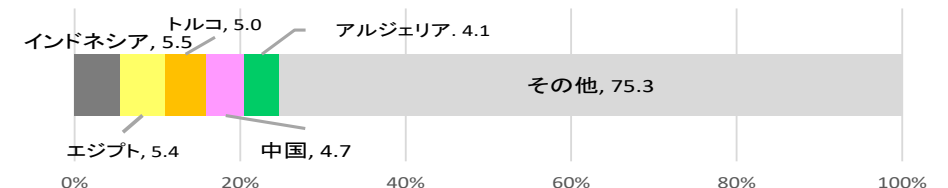
○ 2022/23年度の世界の小麦の生産量(783.9百万トン)(単位: %)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸出量(208.9百万トン)(単位: %)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸入量(204.1百万トン)(単位: %)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は冬小麦が減少するものの春小麦が回復し前年度を上回る

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、冬小麦、デュラム小麦、春小麦とも前月予測からの変更はなく、前年度に比べ8.3%増の48.5百万トンの見込み。

作期別には、冬小麦の生産量は、主要産地での干ばつの影響により収穫面積と単収が減少し、32.6百万トン(前年度34.8百万トン)と、前年度に比べ6.2%減少する見込み。

一方、春小麦及びデュラム小麦の生産量は、収穫面積と単収が増加し、前年度の干ばつによる減産から回復し、それぞれ、13.9百万トン(同9.0百万トン)、2.0百万トン(同1.0百万トン)と前年度に比べ54.5%増、97.4%増となる見込み。なお、2022/23年度の春小麦、デュラム小麦の生産量とも、それぞれの5年平均13.7百万トン、1.6百万トンを上回っている。

2022/23年度の春小麦の播種は主要産地のプレーンズ北部のミネソタ州、ノースダコタ州等を含め降雨過多により遅れたものの、小麦価格が堅調なことから6月中旬から下旬にかけ大部分の産地で播種が急速に進んだ。この播種の遅れにより、発芽や出穂の進捗率は例年を下回り、全体的に生育は遅れたものの、温暖な天候により生育の遅れは緩和された。その後、生育が順調に進み、急速に収穫が進展している。

「Crop Progress」(2022.8.22、9.19)によれば、9月18日時点の春小麦の主要生産6州の収穫進捗率は94%と、前年度同期(100%)を下回っているものの、5年平均(94%)並となっている。なお、8月21日時点で冬小麦の収穫は、収穫進捗率が95%となりほぼ終了した。

また、2023/24年度の冬小麦の作付けが開始されており、9月18日時点の主要生産18州の作付進捗率は、21%と前年度(20%)、5年平均(17%)を上回っている。州別には、テキサス州で7ポイント、カンザス州で5ポイント5年平均を上回っている。

なお、同日時点の発芽進捗率は、2%と前年度の3%を下回るものの、5年平均並となっている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、22.5百万トンとなる見込み。8月の輸出量は2.1百万トンで、輸出先国はメキシコ(18.8%)、フィリピン(14.3%)、日本(13.5%)の順。

小麦一米国（冬小麦が全体の7割、春小麦は3割）

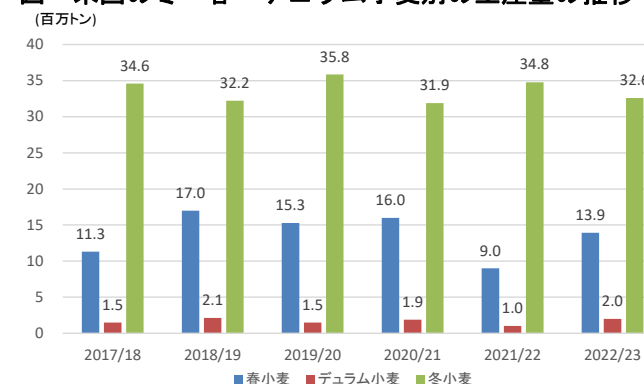
(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年6月～23年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	49.8	44.8	48.5	-	8.3
消費量	30.4	30.6	30.4	-	▲ 0.7
うち飼料用	2.5	2.6	2.2	-	▲ 15.2
輸 出 量	27.1	21.8	22.5	-	3.1
輸 入 量	2.7	2.6	3.0	-	15.4
期末在庫量	23.0	18.0	16.6	-	▲ 7.6
期末在庫率	40.0%	34.3%	31.4%	-	▲ 2.9
(参考)					
収穫面積(百万ha)	14.89	15.04	15.19	-	1.0
単収(t/ha)	3.34	2.98	3.20	-	7.4

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

「World Agricultural Production」(12 September 2022)

図 米国の冬・春・デュラム小麦別の生産量の推移



資料：USDA「NASS」のデータをもとに農林水産省で作成

図 米国産小麦の輸出先国別輸出量

2022年8月			2022年1月～8月		
国名	検証高(万トン)	シェア(%)	国名	累積検証高(万トン)	シェア(%)
メキシコ	39.3	18.8	メキシコ	274.5	20.4
フィリピン	30.0	14.3	フィリピン	170.2	12.6
日本	28.2	13.5	日本	153.2	11.4
韓国	16.4	7.8	韓国	84.2	6.2
イエメン	10.6	5.1	ナイジェリア	81.3	6.0
その他	69.4	33.1	その他	584.6	43.4
合計	209.3	100.0	合計	1,348.0	100.0

注1. 8月の輸出検証高は、8月11、18、25日、9月1日の合計値

注2. 2022年累積輸出検証高は、2022年1月6日～9月1日の合計

資料：USDA Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals (2022年9月9日)より作成。

< カナダ > 生産量は回復し、前年度比 55.6%増、過去 5 年平均比 14.3%増

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2022.9.23)によれば、2022/23 年度の小麦全体の生産量は、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、34.7 百万トンの見込み。カナダ西部の干ばつにより生産量が減少した 2021/22 年度に比べ、収穫面積と単収の引き上げから、55.6%増加する見込み(過去 5 年平均対比 14.3%増)。

このうち、普通小麦は、収穫面積、単収の引き上げから、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され 28.6 百万トン(前年度対比 48.4%増、過去 5 年平均対比 12.1%増)。デュラム小麦は、収穫面積の引き下げから、前月予測から 0.1 百万トン下方修正されたものの 6.1 百万トン(前年度対比 101.3%増、過去 5 年平均対比 20.6%増)。なお、普通小麦の生産量のうち、春小麦は前年度に比べ 60%増加の 26.1 百万トン、冬小麦は同 16%減少の 2.5 百万トン。

カナダ統計局「Model-based principal field crop estimates August 2022」(2022. 9. 14)によると、2022/23 年度の主要生産地別の生産量は、サスカチュワン州で前年度に比べ 74.0%増加の 15.4 百万トン、アルバータ州で同 80.1%増加の 11.6 百万トン、マニトバ州で同 37.8 %増加の 5.2 百万トン。

主要生産各州の政府報告によれば、サスカチュワン州の収穫進捗率は 9 月 5 日現在、冬小麦が 84%、春小麦 40%、デュラム小麦 70%である。マニトバ州では、9 月 6 日現在、冬小麦が 98%、春小麦が 31%である。なお、同州東部地域の冬小麦のサンプルでは、カビの一種であるフザリウムの発生率が高くなっている。アルバータ州では、9 月 6 日現在、春小麦が 39.2%、デュラム小麦が 73.0%である。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2022/23 年度の小麦全体の輸出量は、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、前年度に比べ 53.4%増加の 23.2 百万トン。そのうち、普通小麦は前月予測から 0.2 百万トン上方修正され 18.2 百万トンと、生産量の回復と輸出価格の低下から、前年度に比べ 46.6%増加の見込み。デュラム小麦は、前月予測からの変更はなく 5.0 百万トンと、生産量の回復、輸出価格の低下と高温・乾燥で作物が影響を受けた欧州や北アフリカ(特に不順な天候により減産となったモロッコ)等の需要から、前年度に比べ 84.1%増加。カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2021/22 年度(2021 年 8 月~2022 年 7 月)の輸出量は普通小麦が 11.5 百万トン、デュラム小麦は 2.6 百万トンの計 14.1 百万トン。輸出先国は、普通小麦が日本(13.8%)、インドネシア(11.1%)、デュラム小麦は、モロッコ(27.5%)、米国(15.6%)の順。

小麦－カナダ(春小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

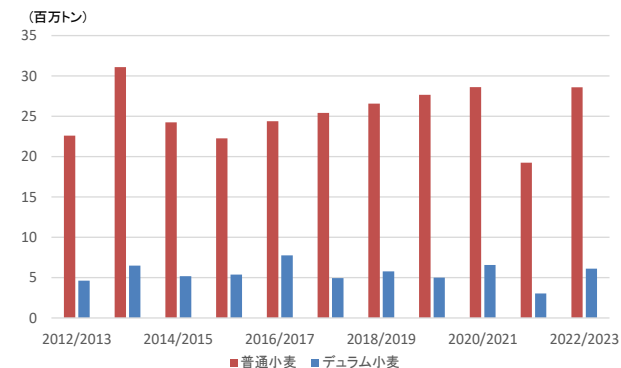
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	35.4	22.3	35.0 (34.7)	-	57.0
消費量	9.1	10.2	9.1 (9.0)	-	▲ 10.6
うち飼料用	4.2	5.2	4.0 (4.6)	-	▲ 22.8
輸 出 量	26.4	15.0	26.0 (23.2)	-	73.3
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	-
期末在庫量	6.0	3.7	4.2 (6.3)	0.3	13.6
期末在庫率	16.7%	14.6%	11.9% (19.6%)	0.7	▲ 2.7

(参考)

収穫面積(百万ha)	10.02	9.19	10.00 (10.06)	-	8.8
単収(t/ha)	3.54	2.43	3.50 (3.45)	-	44.0

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2022)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(23 September 2022)

図 カナダ産普通小麦、デュラム小麦の生産量の推移



資料: カナダ農務農産食品省(AAFC)にデータをもとに農林水産省で作成

写真 カナダの小麦圃場(サスカチュワン州、マニトバ州)



写真(左) サスカチュワン州(2022 年 8 月 25 日)
前年度より収穫が 2 週間遅れているものの、秋の穏やかな
気候による単収増加が期待されている。
写真(右) マニトバ州(2022 年 9 月 5 日)
収穫中の小麦は、主にパンに使用される Starbuck 品種。

＜ 豪州 ＞ 生産量は史上 2 番目の 33.0 百万トンの見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は前月予測からの変更はなく、33.0 百万トンと史上最高の前年度(36.4 百万トン)を 9.2%下回るものの、過去 5 年平均を 36.0%上回る。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2022.9.6)によれば、2022/23 年度の実産量は 32.3 百万トンと史上最高の前年度を 11%下回るものの、史上 2 番目となる見込み。

主要生産州別の生産量は、ニューサウスウェールズ州(NSW 州)では、10.2 百万トンと前年度に比べ 20%減少するものの、過去 5 年平均を 50%上回る。作付期には天候に恵まれたものの、一部地域では 6 月に降雨過多となった。今後も平均以上の降雨が続くと収穫の遅延や、品質低下の可能性はある。西オーストラリア州(WA 州)では、史上最高であった前年度に比べ 14%減少の 11.0 百万トン。5 月、6 月の理想的な生育条件で作付けが順調に進んだ。6、7 月の降雨量は平年を下回ったものの、気温が平年を上回り生育が促進した。7 月後半と 8 月の降雨で単収は良好となる見込み。

GIWA(西オーストラリア州穀物団体)(2022.9.9)によれば、2022/23 年度の WA 州の実産量は 10.8 百万トン(前月 10.3 百万トン、前年度 12.9 百万トン)の見込み。また、2022/23 年度は、資材価格の高騰で作付面積が減少すると予想されている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は前月予測からの変更はなく、25.0 百万トンの見込み。前年度(27.5 百万トン)に比べ 9.1%減少するものの、前年度に次ぐ史上 2 番目の輸出量となる。ABARES によれば、2018/19 年度～2020/21 年度の干ばつ後、十分な輸出余力、価格競争力と中国、インドネシア、フィリピン、ベトナム等の需要増から豪州産小麦は輸出市場を拡大した。

豪州統計局によれば、2022 年 7 月の輸出量は 2.6 百万トンと、前月(2.8 百万トン)に比べ減少。輸出先国シェアは 26.6%で中国が第 1 位。また、2022 年 1 月から 7 月までの輸出量は 18.1 百万トン。輸出先国は、中国(22.0%)、インドネシア(12.5%)、フィリピン(11.0%)、ベトナム(10.9%)の順。

豪州は、輸出量計の約 56%をこれらのアジア諸国に輸出しているが、特に中国向けの輸出量が増加している。

なお、前年度の北米産小麦の減産やカナダ産菜種の不作により、豪州産穀物等への需要は高い。このため、ウクライナからの黒海経由の輸出が再開されたこと等から緩和が期待されるものの、穀物等輸出のサプライチェーンの状況や豪州産穀物等の作柄について引き続き注視が必要。

小麦－豪州 (冬小麦を主に栽培) (単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年10月～23年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	31.9	36.4	33.0 (31.0)	-	▲ 9.2
消 費 量	8.0	8.5	8.6 (8.3)	-	0.6
うち飼料用	4.5	5.0	5.0 (4.6)	-	-
輸 出 量	23.9	27.5	25.0 (24.2)	-	▲ 9.1
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.4)	-	-
期末在庫量	3.0	3.5	3.2 (3.3)	0.0	▲ 10.0
期末在庫率	9.3%	9.7%	9.4% (10.1%)	0.1	▲ 0.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	12.64	13.04	13.10 (13.2)	▲ 0.10	0.5
単収(t/ha)	2.52	2.79	2.52 (2.35)	0.02	▲ 9.7

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2022)
IGC 「Grain Market Report」(18 August 2022)

図 豪州産小麦の実産量の推移(生産上位 3 州及び全州計)

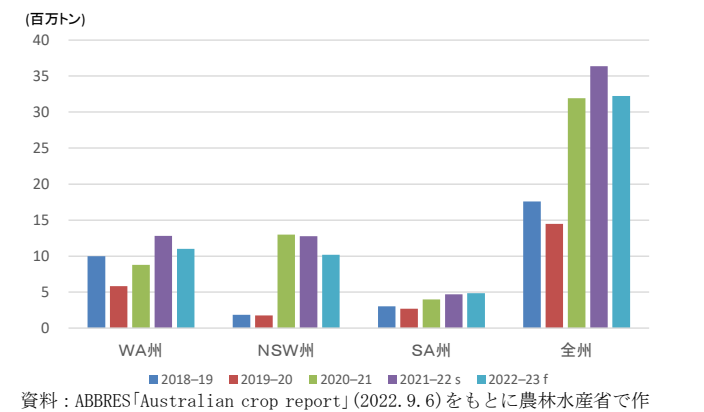


表 豪州産小麦の輸出先国別輸出量

2022年7月			2022年1月～7月		
国名	輸出量(万トン)	シェア(%)	国名	累積輸出量(万トン)	シェア(%)
中国	69.3	26.6	中国	396.9	22.0
ベトナム	38.5	14.8	インドネシア	226.1	12.5
インドネシア	38.0	14.6	フィリピン	199.3	11.0
フィリピン	30.9	11.9	ベトナム	196.8	10.9
韓国	17.2	6.6	韓国	118.8	6.6
その他	66.5	25.5	その他	669.6	37.0
合計	260.4	100.0	合計	1,807.5	100.0

資料:豪州統計局のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ EU27+英国 ＞とうもろこし等の代替で、小麦の飼料用需要が上方修正

【生育・生産状況】欧州委員会(2022.8.25)によれば、EU27 の 2022/23 年度の生産量は、前月予測に比べ 2.1 百万トン上方修正され、前年度に比べ 3.5%減少の 134.2 百万トンの見込み。

そのうち、普通小麦の生産量は、ハンガリー等で下方修正されたものの、フランス、ポーランド等で上方修正されたことから、前月予測に比べ 2.1 百万トン上方修正の 127.0 百万トン。デュラム小麦は、フランス等でわずかに上方修正されたことから、前月予測からわずかに上方修正の 7.2 百万トン。

また、USDA によれば、EU27 の生産量は、前月予測からの変更はなく前年度に比べ 4.5%減少の 132.1 百万トン、英国の生産量は前月予測からの変更はなく前年度に比べ 4.4%増加の 14.6 百万トン。

なお、7 月、8 月のスペイン、フランス、イタリア等での高温・乾燥状態により、とうもろこしの生産量が大幅に下方修正されたものの、収穫期を迎えた小麦への被害は限定的であったと見られる。また、この高温の影響で平年より早く生育・収穫が進み、フランスを始めヨーロッパの多くの国で収穫が終了した。

ドイツ連邦食料・農業省によれば、8 月 24 日時点のサンプル調査の結果、タンパク質含有量は 11.8% と前年度(12.7%)を下回っているものの、容積重は 78.8 キログラム/ヘクトリットルで前年度(76.5 キログラム/ヘクトリットル)を上回った。また、8 月 23 日時点のフランス産普通小麦の格付けは、サンプル調査の結果、A1:12%(5年平均 38%) A2:42%(同 29%) A3:29%(同 29%) A4:17%(同 4%) と、5年平均に比べると最下位格付けの A4 の比率が高くなっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の EU27 の消費量は、高温・乾燥状態によりとうもろこし価格が上昇しており、相対的に安価となった小麦の飼料用需要が前月予測に比べ 1.0 百万トン上方修正され 51.6 百万トンの見込み。また、輸出量は、前月予測からの変更はなく、33.5 百万トンと 7 月に高温乾燥の影響を受けたものの、前年度に比べ 5.0%増加する見込み。なお、小麦の国内の飼料用需要の増加からこれまでの堅調な輸出ペースが低下する可能性もある。

欧州委員会によれば、2021/22 年度(2021 年 7 月~2022 年 6 月)の輸出量は、普通小麦が 28.1 百万トン(過去 5 年平均 24.2 百万トン)、デュラム小麦が 1.1 百万トン(同 1.1 百万トン)。輸出先国は、普通小麦がアルジェリア(18.5%)、エジプト(10.0%)、デュラム小麦がチェンジア(43.0%)、アルジェリア(14.8%)の順であり、ともにアフリカ諸国が中心となっている。

小麦－EU27+英国 (冬小麦を主に栽培) (単位：百万トン)

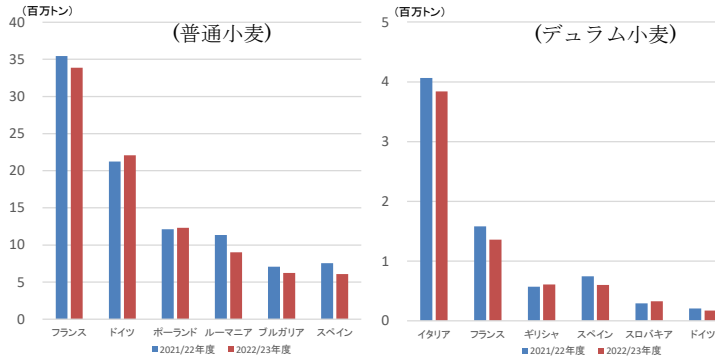
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	136.4	152.3	146.7 (146.6)	-	▲ 3.7
消 費 量	118.2	123.7	123.6 (121.1)	1.0	▲ 0.0
うち飼料用	48.5	52.4	51.6 (48.1)	1.0	▲ 1.5
輸 出 量	30.2	32.7	34.5 (6.9)	-	5.4
輸 入 量	8.6	7.2	7.5 (38.2)	-	3.6
期末在庫量	12.1	15.2	11.3 (12.7)	▲ 0.6	▲ 25.6
期末在庫率	8.2%	9.7%	7.2% (9.9%)	▲ 0.1	▲ 2.6

(参考)

収穫面積(百万ha)	22.97	25.64	25.80 (25.64)	0.01	0.6
単収(t/ha)	5.94	5.94	5.69 (5.72)	-	▲ 4.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2022)
IGC 「Grain Market Report」(18 August 2022)
表内及び () 内のデータはEU27+国+英国のデータ

図 EU27 産小麦生産量(普通小麦、デュラム小麦)の推移



EC(欧州委員会)「Cereals Production Area and Yield」(2022.8.25)をもとに農林水産省で作成。

表 EU27 の普通小麦、デュラム小麦の輸出先国別輸出量

(普通小麦)			(デュラム小麦)			(万吨、%)		
2022年6月			2021/22年度(※)			2022年6月		
国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア	国名	輸出量	シェア
アルジェリア	52.7	22.2	アルジェリア	521.3	18.5	チェンジア	1.6	43.2
モロッコ	37.1	15.7	エジプト	280.4	10.0	コートジボワール	0.5	13.5
ナイジェリア	31.6	13.3	ナイジェリア	228.2	8.1	スイス	0.4	10.8
パキスタン	16.8	7.1	中国	221.5	7.9	サウジアラビア	0.3	8.1
カメルーン	8.1	3.4	モロッコ	211.6	7.5	セネガル	0.2	5.4
イラン	6.9	2.9	ヨルダン	87.3	3.1	米国	0.1	2.7
その他	83.7	35.3	その他	1,261.7	44.9	その他	0.6	16.2
計	236.9	100	計	2,812.0	100.0	計	3.7	100.0

※2021/22年度は2021年7月～2022年6月。

EC(欧州委員会)「Cereals exports and imports」(2022.8.31)をもとに農林水産省で作成。

＜ 中国 ＞ 7月の小麦輸入先国は豪州が99.7%を占めた

【生育・生産状況】中国糧油情報センター(2022.9.5)によれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ1.1%増加の138.4百万トン(見込み)。作期別には、冬小麦、春小麦とも前月予測からの変更はなく、生産量はそれぞれ131.9百万トン(対前年度0.4%増)、6.5百万トン(同17.7%増)の見込み。

中国中央气象台(2022.9.5)によれば、冬小麦は、中国全土で収穫が終了しており、冬小麦の品質は、容積重等で分類された中国国家標準の1～2級に格付けされた割合が大幅に増加している模様で、前年度に比べ良好と見られる。また、春小麦は、内モンゴルの一部等で成熟期であるものの、ほぼ収穫が終了している。

【貿易情報・その他】中国糧油情報センターによれば、輸入量は前月からの変更はなく、前年度(9.6百万トン)から18.4%減少の7.8百万トン(見込み)。

中国海関統計によれば、2022年7月の輸入量は、前年度同期(88.2万トン)を12.4%下回る77.3万トンで、輸入先国は豪州が99.7%を占めている。また、2022年1月～7月の輸入量は、前年度同期(622.6万トン)を8.8%下回る568.0万トンで、輸入先国は、豪州、フランス、カナダが99.7%を占めた。また、前年度豪州産とほぼ同量の輸入があった米国産の輸入実績はほぼない。

現地情報会社によれば、中国で生産される小麦のほとんどが普通小麦のため、パン等の原材料となる高品質小麦の一部を輸入に依存している。なお、USDAによれば、中国の小麦輸入量は、2020/21年度に10.6百万(前年度5.4百万トン)に達し、その後2年間は9.0百万トン台で推移している。

現地情報会社によれば、輸入量の増加の要因は、アフリカ豚熱の影響を受けた畜産業の急速な回復による飼料需要増から、輸入量を増加させたと見られている。

また、期末在庫量は前月予測からの変更はなく、史上最高に近い144.4百万トンと、ほぼ年間の需要量に相当する量であるとともに、世界の53.8%を占めると見込まれる。

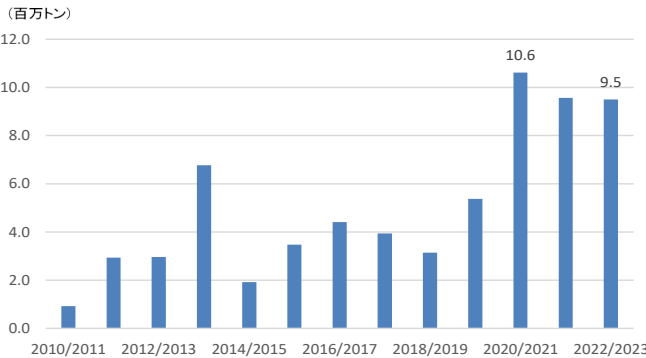
農業農村部「農産品供需形勢分析月報2022年7月号」によれば、7月は、国内市場において、新穀小麦が集中的に市場に出回り、供給は十分である一方、小麦粉は不需要期にあり、かつ国際小麦価格が大幅に低下したため、国内小麦価格は低下した。今後の国内小麦価格は、新穀小麦の十分な供給で、国内小麦需給は余裕があるため、高止まりしながら小幅に上下すると見られる。

小麦—中国(冬小麦を主に栽培)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	134.3	137.0	138.0 (138.0)	-	0.8
消 費 量	150.0	148.0	144.0 (141.1)	-	▲ 2.7
うち飼料用	40.0	35.0	30.0 (26.5)	-	▲ 14.3
輸 出 量	0.8	0.9	0.9 (1.1)	-	2.3
輸 入 量	10.6	9.6	9.5 (8.4)	-	▲ 0.7
期末在庫量	144.1	141.8	144.4 (137.5)	-	1.8
期末在庫率	95.6%	95.2%	99.6% (96.7%)	-	4.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	23.38	23.57	23.60 (23.6)	-	0.1
単収(t/ha)	5.74	5.81	5.85 (5.84)	-	0.7

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2022)
IGC「Grain Market Report」(18 August 2022)

図 中国の小麦輸入量の推移



資料:USDA「PS&D」(2022.9.12)のデータをもとに農林水産省で作成

表 中国の小麦輸入量及び輸入先国

2022年7月			2022年1月～2022年7月			2021年1月～2021年12月		
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア
豪州	77.0	99.7	豪州	375.5	66.1	豪州	273.4	28.1
カザフスタン	0.1	0.2	フランス	144.5	25.5	米国	272.6	28.1
カナダ	0.1	0.2	カナダ	46.1	8.1	カナダ	254.0	26.1
-	-	-	カザフスタン	1.7	0.3	フランス	141.6	14.6
-	-	-	ロシア	0.2	0.0	カザフスタン	18.7	1.9
-	-	-	米国	0.0	0.0	ウズベキスタン	6.6	0.7
その他	-	-	その他	0.0	0.0	その他	2.9	0.3
計	77.3	100	計	568.0	100	計	971.8	100

資料:中国海関統計(2022.8.20)をもとに農林水産省で作成資料

＜ ロシア ＞ 生産量は前月から 3.0 百万トン上方修正され史上最高の 91.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量(クリミア地域分を含まず)は、史上最高の単収から、前月予測から 3.0 百万トン上方修正され、91.0 百万トンと前年度に比べ 21.1%増加し、史上最高となる見込み。ロシア・ヨーロッパ部北部の中央連邦管区、沿ボルガ連邦管区の単収は、例年、南部の南連邦管区等に比べ低いものの、本年度は生育早期の良好な生育条件から高水準である。

作期別の生産量は、冬小麦は単収の引き上げから、前月予測に比べ 3.0 百万トン上方修正され 68.0 百万トン、春小麦は前月予測からの変更はなく 23.0 百万トンの見込み。前年度に比べ、冬小麦は冬の枯死も少なく生育状況が良好であったため 30.3%増加、春小麦は 0.2%増加した。

9 月現在、冬小麦の収穫はほぼ終了し、春小麦の収穫が開始された。

ロシア農業省の速報値によれば、9 月 2 日時点で、収穫済み面積は 22.2 百万ヘクタール、収穫進捗率は 75.4%となり、重量調整前の収穫量は 88.2 百万トン(前年度同時期 32.9%増)である。

また、2023/24 年度の冬穀物の作付が開始され、9 月 9 日時点の作付済み面積は、対前年度同期 11.3%減の 13.0 百万ヘクタール。現地情報会社によれば、肥料価格の高騰から、生産者は肥料使用量を減らすと見られる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、豊富な期首在庫に加え生産量が上方修正されたものの、前月予測からの変更はなく前年度に比べ 27.3%増加の 42.0 百万トンの見込み。

現地情報会社によれば、8 月の輸出先国は、エジプト(22.4%)、イラン(12.7%)、トルコ(11.6%)の順で、中東、アフリカ諸国向けが多い。

USDA によれば、輸出関税の賦課や 2022 年 2 月 15 日から 6 月 30 日まで 800 トンの輸出枠の設定など、2021 年度半ばから実施された輸出規制で 2023/23 年度のロシアの期首在庫は増加している。一方、2022/23 年度の輸出量は増加し始めているものの、ウクライナ侵攻に伴う対ロシア制裁による物流等の問題、さらに輸出関税賦課の継続から 2022/23 年度の輸出は緩やかな開始となっている。今後、EU(小麦生産量の減少に加え、飼料用とうもろこしの代替として小麦を消費)や、ウクライナ(生産量の減少に加え、輸出制約に直面)に代わり、ロシアの月々の輸出量は増加するとともに、ロシアは、アルジェリア等の新規輸出先を開拓し輸出市場を広げると見られる。なお、ロシア穀物同盟によれば、ロシア産穀物の輸出制約は、輸出関税よりも、大型輸送船の不足等と見ている。

小麦一口ロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培) (単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	85.4	75.2	91.0 (87.6)	3.0	21.1
消 費 量	42.5	42.8	45.0 (45.1)	1.0	5.3
うち飼料用	19.0	19.5	21.0 (20.0)	1.0	7.7
輸 出 量	39.1	33.0	42.0 (36.6)	-	27.3
輸 入 量	0.4	0.3	0.3 (0.2)	-	-
期末在庫量	11.4	11.1	15.4 (17.3)	1.0	38.8
期末在庫率	13.9%	14.6%	17.7% (21.2%)	1.0	3.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	28.68	27.63	28.70 (-)	-	3.9
単収(t/ha)	2.98	2.72	3.17 (-)	0.10	16.5

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2022)
IGC 「Grain Market Report」(18 August 2022)

図:ロシア産小麦の月別輸出量の推移

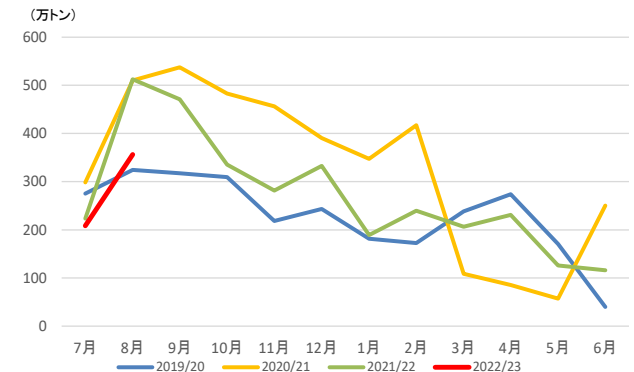


図:ロシア産小麦の輸出先国、輸出量

2022/23年度 (2022年8月)			2022/23年度 (2022年7月～2022年8月)			2021/22年度 (2021年7月～2022年6月)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
エジプト	79.9	22.4	エジプト	99.8	17.7	トルコ	641.5	19.7
イラン	45.2	12.7	イラン	87.0	15.4	イラン	626.6	19.2
トルコ	41.3	11.6	トルコ	81.1	14.4	エジプト	501.3	15.4
サウジアラビア	25.2	7.1	サウジアラビア	45.2	8.0	カザフスタン	217.3	6.7
カザフスタン	23.6	6.6	カザフスタン	42.2	7.5	アゼルバイジャン	95.4	2.9
イスラエル	19.1	5.4	イスラエル	28.1	5.0	サウジアラビア	90.4	2.8
パキスタン	12.2	3.4	リビア	20.2	3.6	ナイジェリア	75.5	2.3
その他	109.8	30.8	その他	161.0	28.5	その他	1,015.8	31.1
計	356.3	100.0	計	564.6	100.0	計	3,263.8	100.0

資料: 現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 生産量は前月予測から1.0百万トン上方修正の20.5百万トン

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、収穫がほぼ終了した結果、ウクライナ北部から中部にかけての森林及び森林ステップ地帯(右図)の単収が高いことから、前月予測から1.0百万トン上方修正され、20.5百万トンの見込み。

ロシアの侵攻により、前年度に比べ、収穫面積と単収が減少し、生産量は史上最高だった前年度(33.0百万トン)に比べ37.9%減少、過去5年平均に比べ26.6%減少する見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、冬小麦、春小麦とも収穫はおおむね終了し、9月23日時点で、2022/23年度の小麦全体の収穫面積は4.70百万ヘクタール、収穫進捗率は99%で、収穫量は19.2百万トン、単収は4.10トン/ヘクタールである。また、同省によれば、2023/24年度の冬小麦の播種が開始されており、9月5日時点の播種面積は、播種予定面積の0.1%に相当する5.2千ヘクタール。播種予定面積は、3.89百万ヘクタールと前年度(6.68百万ヘクタール)を41.9%下回る見込み。

現地情報会社によれば、生産者にとっての最大の問題は、肥料価格、燃料価格、輸送価格の値上りによる生産コストの高騰で、来年度の生産に向け農産物の販売価格は採算ぎりぎりの状態である。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ41.6%減少の11.0百万トンの見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、8月の穀物等の輸出総量は前月比で66%増加し、450万トンとなった。このうち、同月の小麦輸出量は、全輸送量の19.3%の90.0万トンと、7月の41.2万トンから増加したものの、前年度同月期(363.6万トン)、過去4年平均(318.5万トン)をそれぞれ88.7%、87.1%下回っている。なお、ロシアによるウクライナ侵攻で大幅に輸出は制限されていたものの、その後の鉄道路線や河川港の改修・再稼働、新輸出ルート開設、8月からの下記4者会議による黒海主要港湾の再稼働に伴う輸出能力の回復で輸出量は増加している。

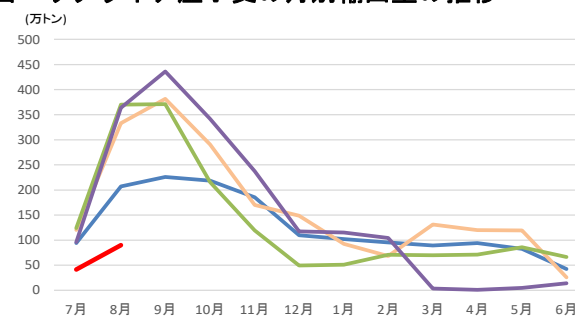
なお、7月22日、国連、ウクライナ、ロシア、トルコがウクライナ産穀物の黒海からの輸出再開に関する協定に署名。この4者合意を受けて、8月1日に黒海からの輸出が再開された。黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」(2022.9.15)によれば、9月15日現在、合意に基づく輸出量は325.9万トンで、そのうち小麦の輸出量は82.3万トンと全体の25.3%を占めている。輸出先国は、トルコ(27.9%)、スペイン(17.7%)、エジプト(10.9%)、スーダン(7.9%)の順。

小麦－ウクライナ (主に冬小麦を栽培) (単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	25.4	33.0	20.5 (19.4)	1.0	▲ 37.9	
消 費 量	8.7	10.0	10.7 (7.8)	0.5	7.0	
うち飼料用	2.6	4.0	5.5 (2.6)	0.5	37.5	
輸 出 量	16.9	18.8	11.0 (13.0)	-	▲ 41.6	
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	▲ 28.6	
期末在庫量	1.5	5.8	4.7 (5.9)	0.5	▲ 18.9	
期末在庫率	5.9%	20.1%	21.7% (28.2%)	1.7	1.6	

(参考)
 収穫面積(百万ha) 6.85 7.41 5.25 (-)
 単収(t/ha) 3.71 4.45 3.90 (-)
 資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
 「World Agricultural Production」(12 September 2022)
 IGC 「Grain Market Report」(18 August 2022)

図 ウクライナ産小麦の月別輸出量の推移



資料: ウクライナ農業政策食糧省、現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

図:ウクライナの森林地帯及び森林ステップ地帯



森林地帯: 混交林と低湿地に分けられ、部分的に酸性で栽培に向かない土壌もある。降水量は多く十分な施肥により、穀物や飼料作物の栽培が可能。
 森林ステップ地帯: ほぼ全域が農業利用されている。肥沃な黒土(チェルノーゼム)、適度な降水量と気温が作物の栽培に適している。小麦や大麦、トウモロコシなどの商品作物の生産が大半を占める。

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・中国、ウクライナ等で上方修正も、米国、EU 等で下方修正され、前月から下方修正された。

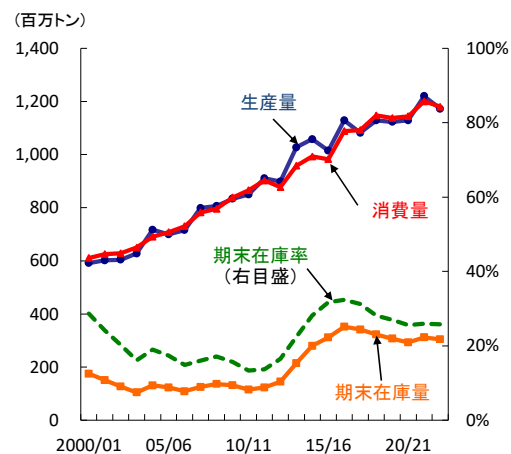
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ウクライナ等で上方修正も、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ウクライナで上方修正も、米国で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2022.9.12）をもとに農林水産省にて作成

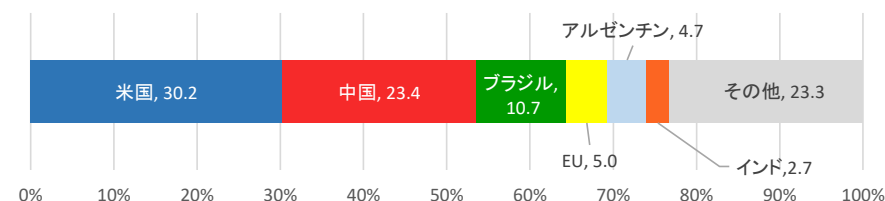
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

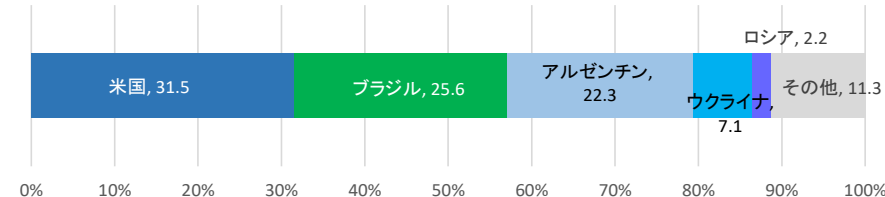
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率 (%)
生 産 量	1,129.3	1,219.8	1,172.6	▲ 7.0	▲ 3.9
消 費 量	1,144.0	1,200.4	1,180.2	▲ 4.6	▲ 1.7
うち飼料用	724.1	746.9	743.1	▲ 3.0	▲ 0.5
輸 出 量	182.6	203.3	183.6	▲ 2.0	▲ 9.7
輸 入 量	185.2	181.8	178.3	▲ 1.5	▲ 2.0
期末在庫量	292.8	312.1	304.5	▲ 2.2	▲ 2.4
期末在庫率	25.6%	26.0%	25.8%	▲ 0.1	▲ 0.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 September 2022）

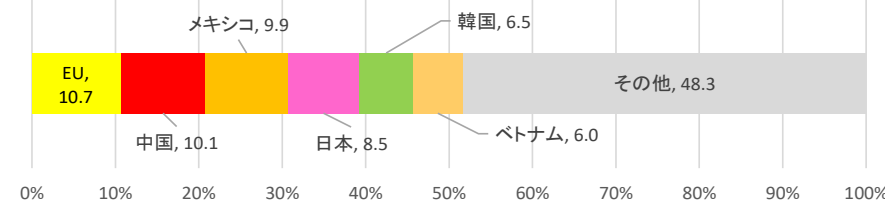
○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,172.6 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸出量(183.6 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸入量(178.3 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は収穫面積・単収減少により減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、コーンベルト西部における夏の広範囲の高温・乾燥による収穫面積及び単収の下方修正によって前月予測から 10.5 百万トン下方修正され、前年度より 7.7%減の 354.2 百万トンの見込み。収穫面積は、2015/16年度以来の低水準の見込み。

USDA「Crop Progress」（2022.9.19）によれば、主要 18 州におけるデント（穀粒に窪みができる段階）進捗率は 87%と前年度同期（92%）及び過去 5 年平均（88%）より遅れている。成熟進捗率は 40%と前年度同期（54%）及び過去 5 年平均（45%）より遅れている。収穫進捗率は 7 %と前年度同期（9 %）及び過去 5 年平均（8 %）より遅れている。作柄評価は、良からやや良が 52%と前年度同期（59%）を下回っている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測から 3.8 百万トン下方修正され、前年度より 3.0%減の 304.8 百万トンの見込み。生産量の減少による国内価格の上昇等から飼料用需要の下方修正に加え、エタノール用需要も下方修正されたことが要因。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の下方修正に伴い、穀物の豊作が見込まれるカナダ向け輸出を中心に前月予測から 2.5 百万トン下方修正され、前年度より 8.1%減の 57.8 百万トンの見込み。

USDAによれば、2022 年輸出検証高（2022 年 1 月 6 日～9 月 1 日）は、41.9 百万トンであり、内訳は中国（12.3 百万トン）、メキシコ（10.4 百万トン）、日本（7.9 百万トン）、コロンビア（2.7 百万トン）の順である。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、生産量の下方修正により前月予測から 4.3 百万トン下方修正され、前年度より 20.1%減の 31.0 百万トンで 2012/13 年度以降最低の見込み。期末在庫率は 8.5%で、前年度より低下し、引き続き低水準の見込み。

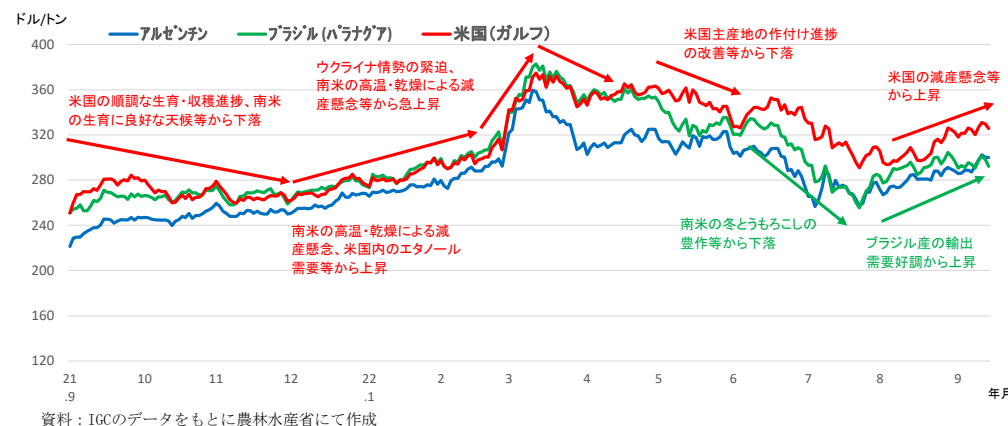
とうもろこし－米国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	358.5	383.9	354.2	▲ 10.5	▲ 7.7
消 費 量	306.7	314.3	304.8	▲ 3.8	▲ 3.0
うち飼料用	142.3	142.3	132.7	▲ 2.5	▲ 6.7
エタノール用等	127.8	135.4	135.3	▲ 1.3	▲ 0.1
輸 出 量	69.8	62.9	57.8	▲ 2.5	▲ 8.1
輸 入 量	0.6	0.6	0.6	－	－
期末在庫量	31.4	38.7	31.0	▲ 4.3	▲ 20.1
期末在庫率	8.3%	10.3%	8.5%	▲ 1.0	▲ 1.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	33.31	34.56	32.72	▲ 0.40	▲ 5.3
単収(t/ha)	10.76	11.11	10.83	▲ 0.18	▲ 2.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（12 September 2022）

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



＜ ブラジル ＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出増の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月に作付けが開始された 2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加により、前年度より 8.6% 増の 126.0 百万トンで史上最高の見込み。

なお、ブラジル食料供給公社（CONAB）月例報告（2022.9.8）によれば、2021/22 年度の実産量が終了した夏とうもろこしの生産量は、2020/21 年度比 1.0% 増の 25.0 百万トンの見込み。

一方、収穫終盤を迎えた冬とうもろこしの生産量は、生育期にマット・グロッソ州など中西部の主産地では乾燥が続いたものの、パラナ州など南部産地ではおおむね良好な天候に恵まれ、大幅な増産となり、干ばつ・霜害で減産となった 2020/21 年度に比べ 41.6% 増の 88.3 百万トンの見込み。

2021/22 年度の夏作・冬作の合計では 2020/21 年度比 30.1% 増の 113.3 百万トンで史上最高の見込み。（P.23 大豆－ブラジルのクロップカレンダー参照）。

南部のパラナ州で 9 月 12 日現在、2021/22 年度の冬とうもろこしの収穫率は 97% と収穫終盤となっている。同州の 2022/23 年度の夏とうもろこしの作付進捗率は 32% と前年度同期（28%）より進んでいる。南部のリオ・グランデ・ド・スール州で 9 月 15 日現在、夏とうもろこしの作付進捗率は 35% と前年度同期（32%）より進んでいる。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加に伴い、前年度より 5.5% 増の 77.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より 5.6% 増の 47.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022 年 1～8 月の輸出量は 17.9 百万トンで、前年同期（10.0 百万トン）と比べ 1.8 倍となっている。内訳は、1 位がイラン 3.8 百万トン、2 位がエジプト 2.4 百万トン、3 位がスペイン 2.0 百万トン。ロシアのウクライナ侵攻により、ウクライナ産の輸出が影響を受けており、代替としてブラジル産の中東・EU 向け輸出が大幅に増加した。

とうもろこし－ブラジル

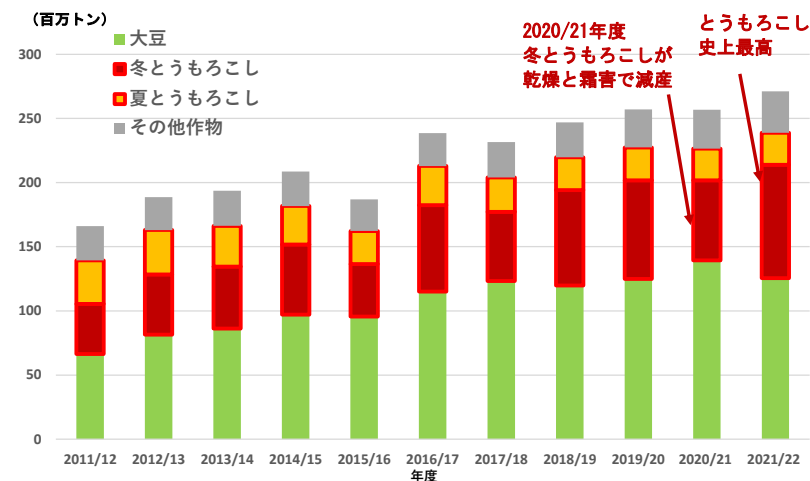
（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが 3/4 を占め、夏とうもろこしは 1/4）

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（23年3月～24年2月）			
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	87.0	116.0	126.0 (123.1)	-	8.6	
消 費 量	70.0	73.0	77.0 (78.7)	-	5.5	
うち飼料用	59.5	62.0	65.5 (56.5)	-	5.6	
輸 出 量	21.0	44.5	47.0 (43.6)	-	5.6	
輸 入 量	2.9	2.0	1.3 (0.5)	-	▲ 35.0	
期末在庫量	4.2	4.7	8.0 (7.6)	-	71.0	
期末在庫率	4.6%	4.0%	6.4% (6.2%)	-	2.5	
（参考）						
収穫面積(百万ha)	19.90	21.80	22.70 (21.80)	-	4.1	
単収(t/ha)	4.37	5.32	5.55 (5.65)	-	4.3	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2022)
IGC 「Grain Market Report」(18 August 2022)

図：ブラジルの穀物・油糧種子生産量の推移
（とうもろこし・大豆で生産の約 9 割を占める）



資料：CONAB (2022.9.8) データをもとに農林水産省にて作成。

< アルゼンチン > 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出税は継続

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月に作付けが開始された 2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、単収の増加により、前年度より 3.8%増の 55.0 百万トンで史上最高の見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2022.9.22）によれば、2022/23 年度の作付進捗率は 3 %で、前年度同期（9 %）より 6 ポイント遅れている。エントレリオス州、サンタフェ州を中心に作付け中。しかし、多くの産地で表層の土壌水分不足により作付作業が遅れている。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加に伴い、前年度より 2.2%増の 14.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より 5.1%増の 41.0 百万トンと史上最高の見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022 年 1 ～ 7 月の輸出量は 23.6 百万トンで、前年同期（22.4 百万トン）より 5.0%増。内訳は、1 位がベトナム 3.2 百万トン、2 位が韓国 2.7 百万トン、3 位がエジプト 2.1 百万トン。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7 %から 12%へ引き上げ、その後継続している。

2021 年 12 月 17 日、アルゼンチン農牧漁業大臣がとうもろこしと小麦の輸出に関し、輸出上限数量を設定することを表明。9 月中旬現在、とうもろこしの輸出上限数量は 2020/21 年度 4,160 万トン、2021/22 年度 3,600 万トンと設定されている。

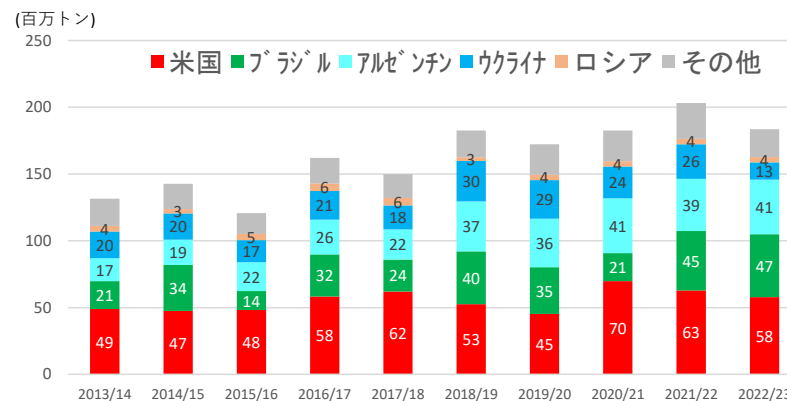
とうもろこしーアルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年3月～24年2月)			
			予測値、() は IGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	52.0	53.0	55.0	(60.6)	-	3.8
消 費 量	13.5	13.7	14.0	(20.7)	-	2.2
うち飼料用	9.5	9.8	10.0	(15.8)	-	2.0
輸 出 量	40.9	39.0	41.0	(41.0)	-	5.1
輸 入 量	0.0	0.0	0.0	(0.0)	-	-
期末在庫率	1.2	1.5	1.5	(2.5)	-	-
期末在庫率	2.2%	2.8%	2.7%	(4.1%)	-	▲ 0.1
(参考)						
収穫面積(百万ha)	6.55	7.20	7.00	(8.00)	-	▲ 2.8
単収(t/ha)	7.94	7.36	7.86	(7.58)	-	6.8

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2022)
IGC 「Grain Market Report」(18 August 2022)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移



資料：USDA 「PS&D」 (2022.9.12) のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ 中国 ＞ 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、主産地の黒竜江省等東北地区及び華北平原で生育期を通じて良好な天候に恵まれたことから、単収の上方修正により前月予測から3.0百万トン上方修正され、前年度より0.5%増の274.0百万トンで史上最高の見込み。なお、政府補助金による大豆生産奨励策により作付けが大豆にシフトし、収穫面積は減少する見込み。

中国中央气象台（2022.9.5）によれば、東北地区の春とうもろこしは8月に適度な降雨があり、土壌水分が補充され、乳熟に有利となった。9月上旬現在、シルキング期から乳熟期にある。一方、河南省等の夏とうもろこしの一部は、高温と干ばつがとうもろこしの開花と受粉の時期と重なり、とうもろこしの受粉に不利だった。シルキング期から乳熟期にある。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な飼料用消費から前年度より1.4%増の295.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、主要な輸入先であるウクライナの輸出減少に伴い、前年度より21.7%減の18.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～7月の輸入量は15.1百万トンで、前年同期比で16.7%減。内訳は、米国産9.9百万トン（66%）、ウクライナ産4.9百万トン（32%）。5月以降、前年同月に比べウクライナ産の輸入が大幅に減少している。（右図参照）

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年7月号」によると、7月の国内流通価格は、2,800元/トンと前月（2,880元/トン）から下落した。主な要因は、7月に曇りや雨が多く、とうもろこしの保管と輸送のコストが増加し、とうもろこしの売却に積極的で市場への供給が増加した一方、とうもろこし加工製品の在庫が多く、段階的な供給過剰が発生したためである。また、7月の輸入価格は、3,020元/トンと前月（3,140元/トン）から下落したものの、依然として国内価格を上回り内外価格差は大きい。他の穀物の代替輸入等も含め、今後の中国の輸入動向に注視が必要。

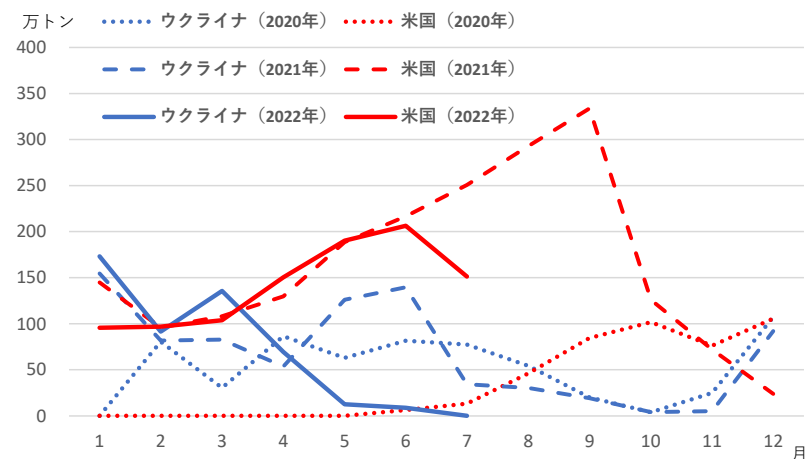
とうもろこしー中国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、() はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	260.7	272.6	274.0	(273.0)	3.0	0.5
消費量	285.0	291.0	295.0	(305.2)	-	1.4
うち飼料用	203.0	209.0	214.0	(203.0)	-	2.4
輸 出 量	0.0	0.0	0.0	(0.1)	-	-
輸 入 量	29.5	23.0	18.0	(19.0)	-	▲ 21.7
期末在庫量	205.7	210.2	207.2	(175.0)	3.0	▲ 1.4
期末在庫率	72.2%	72.2%	70.2%	(57.3%)	1.0	▲ 2.0
(参考)						
収穫面積(百万ha)	41.26	43.32	43.00	(42.50)	-	▲ 0.7
単収(t/ha)	6.32	6.29	6.37	(6.42)	0.07	1.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2022)
IGC「Grain Market Report」(18 August 2022)

図：中国におけるウクライナ、米国産とうもろこしの輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< ウクライナ > 輸出再開で輸出量は上方修正も、前年度より半減

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、8月を通じて西部の生産地で適度な降雨と高温の影響を受ける日が少なかったことなどから単収の上方修正により、前月予測から1.5百万トン上方修正された。しかし、ロシアによるウクライナ侵攻の影響で、燃料や肥料等の生産資材不足もあり、史上最高の生産量となった前年度より25.2%減の31.5百万トンの見込み。収穫は9月上旬から始まった。

ウクライナ気象センターによれば、8月は近年で最も温暖で、少なくとも月の前半は適度な水分量を提供・保持した。生育状況は、8月末現在、乳熟期から完熟期となっている。ウクライナ農業政策食料省によれば、9月23日時点で、収穫済面積は9.2万ヘクタール、収穫進捗率は0.5%。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、生産量の上方修正に伴い前月予測から1.0百万トン上方修正され、前年度より11.4%増の12.7百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者合意による黒海の3港湾からの輸出再開を受け、前月予測から0.5百万トン上方修正されたものの、前年度より50.0%減の13.0百万トンの見込み。また、2021/22年度の輸出量は、黒海の3港湾からの輸出再開を受け、前月予測から1.5百万トン上方修正され、2020/21年度より9.0%増の26.0百万トンの見込み。

9月3日付けウクライナ農業政策食料省発表によれば、8月の輸出量は185万トンで、前月(110万トン)に比べ68%増加。

黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」(2022.9.15)によれば、9月15日現在、輸出が再開された8月1日以降、黒海港湾からのとうもろこし輸出量は171万トン、輸出先国は、トルコ、スペイン、エジプト等である。

また、2022/23年度の期末在庫量は、前月予測から0.7百万トン下方修正され、前年度より2倍の11.4百万トンの見込みで、在庫が積み上がっている。

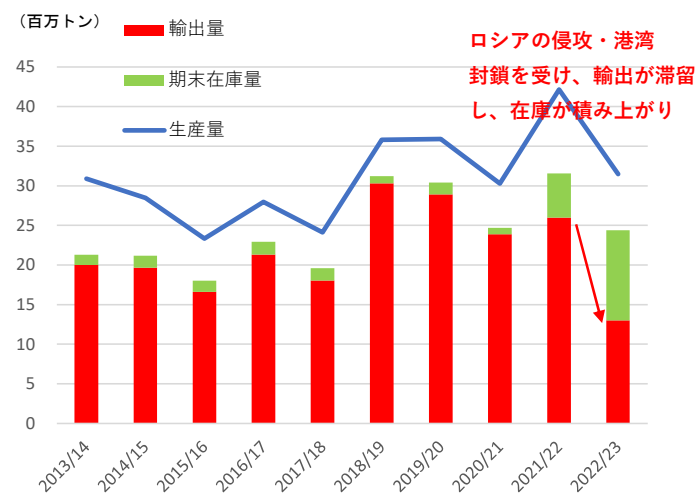
とうもろこしーウクライナ

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	30.3	42.1	31.5 (27.7)	1.5	▲ 25.2
消 費 量	7.1	11.4	12.7 (10.7)	1.0	11.4
うち飼料用	5.9	10.2	11.5 (5.5)	1.0	12.7
輸 出 量	23.9	26.0	13.0 (15.5)	0.5	▲ 50.0
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	▲ 100.0
期末在庫量	0.8	5.6	11.4 (8.4)	▲ 0.7	104.1
期末在庫率	2.7%	14.9%	44.2% (32.2%)	▲ 5.6	29.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	5.40	5.49	4.50 (4.59)	-	▲ 18.0
単収(t/ha)	5.62	7.68	7.00 (6.04)	0.33	▲ 8.9

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2022)
IGC 「Grain Market Report」(18 August 2022)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料：USDA 「PS&D」 (2022.9.12) をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

生産量 前年度比 ↓ 2022/23 年度 前月比 ↓

- ・中国、インド等で下方修正され、前月から下方修正された。

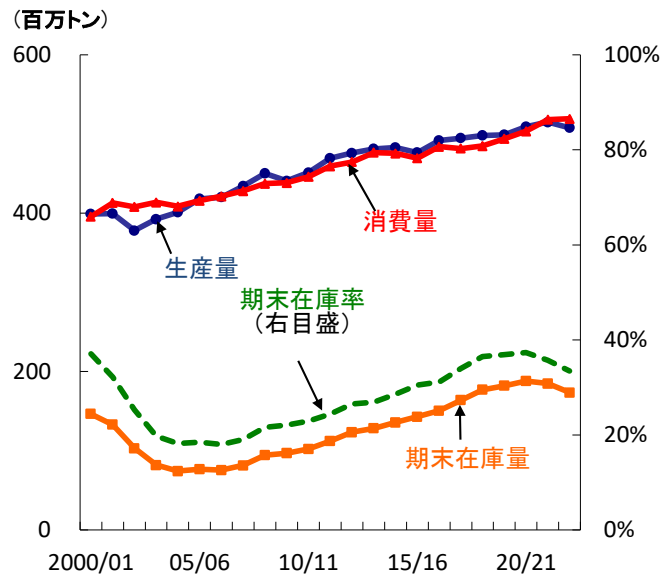
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

- ・中国等で下方修正されたものの、インド、パキスタン等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

- ・タイ、ベトナム等で上方修正されたものの、インド等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2022.9.12）をもとに農林水産省にて作成

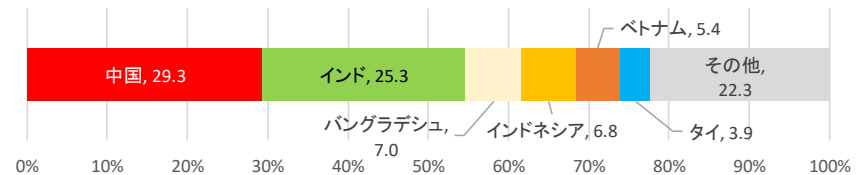
◎世界のコメ需給

（単位：百万精米トン）

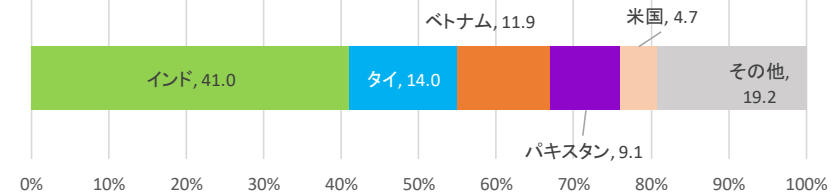
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	509.3	515.1	508.0	▲ 4.5	▲ 1.4
消 費 量	503.5	518.2	519.3	0.6	0.2
輸 出 量	50.9	54.8	53.6	▲ 1.1	▲ 2.1
輸 入 量	46.5	53.2	52.2	▲ 1.0	▲ 2.0
期末在庫量	188.0	184.9	173.6	▲ 5.0	▲ 6.1
期末在庫率	37.3%	35.7%	33.4%	▲ 1.0	▲ 2.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 September 2022）

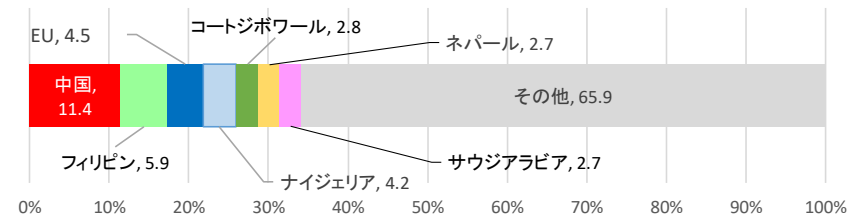
○ 2022/23年度 世界のコメの生産量(508.0百万トン)（単位：%）



○ 2022/23年度 世界のコメの輸出量(53.6百万トン)（単位：%）



○ 2022/23年度 世界のコメの輸入量(52.2百万トン)（単位：%）



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > 生産量は収穫面積減少により 1993/94 年度以来の低水準に

【生育・生産動向】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、収穫面積と単収の下方修正により、前月予測から 0.4 百万トン下方修正され、対前年度比 14.0%減の 5.2 百万トンと、1993/94 年度以来の低水準の見込み。収穫面積は、対前年度比で約 13%減少し、1973/74 以来の低水準。このうちミシシッピ下流域（長粒種の主産地）では、農業資材の高騰、大豆やとうもろこしの収益性の方が高いこと、年初の異常気象による作付減少により、主産地のアーカンソー州等で収穫面積が減少する見通し。また中・短粒種の国内生産の 75%を占めるカリフォルニア州では、厳しい干ばつによる灌漑用水不足により、2 年連続減少し 1958/59 年度以来の低水準の見込み。

同「Crop Progress」(2022.9.19)によると、主要 6 州における収穫進捗率は 45%と、前年同期（49%）、過去 5 年平均（51%）を下回っている。作柄評価は、やや良から良が 72%と、前年同期（76%）を下回っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、生産量の下方修正により前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、対前年度比 6.9%減の 4.5 百万トンの見込み。

2022/23 年度の輸入量は、生産量の下方修正により、わずかに上方修正され、対前年度比 16.7%増の 1.4 百万トンと史上最高の見込み。アジアからの香り米の輸入が顕著。

2022/23 年度の輸出量は、生産量の減少と輸出価格高騰による輸出競争力の低下見込みから、前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、対前年度比 6.1%減の 2.5 百万トンと、1991/92 年度以来の低水準の見込み。

同「Rice Outlook」(2022.9.14)によれば、長粒種の価格は供給量の減少によりここ数か月間上昇しており、9 月 6 日までの週のイラク向け長粒種（2 等、砕米 4 %混入）は 720 ドル/トンと、2008 年 10 月以来の高値となった（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。また、中・短粒種の価格は、地中海向けカリフォルニア米（1 等、砕米 4 %混入）で 1,550 ドル/トンと、依然として過去最高となっている。

コメー米国

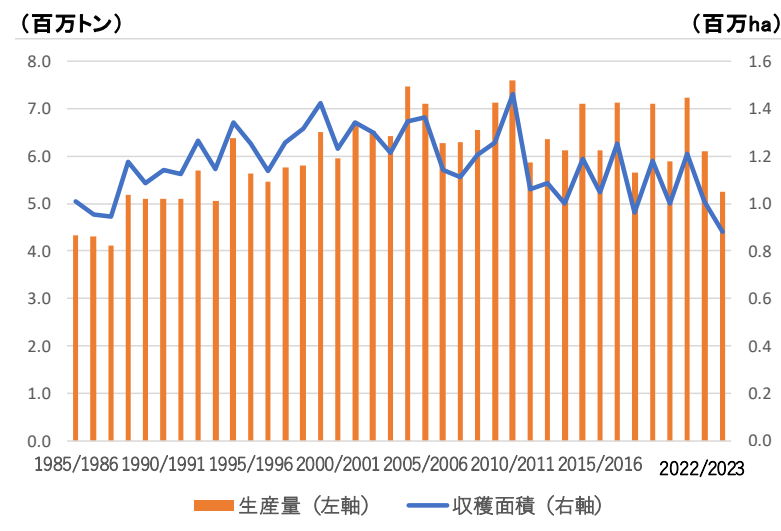
主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは 1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約 2 割

(単位：百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年 8 月～23年 7 月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	7.2	6.1	5.2	▲ 0.4	▲ 14.0
消 費 量	4.9	4.8	4.5	▲ 0.1	▲ 6.9
輸 出 量	3.0	2.6	2.5	▲ 0.1	▲ 6.1
輸 入 量	1.1	1.2	1.4	0.0	16.7
期末在庫量	1.4	1.3	1.0	▲ 0.2	▲ 22.2
期末在庫率	17.8%	17.0%	14.1%	▲ 2.2	▲ 2.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	1.21	1.01	0.88	▲ 0.05	▲ 12.9
単収(もみt/ha)	8.54	8.64	8.50	▲ 0.05	▲ 1.6

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2022)

図：米国の生産量と収穫面積の推移



資料：USDA「PS&D」(2022.9.12)をもとに農林水産省にて作成

< インド > 2022年9月9日より輸出規制中（碎米（100%）輸出禁止等）

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、収穫面積と単収の下方修正により、前月予測から2.0百万トン下方修正され、対前年度比2.9%減の126.5百万トンとなる見込み。2015/16年度以来、増産が続いていたが、2022/23年度は減産となる見込み。ただ、依然として前年度に次ぐ史上第2位の水準。

主産地のウッタル・プラデーシュ州等北東部では、9月中旬に降雨があったが、それまでの降雨が不十分だったため、カリフ米の収穫面積が対前年度比で3%減少の見込み。

インド農業農民福祉省（2022.9.16）によると、カリフ米作付済面積は、9月16日時点で39.90百万ヘクタールと、前年同期（41.79百万ヘクタール）に比べて1.89百万ヘクタール少ない状況となっている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の消費量は、政府の低所得世帯向け食料配給プログラム等によるコメの供給量が予想以上に増加したことから、前月予測から1.1百万トン上方修正され、対2020/21年度比7.2%増の109.5百万トンと、史上最高となった。

2022/23年度の消費量は、同プログラム等で引き続きコメを大量供給するとの予測から、前月予測から1.8百万トン上方修正されたが、対前年度比0.2%減の109.3百万トンの見込み。

インド食品協会によると、2022年8月の備蓄量（粳を含む）は47.4百万トンと、前年同期（52.0百万トン）を下回るが、過去5年平均（35.9百万トン）を11.5百万トン上回る。

USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の下方修正、国内需要の増大、9月9日に発動された輸出規制（碎米（100%）の輸出禁止及びバスマティ米・パーボイルド米以外のコメへの輸出税課税（20%））により、前月予測から2.0百万トン下方修正され、対前年度比6.1%減の20.0百万トンの見通し。ただし依然として、世界の輸出量の4割を占める見込み。

同「Grain: World Markets and Trade」（2022.9.12）によれば、インド産米（碎米5%混入）の9月6日までの価格は、355ドル/トンと前月と変わらず、依然としてアジアの主要輸出国の中で最も低い価格となっている（P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照）。本価格に輸出規制は反映されてないと見られる。

コメーインド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ（小麦）の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

(単位: 百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	124.4	130.3	126.5 (128.3)	▲ 2.0	▲ 2.9	
消費量	101.1	109.5	109.3 (109.0)	1.8	▲ 0.2	
輸出量	20.2	21.3	20.0 (19.5)	▲ 2.0	▲ 6.1	
輸入量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	37.0	36.5	33.8 (36.3)	▲ 1.8	▲ 7.5	
期末在庫率	30.5%	27.9%	26.1% (28.2%)	▲ 1.3	▲ 1.8	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	45.77	47.00	45.50 (44.75)	▲ 0.50	▲ 3.2	
単収(もみt/ha)	4.08	4.16	4.17 (2.87)	▲ 0.02	0.2	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (12 September 2022)
IGC 「Grain Market Report」 (18 August 2022) (単収は精米t/ha)

図: インドのコメ輸出量の推移



資料: USDA 「Grain: World Markets and Trade」 (2022.9.12)に掲載の
Trade Data Monitor 社による。

< 中国 > 2022/23 年度の生産量は南部の高温・乾燥により減少の見込み

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23 年度の実産量は、前月予測から 2.0 百万トン下方修正され、対前年度比 1.3%減の 147.0 百万トンの見込み。7～8 月に南部で極度の高温・乾燥があり、長江下流域（四川省等）の広い範囲で土壌水分が極度に不足したことから、出穂・開花期にある一期作稲や初期成育段階にある二期作晩稲の単収が減少する恐れがある。主産地である長江南部、特に四川省、江西省、安徽省、湖北省（これら四省で中国の小麦生産量の約 4 割を占める）で広く干ばつとなっている。他方、北東部で豪雨があり、一部で洪水等があったものの、生産見通しは良好と見られる。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23 年度の実消費量は、前月予測から 0.5 百万トン下方修正され、対前年度比 0.2%減の 156.1 百万トンの見込み。

2022/23 年度の実輸入量は、インドの小麦の輸出規制により、前月予測から 0.5 百万トン下方修正され、対前年度比 7.6%減の 5.5 百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2022 年 1～7 月の輸入量は、対前年同期の 2.8 百万トンから約 44%増加し、4.1 百万トンとなった。輸入先はインドが 1.5 百万トンと最も多く、次いでパキスタンが 1.0 百万トンとなっている。

USDAによれば、中国は、とうもろこしなど飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の碎米をインド等からの輸入を増やしてきた。

中国社会科学院農村発展研究所の研究員によれば、小麦の供給には一定の余剰があることや、年間輸入量は総需要量に比べて比較的少ない（約 500 万トン）こと等から、インドの小麦輸出規制が中国に与える影響は非常に限定的である、としている。

USDAによれば、2022/23 年度の実在庫量は、生産量の下方修正により、前月予測から 1.8 百万トン下方修正され、対前年度比 5.1%減の 107.2 百万トンとなる見込み。なお、世界の期末在庫量のうち、中国が約 6 割を占める見通し。

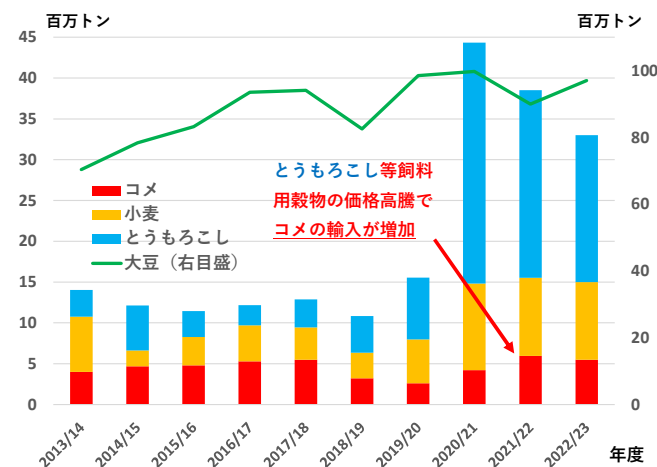
コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ（粳）米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは 3 割程度

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年 7 月～23年 6 月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	148.3	149.0	147.0	(149.0)	▲ 2.0	▲ 1.3
消 費 量	150.3	156.3	156.1	(153.4)	▲ 0.5	▲ 0.2
輸 出 量	2.2	2.1	2.2	(2.4)	▲ 0.2	4.8
輸 入 量	4.2	6.0	5.5	(5.0)	▲ 0.5	▲ 7.6
期末在庫量	116.5	113.0	107.2	(105.6)	▲ 1.8	▲ 5.1
期末在庫率	76.4%	71.3%	67.7%	(67.8%)	▲ 0.8	▲ 3.6
(参考)						
収穫面積(百万ha)	30.08	29.92	30.00	(30.03)	-	0.3
単収(もみt/ha)	7.04	7.11	7.00	(4.96)	▲ 0.10	▲ 1.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2022)
IGC「Grain Market Report」(18 August 2022) (単収は精米t/ha)

図：中国の小麦、とうもろこし、大豆の輸入量の推移



< タイ > インドの輸出規制等により 2021/22 年度の輸出量は増加見通し

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 0.8%増の 19.8 百万トンの見込み。

2021/22 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、生育期間における十分な降雨により、対 2020/21 年度比 4.2%増の 19.7 百万トンの見込み。

USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2022.9.20)によると、全土でモンスーンによる降雨が続いており、雨季米の生育のための土壌水分量は平均以上となっている。また、乾季作に向けての灌漑用水の補給も過去3年で最も多い水準。

【貿易情報・その他】USDAによれば、イラクからの予想以上の輸入需要増大およびインドの輸出規制により、2022/23 年度の輸出量は、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、対前年度比 6.7%増の 8.0 百万トンの見込み。インドに次ぐ世界第2位のコメ輸出国となる見通し。

2021/22 年度の輸出量は、同様の理由から、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、対 2020/2021 年度比 23.0%増の 7.5 百万トンの見込。タイ米輸出業協会名誉会長によると、インドの輸出規制によりタイのコメの価格競争力が上がることで等から、2021/22 年度の輸出量は 8.0 百万トン超となる見通し。

タイ米輸出業者協会によれば、2022 年 1～7 月の輸出量は、対前年同期の 2.7 百万トンから約 54%増加し、4.1 百万トンとなった。輸出先はイラクが 0.8 百万トン（対前年度比 6.3 倍）、米国が 0.4 百万トン（対前年度比 1.4 倍）、南アフリカが 0.4 百万トン（対前年度比 1.1 倍）、中国が 0.3 百万トン（対前年度比 1.7 倍）。

USDA「Rice Outlook」(2022.9.14)によれば、9月6日までの週のタイ産米（長粒、2等精米）の輸出価格は、バーツ高と新規需要により、8月9日までの週の価格から 11 ドル上昇し、427 ドル/トンとなった（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

コメ・タイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

(単位: 百万精米トン)

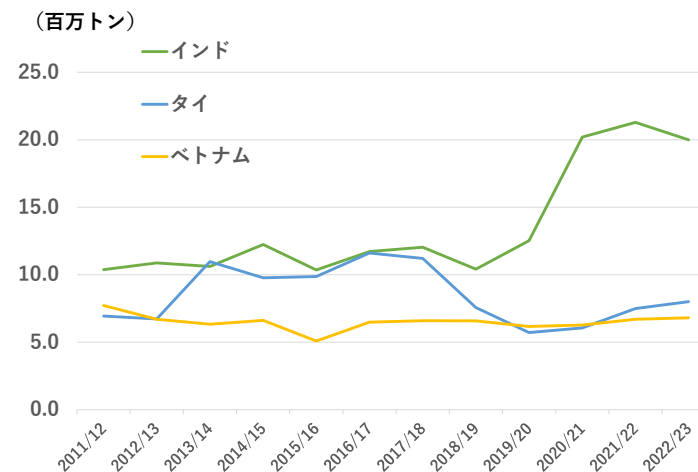
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年1月～23年12月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	18.9	19.7	19.8	(20.0)	-	0.8
消 費 量	12.7	12.8	13.0	(12.3)	▲ 0.1	1.6
輸 出 量	6.1	7.5	8.0	(8.0)	0.5	6.7
輸 入 量	0.2	0.2	0.2	(0.3)	-	-
期末在庫量	4.3	3.8	2.8	(6.7)	▲ 0.5	▲ 26.1
期末在庫率	22.8%	18.9%	13.5%	(33.3%)	▲ 2.7	▲ 5.4

(参考)

収穫面積(百万ha)	10.51	10.59	10.70	(10.70)	-	1.0
単収(もみt/ha)	2.72	2.81	2.80	(1.87)	-	▲ 0.4

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2022)
IGC「Grain Market Report」(18 August 2022) (単収は精米t/ha)

図：世界のコメの主要輸出国の輸出量の推移



資料: USDA「PS&D」(2022.9.12)をもとに農林水産省にて作成

< ベトナム > インドの輸出規制等により 2021/22 年度の輸出量は増加見込み

【生育・生産動向】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収が 6.01 トン/ヘクタールと過去最高になることから、対前年度比 1.2%増の 27.4 百万トンの見込み。

2021/22 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収・収穫面積ともに減少見込みであること、低温や高収益作物（野菜等）への転作等により冬春作の収穫が減少したことから、対 2020/21 年度比 1.1%減の 27.1 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、インドの輸出規制により、前月予測から 0.4 百万トン上方修正され、対前年度比 1.5%増の 6.8 百万トンの見込み。

2021/22 年度の輸出量は、同様の理由から、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、対 2020/21 年度比 6.3%増の 6.7 百万トンの見込み。

ベトナム税関総局によれば、2022 年 1～7 月の輸出量は 4.1 百万トンで、上位からフィリピン（2.0 百万トン）、中国（0.5 百万トン）、コートジボワール（0.4 百万トン）となっている。うちジャポニカ米は 0.1 百万トン。

USDA によれば、2022/23 年度の輸入量は、ベトナム国内で飼料用等に利用されていたインドの碎米の輸出禁止措置により、前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、対前年度比 30.0%減の 0.7 百万トンの見込み。

なお 2021/22 年度の輸入量は、同様の理由から、前月予測から 0.2 百万トン下方修正され 1.0 百万トンの見込み。

USDA 「Rice Outlook」（2022.9.14）によれば、ベトナム産米（長粒種、5 %碎米混入）の 9 月 6 日までの週の価格は、夏秋作の収穫がほぼ終わり、またフィリピンからの引き合いも弱いものの、8 月 9 日までの週の価格と変わらず 395 ドル/トンとなった。

写真：ベトナム北部ハノイ市の圃場
(8 月 29 日撮影)



コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

(単位：百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年 1 月～23年12月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	27.4	27.1	27.4 (28.5)	-	1.2	
消 費 量	21.5	21.5	21.5 (23.0)	▲ 0.2	0.2	
輸 出 量	6.3	6.7	6.8 (6.5)	0.4	1.5	
輸 入 量	1.8	1.0	0.7 (0.9)	▲ 0.1	▲ 30.0	
期末在庫量	2.6	2.6	2.4 (3.0)	▲ 0.6	▲ 7.8	
期末在庫率	9.5%	9.1%	8.3% (10.0%)	▲ 2.0	▲ 0.8	

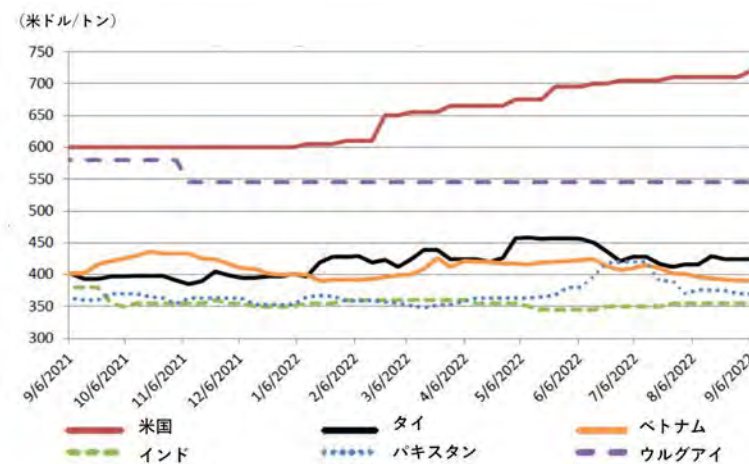
(参考)

収穫面積(百万ha)	7.31	7.29	7.29 (7.23)	-	-
単収(もみt/ha)	6.00	5.95	6.01 (3.95)	-	1.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (12 September 2022)

IGC 「Grain Market Report」 (18 August 2022) (単収は精米t/ha)

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料：USDA 「Grain : World Markets and Trade」 (2022.9.12)より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 前月比

・ウクライナ、カナダ等で上方修正も、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

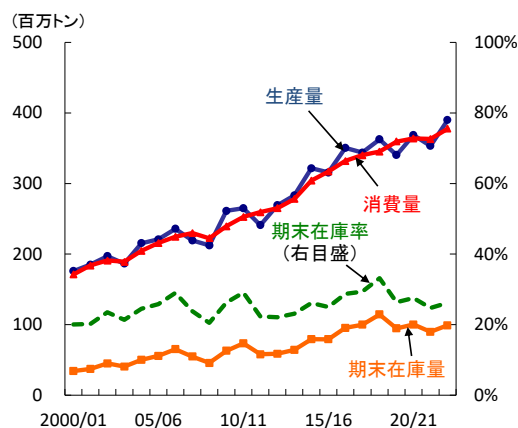
消費量 前年度比 前月比

・EU、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 前月比

・アルゼンチン等で上方修正も、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 前月比



資料：USDA「PS&D」（2022.9.12）をもとに農林水産省で作成

◎ 世界の大豆需給

（単位：百万トン）

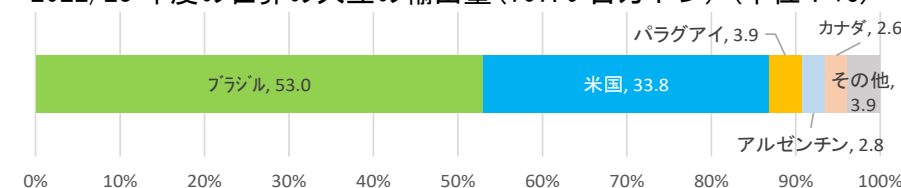
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	368.4	353.2	389.8	▲ 3.0	10.3
消 費 量	363.8	363.0	377.7	▲ 0.6	4.1
うち搾油用	315.4	313.9	327.1	▲ 0.7	4.2
輸 出 量	164.9	153.4	167.9	▲ 1.2	9.5
輸 入 量	165.5	152.7	165.0	▲ 1.2	8.0
期末在庫量	100.0	89.7	98.9	▲ 2.5	10.3
期末在庫率	27.5%	24.7%	26.2%	▲ 0.6	1.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 September 2022）

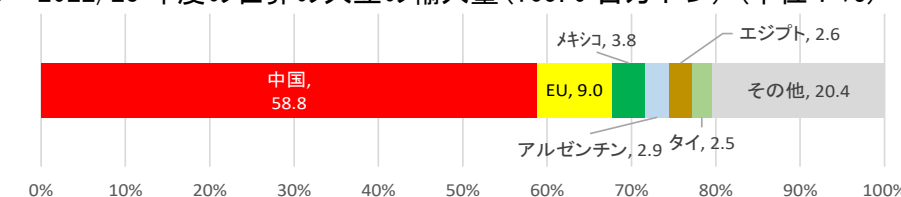
○ 2022/23 年度の世界の大豆の生産量 (389.8 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸出量 (167.9 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸入量 (165.0 百万トン) (単位：%)



(2) 国別の大豆の需給動向

< 米国 > 収穫面積・単収の下方修正により、生産量は減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の実産量は、収穫面積の下方修正に加え、8月の高温・乾燥の影響でイリノイ州などコーンベルト東部、カンザス州など中央平原を中心に単収が下方修正されたことにより、前月予測から 4.1 百万トン下方修正され、対前年度比 1.3%減の 119.2 百万トンの見通し。

USDA「Crop Progress」(2022.9.19)によれば、主要 18 州における落葉進捗率は 42%と前年度同期(55%)及び過去 5 年平均(47%)より遅れている。収穫進捗率は 3%と前年度同期及び過去 5 年平均(ともに 5%)より遅れている。作柄評価は良からやや良が 55%と前年度同期(58%)を下回っている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の実消費量は、生産量の下方修正に伴い搾油用消費量が下方修正されたことから前月予測から 0.6 百万トン下方修正されたものの、前年度より 1.1%増の 63.9 百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸出量は、生産量の下方修正に伴い前月予測から 1.9 百万トン下方修正され、前年度より 2.8%減の 56.7 百万トンの見込み。

USDAによれば、2022 年輸出検証高(2022 年 1 月 6 日～9 月 1 日)は、26.1 百万トンであり、内訳は中国(10.4 百万トン)、メキシコ(3.5 百万トン)、エジプト(2.5 百万トン)、ドイツ(1.5 百万トン)、日本(1.4 百万トン)の順。

USDAによれば、2022/23年度の実在庫量は、生産量の下方修正などにより、前月予測から 1.2 百万トン下方修正され、前年度より 16.7%減の 5.4 百万トンの見込み。なお、実在庫率は 4.5%で、前年度を下回り、低水準の見込み。

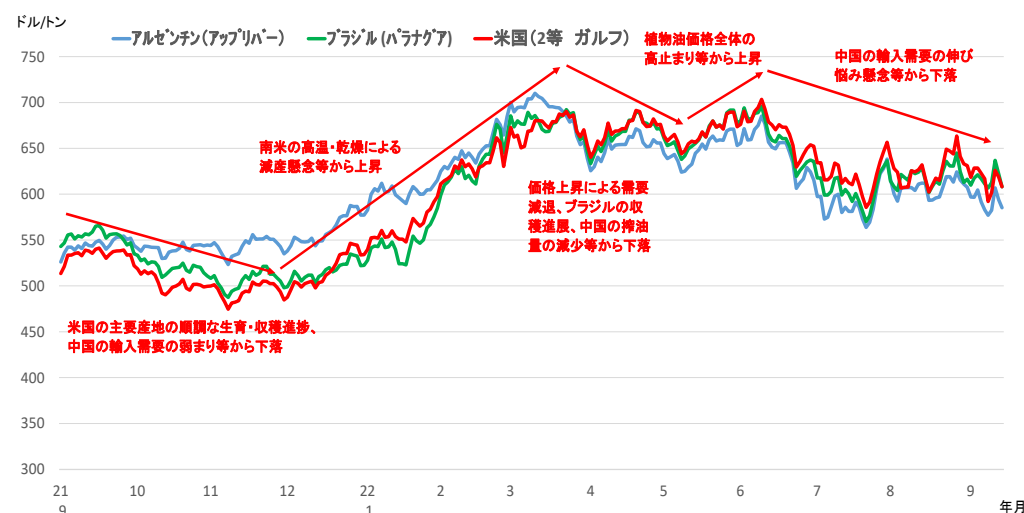
大豆－米国

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	114.8	120.7	119.2	▲ 4.1	▲ 1.3
消費量	60.9	63.2	63.9	▲ 0.6	1.1
うち搾油用	58.3	60.0	60.6	▲ 0.5	0.9
輸出量	61.7	58.4	56.7	▲ 1.9	▲ 2.8
輸入量	0.5	0.4	0.4	-	-
期末在庫量	7.0	6.5	5.4	▲ 1.2	▲ 16.7
期末在庫率	5.7%	5.4%	4.5%	▲ 0.9	▲ 0.9
(参考)					
収穫面積(百万ha)	33.43	34.94	35.06	▲ 0.23	0.3
単収(t/ha)	3.43	3.45	3.40	▲ 0.09	▲ 1.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2022)

図：米国、ブラジル、アルゼンチン大豆輸出価格(F0B)の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

< ブラジル > 2021/22 年度は高温・乾燥の影響で減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 10 月以降に作付けが本格的に開始される 2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加から、前年度より 18.3%増の 149.0 百万トンと史上最高の見込み。

また、ブラジル食料供給公社(CONAB)月例報告 (2022.9.8) によれば、2021/22 年度の生産量は、ラニーニャ現象を背景にパラナ州など南部の州を中心に深刻な高温・乾燥の影響を受け、2020/21 年度より 9.9%減の 125.6 百万トンの見込み。収穫作業は 6 月に終了している。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、旺盛な搾油用需要により前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、前年度より 0.7%増の 53.9 百万トンと史上最高の見込み。なお、2021/22 年度の消費量は、旺盛な搾油用需要により前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、2020/21 年度より 7.3%増の 53.5 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より 11.3%増の 89.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022 年 1～8 月の輸出量は 66.6 百万トンで、前年同期 (72.7 百万トン) に比べ 8.3%減となっている。内訳は、1 位が中国 44.8 百万トン、2 位がスペイン 2.9 百万トン、3 位がタイ 2.0 百万トンとなっている。なお、8 月の輸出量は 6.1 百万トンで前年同月 (6.5 百万トン) と比べ、6.0%減となっている。

大豆ーブラジル

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	139.5	126.0	149.0 (145.0)	-	18.3	
消 費 量	49.9	53.5	53.9 (52.2)	0.3	0.7	
うち搾油用	46.7	50.3	50.5 (49.4)	0.3	0.5	
輸 出 量	81.7	80.0	89.0 (90.7)	-	11.3	
輸 入 量	1.0	0.6	0.8 (0.4)	-	36.4	
期末在庫量	29.4	22.5	29.4 (4.2)	▲ 0.5	30.7	
期末在庫率	22.4%	16.8%	20.6% (2.9%)	▲ 0.4	3.7	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	39.20	41.00	42.00 (42.00)	-	2.4	
単収(t/ha)	3.56	3.07	3.55 (3.45)	-	15.6	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2022)
IGC 「Grain Market Report」(18 August 2022)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2021/22年度	2021年												2022年								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
夏とうもろこし	リオ・グランデ・ド・スール州等						作付 4.5(百万ha)						収穫 25.0(百万t)						収穫夏冬計 113.3百万t		
冬とうもろこし	作付面積夏冬計 21.6百万ha												作付 17.0(百万ha)			収穫 88.3(百万t)					
大豆	マツ・グロソソ州、パラナ州等						作付 41.5(百万ha)						大豆収穫後の一部圃場で冬とうもろこし播種						収穫 125.6(百万t)		

資料：CONAB穀物レポート (2022.9.8)

＜ アルゼンチン ＞ 2021/22 年度は高温・乾燥で減産見通し、輸出税は継続

【生育・生産状況】USDAによれば、本年11月以降作付けが開始される2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加から、高温・乾燥の影響を受けた前年度より15.9%増の51.0百万トンと史上最高の見込み。なお、2021/22年度の生産量は、生育期の高温・乾燥の影響で、2020/21年度より4.8%減の44.0百万トンの見込み。7月中旬までに2021/22年度の収穫は終了した。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より1.0%増の48.3百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、9月末までの為替優遇措置により前月予測から0.4百万トン上方修正され、前年度より2.1倍の4.7百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022年1～7月の輸出量は95.4万トンで、前年同期（267.8万トン）より64.4%減。内訳は、1位が中国70.8万トン、2位が米国7.2万トン、3位がチリ2.7万トンとなっている。

アルゼンチンは、丸大豆より搾油後に発生する大豆加工品の輸出が多く、大豆油及び大豆粕については、世界第1位の輸出国である。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021年1月以降、輸出税を大豆最大33%、大豆油及び大豆粕31%に設定。さらに、2022年3月19日付けアルゼンチン農牧漁業省プレスリリースによれば、大豆油及び大豆粕の輸出税について2022年末まで2%引き上げ、大豆と横並びの33%に変更した。

また、2022年9月4日にアルゼンチン政府は、足元の公式レート139ペソ/ドルから9月末まで丸大豆輸出のみに適用される為替優遇措置（200ペソ/ドル）を大豆農家に対して発表したことにより、これまで滞留していた農家の大豆売渡が加速している。

大豆ーアルゼンチン

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	46.2	44.0	51.0 (48.0)	-	15.9	
消 費 量	47.4	47.8	48.3 (48.1)	-	1.0	
うち搾油用	40.2	40.6	41.0 (42.1)	-	1.1	
輸 出 量	5.2	2.3	4.7 (4.6)	0.4	108.9	
輸 入 量	4.8	3.5	4.8 (4.8)	-	37.1	
期末在庫量	25.1	22.6	25.4 (2.6)	▲ 0.3	12.6	
期末在庫率	47.6%	45.1%	48.0% (4.9%)	▲ 0.9	2.9	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	16.47	16.00	17.00 (16.65)	-	6.3	
単収(t/ha)	2.81	2.75	3.00 (2.88)	-	9.1	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

「World Agricultural Production」(12 September 2022)

IGC「Grain Market Report」(18 August 2022)

写真：北部サンタフェ州の大豆の貯蔵施設風景 (8月21日撮影)



< 中国 > 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し

【生産・生育状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、政府の補助金による大豆生産奨励策で収穫面積が増加したことから、前年度より12.2%増の18.4百万トンの見込み。

中国中央气象台(2022.9.5)によれば、東北地区等主産地の8月上旬の天候は大豆の着莢・子実肥大に有利であったが、8月中・下旬は気温が低下し、日照もやや少なく、大豆の乳熟に不利となった。9月上旬現在、着莢期から子実肥大期にある。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、国内大豆粕需要の回復による搾油用消費量の増加から、前年度より8.3%増の115.6百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、主要輸入先である米国の輸出量の下方修正に伴い前月予測から1.0百万トン下方修正されたものの、前年度より7.8%増の97.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～7月の輸入量は54.2百万トンと、前年同期比で6.0%減。内訳は、ブラジル産34.7百万トン(64%)、米国産17.9百万トン(33%)。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年7月号」によると、7月は、農家の大豆在庫が底を突き、販売業者の在庫も減少している一方、政府備蓄倉庫の一部は引き続き買い付けを行っていることから、国内価格(山東省の国産大豆工場渡し価格)は、前月(6,500 元/トン)からやや上昇し、6,520 元/トンとなり、依然として高水準で推移している。主産地における大豆の余剰量は少なくなり、今後、新穀大豆が市場に出荷されるまで、国内価格は高値を維持するとみられる。7月の輸入価格(山東省の輸入大豆価格)は、4,920 元/トンと前月(5,500 元/トン)から下落した。今後の中国の輸入動向に注視が必要である。

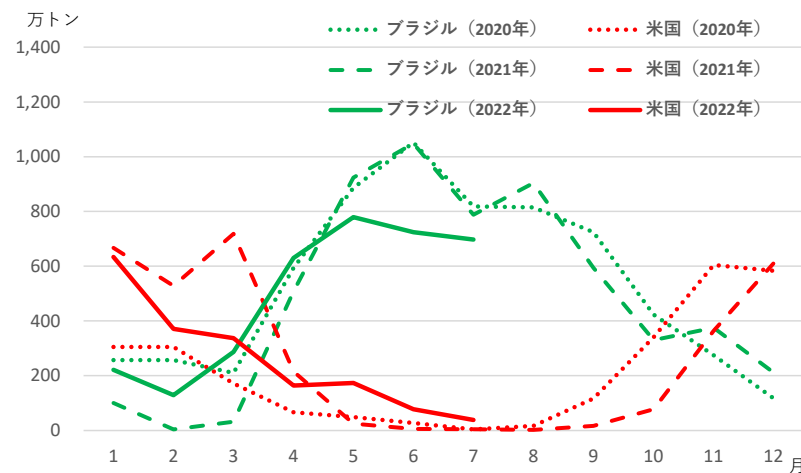
大豆—中国

(単位: 百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	19.6	16.4	18.4	(19.5)	-	12.2
消費量	112.7	106.7	115.6	(114.2)	-	8.3
うち搾油用	93.0	87.0	95.0	(95.5)	-	9.2
輸 出 量	0.1	0.1	0.1	(0.1)	-	-
輸 入 量	99.8	90.0	97.0	(96.6)	▲ 1.0	7.8
期末在庫量	31.2	30.7	30.5	(31.4)	▲ 1.0	▲ 0.9
期末在庫率	27.6%	28.8%	26.3%	(27.5%)	▲ 0.9	▲ 2.4
(参考)						
収穫面積(百万ha)	9.88	8.40	9.35	(9.90)	-	11.3
単収(t/ha)	1.98	1.95	1.97	(1.97)	-	1.0

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 September 2022)
IGC「Grain Market Report」(18 August 2022)

図：中国におけるブラジル、米国産大豆の輸入状況



出典: 中国海関統計

注: 2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< カナダ > 収穫面積は減少も、単収の増加により増産、輸出量も増加見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、主産地のオンタリオ州南部の8月下旬の降雨による単収の上方修正により前月予測から0.4百万トン上方修正され、収穫面積は減少するものの、前年度より2.0%増の6.4百万トンの見込み。

USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2022.8.30～9.20)によれば、主産地のカナダ南東部では、8月下旬から9月中旬にかけて温暖な天候と降雨があり、大豆の生育に好ましい状況となった。

なお、カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2022.9.23)によれば、2022/23年度の収穫面積は前年度より1.7%減の一方、単収は西部カナダで生育期の降雨と温暖な天候に恵まれたことから、前年度高温・乾燥で減産となった生産量第2位のマニトバ州で前年度より44.3%増と増加し、カナダ全体の単収が5.5%増となることから、生産量は前年度より3.7%増の6.5百万トンの見込み。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、生産量の上方修正に伴い、前月予測から0.2百万トン上方修正され、前年度より2.8%増の2.5百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、生産量の上方修正に伴い、前月予測から0.1百万トン上方修正され、前年度より2.9%増の4.4百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2021/22年度(2021年8月～2022年7月)の輸出量は287.0万トンで、国別では、イラン(53.7万トン)、イタリア(41.6万トン)、バングラデシュ(26.2万トン)、オランダ(22.6万トン)、中国(22.2万トン)の順。

大豆－カナダ

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)			
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	6.4	6.3	6.4 (6.5)	0.4	2.0	
消費量	2.5	2.4	2.5 (2.5)	0.2	2.8	
うち搾油用	1.6	1.8	1.9 (1.9)	0.1	0.3	
輸出量	4.7	4.3	4.4 (4.4)	0.1	2.9	
輸入量	0.5	0.5	0.5 (0.4)	-	▲ 7.6	
期末在庫量	0.3	0.4	0.5 (0.4)	0.2	7.0	
期末在庫率	4.1%	6.4%	6.7% (5.8%)	2.0	0.3	

(参考)

収穫面積(百万ha)	2.04	2.13	2.10 (2.10)	-	▲ 1.4
単収(t/ha)	3.12	2.94	3.05 (3.10)	0.19	3.7

資料：USDA「PS&D」

「World Agricultural Production」(12 September 2022)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(23 September 2022)

写真：カナダ南東部オンタリオ州の大豆の成熟風景 (9月13日撮影)



(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2022/23年度）

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	22年6月～23年5月	22年9月～23年8月	22年8月～23年7月	22年9月～23年8月
カナダ	22年8月～23年7月			22年8月～23年7月
豪州	22年10月～23年9月		23年3月～24年2月	
EU	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
中国	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月
ロシア	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		22年9月～23年8月
ウクライナ	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
ブラジル		23年3月～24年2月	23年4月～24年3月	22年10月～23年9月
アルゼンチン	22年12月～23年11月	23年3月～24年2月		22年10月～23年9月
タイ			23年1月～12月	
インド	22年4月～23年3月		22年10月～23年9月	
ベトナム			23年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2022/23年度は、米国の小麦では2022年6月～2023年5月、ブラジルのとうもろこしでは2023年3月～2024年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>（「Reference Data」タブを参照）

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.040469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラック)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏： $^{\circ}\text{C} = (^{\circ}\text{F} - 32) \div 1.8$			

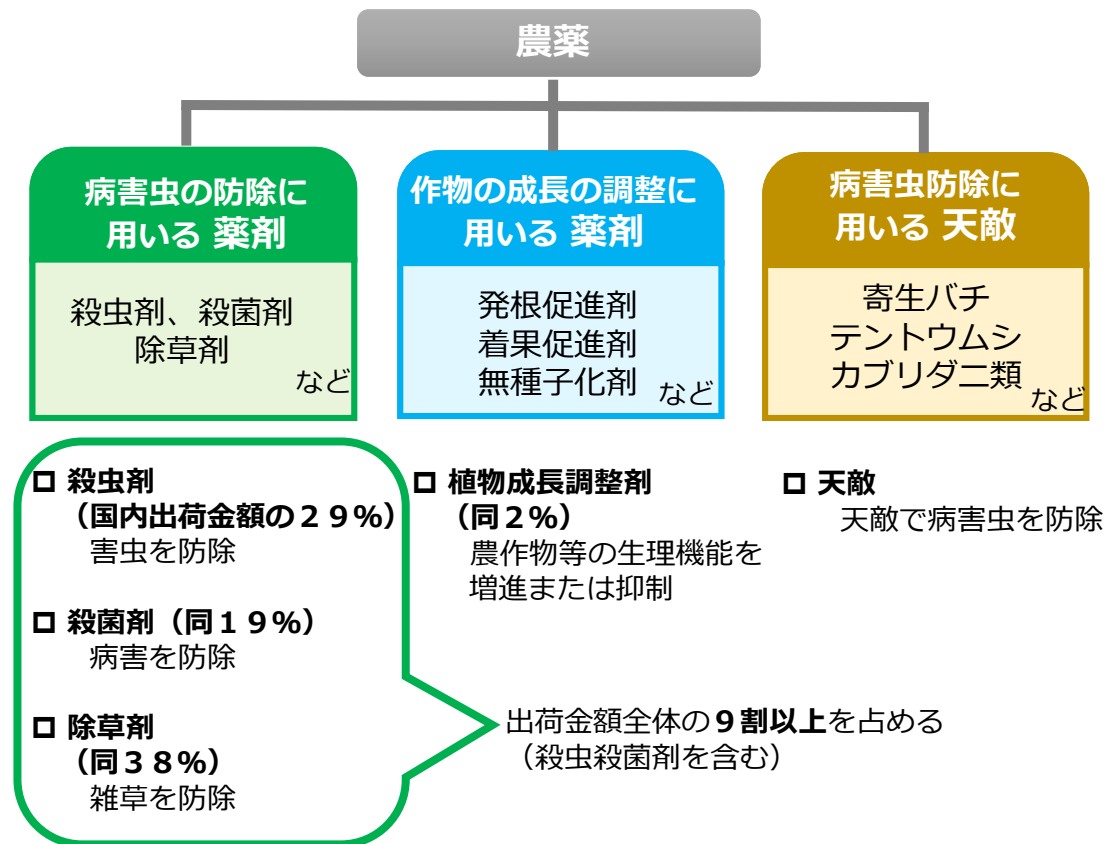
第15号特別分析トピック：我が国と世界の農薬をめぐる動向

農薬とは

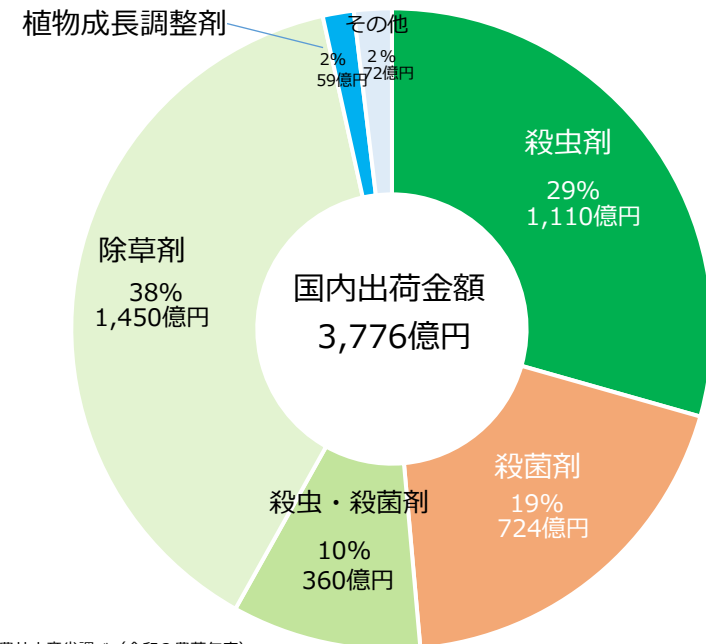
○農薬取締役法において、「農薬」とは、

- ・ 農作物等を加害する病害虫の防除に用いる殺虫剤、殺菌剤、除草剤など
- ・ 農作物等の成長調整に用いる発根促進剤、着果促進剤など
- ・ 農作物等を加害する病害虫の防除のために利用される天敵、微生物など

(※農作物等の範囲は、稲、野菜、果樹などの他、山林樹木、ゴルフ場や公園の芝、街路樹を含む。)



農薬（製剤）の出荷金額



出典：農林水産省調べ（令和2農薬年度）

農薬使用の目的（なぜ農薬を使うのか）

○ 農薬は、品質の良い農作物を安定的に国民に供給するために必要なもの。

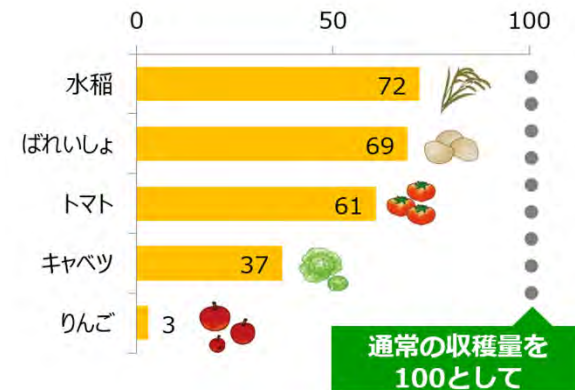
① 農作物を病害虫の被害から保護し、
収穫量や品質を確保

② 雑草防除に要する労働を軽減

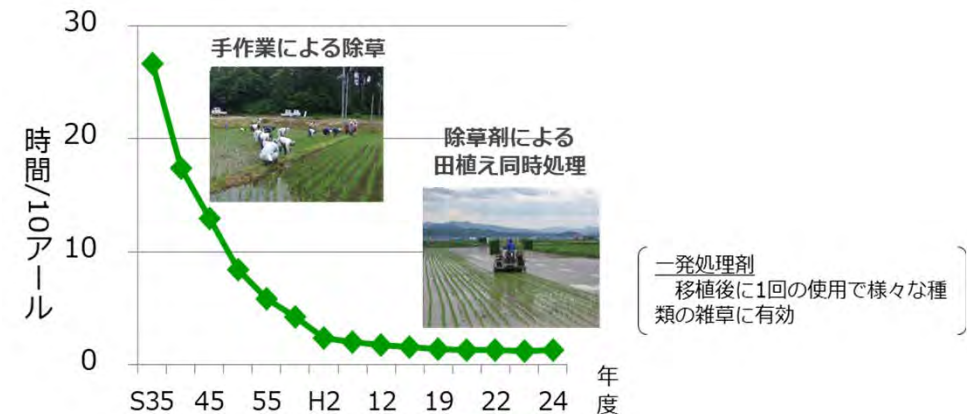
③ 種無ぶどうなど消費者のニーズに
応じた農作物の生産

④ 麦類赤かび病菌などが作る
かび毒によるリスクを低減

農薬を使用しなかった場合の農作物の収量¹⁾



米づくりに必要な除草作業の労働時間の推移²⁾



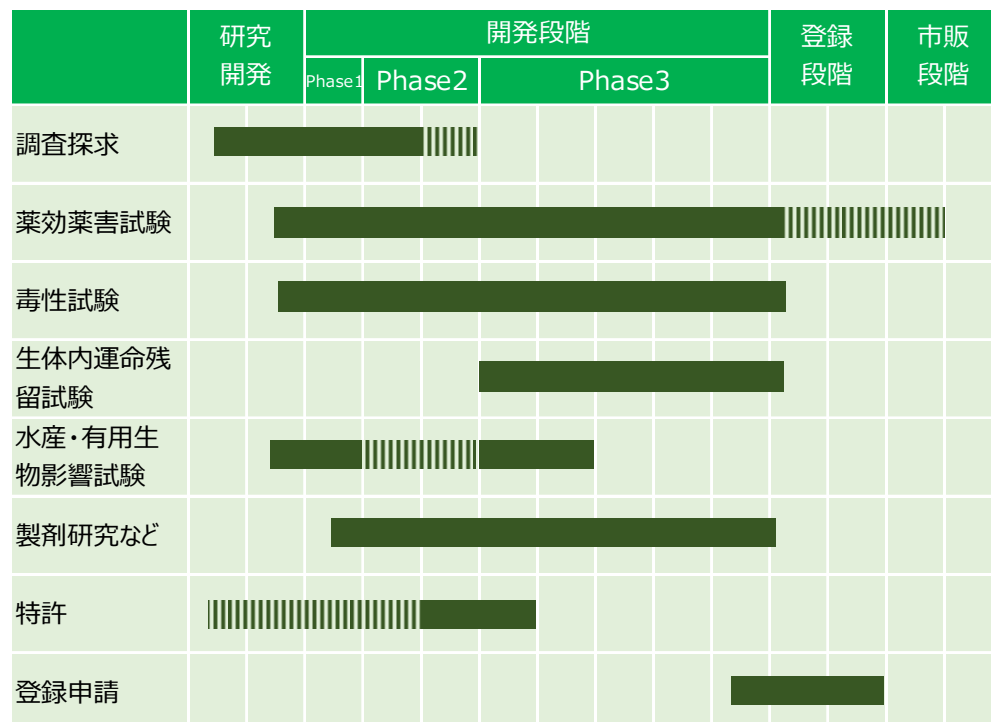
1) 出典：一般社団法人日本植物防疫協会「農薬を使用しないで栽培した場合の病害虫等の被害に関する調査」（1993年）

2) 出典：農林水産省「農産物生産費統計」

農薬開発

○農薬の開発には、高い技術力に加え、長い年月と多額の費用を要する。年々、農薬に求められる条件（安全性など）が厳しくなる中、開発費の増加、開発期間の長期化傾向にある。

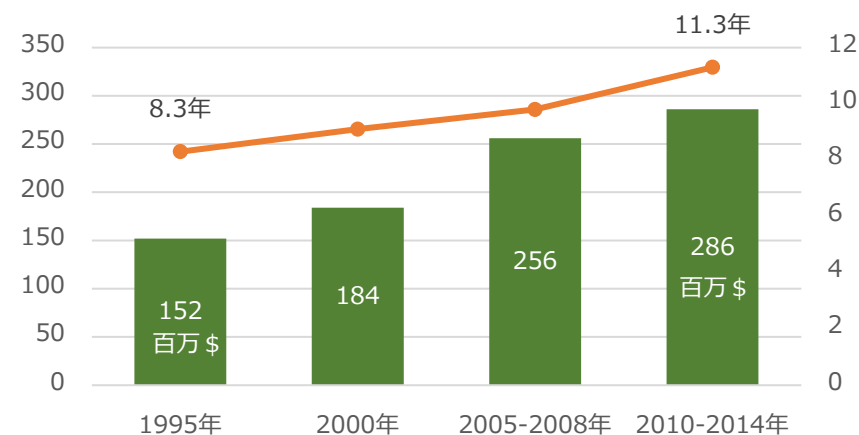
農薬の開発プロセス



10年以上

数億ドル

開発費と開発期間



注：JCPA農薬工業界、Phillips McDougall

■世界大手3社のR&D費用

	R&D費用	対売上高比
バイエル	2,654億円	10%
シンジェンタ	1,280億円	7%
コルテバ	1,366億円	8%

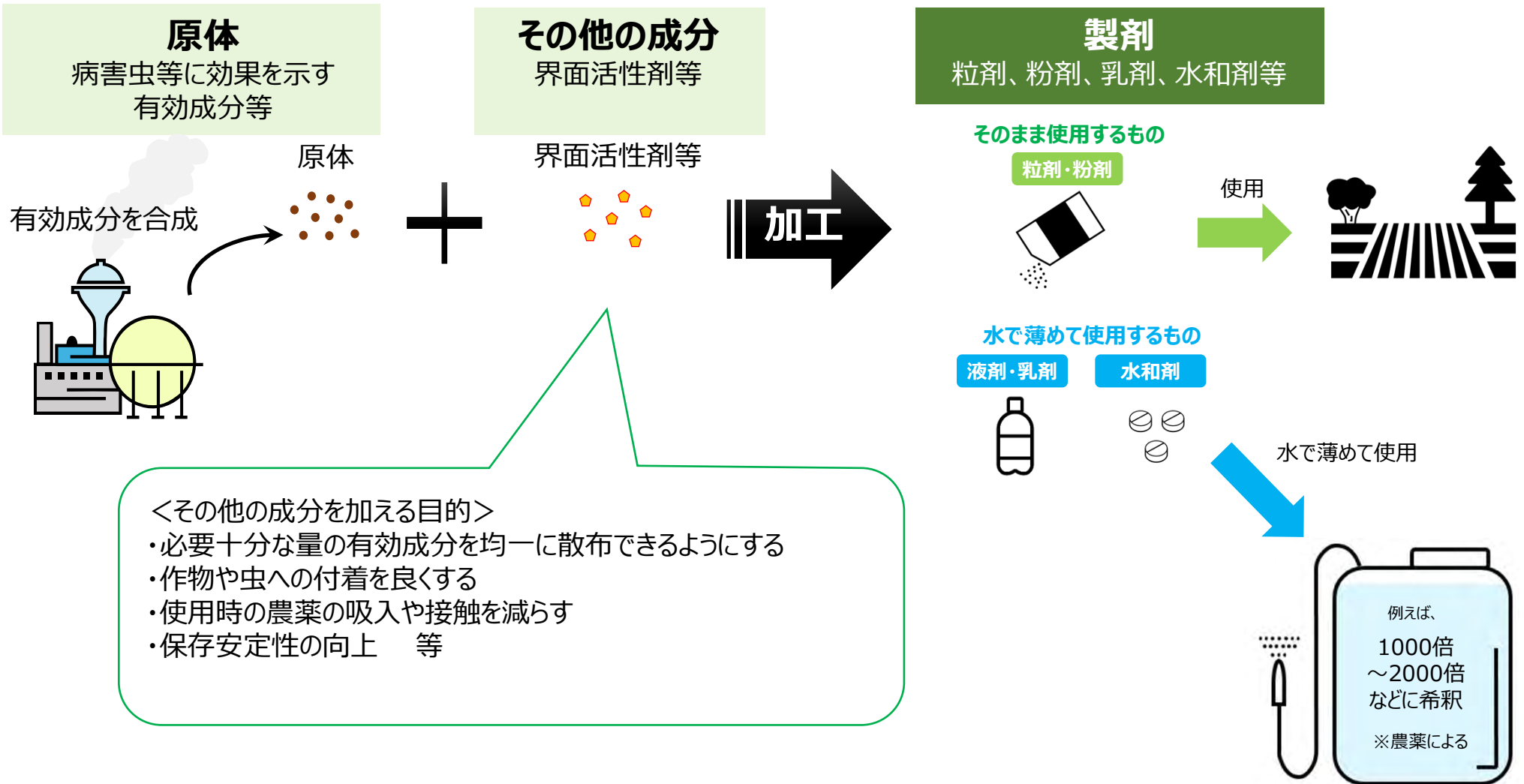
資料：各社の年次レポート及びホームページ。

資料：JCPA農薬工業会のホームページ、各社IRを基に作成。

※本資料は一般的な情報を便宜的にまとめたものであり、農林水産省の見解等を表明するものではありません。

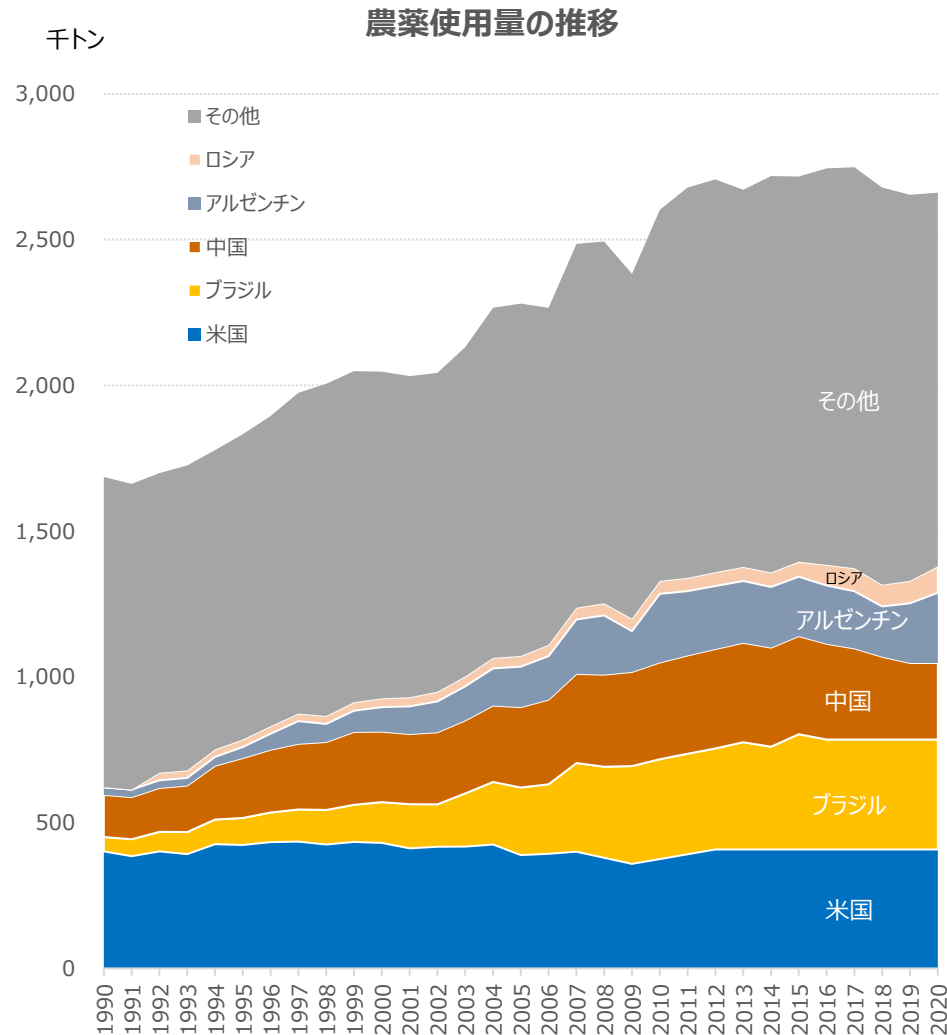
農薬の製造フロー

- 農薬は、病害虫等に効果を示す有効成分を含む原体に、その他の成分（界面活性剤等）を加えて、粒剤、粉剤、乳剤、水和剤等の製剤として製造・販売される。



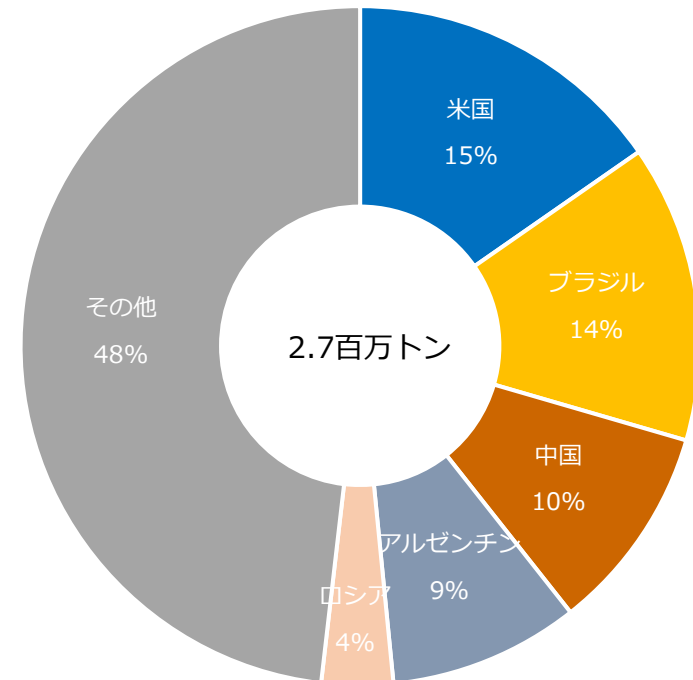
世界の農薬使用量

- 使用量が最も大きい米国は概ね横ばいで推移。一方、1990年以降はブラジル、中国、アルゼンチン等に牽引される形で世界の農薬使用量は増加してきた。



資料：FAO STATを基に農林水産省作成

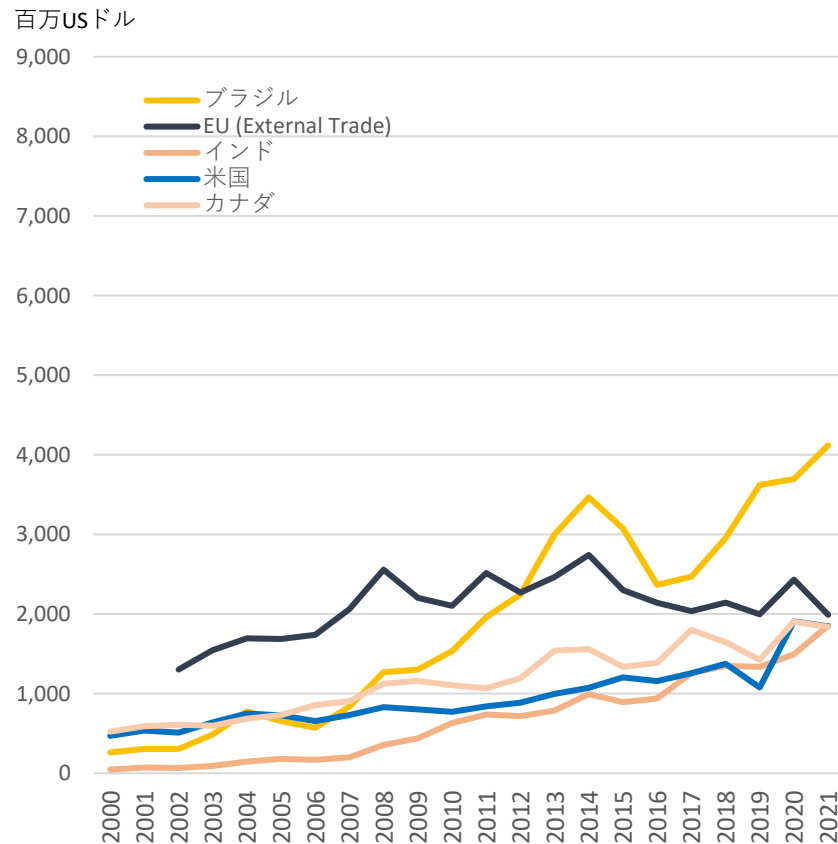
農薬使用量の国別割合（2020年）



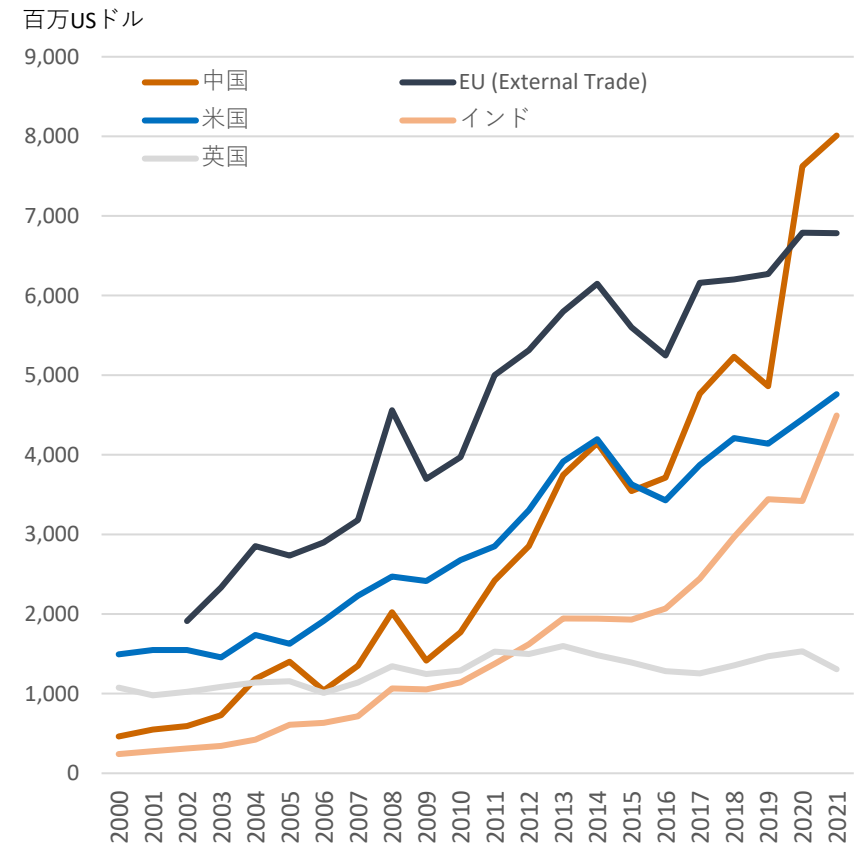
農薬の貿易状況（金額）

- 農薬の輸入金額上位はブラジル、EU、インド。
- 輸出金額上位は中国、EU、米国。

輸入金額の推移（上位5カ国）



輸出金額の推移（上位5カ国）

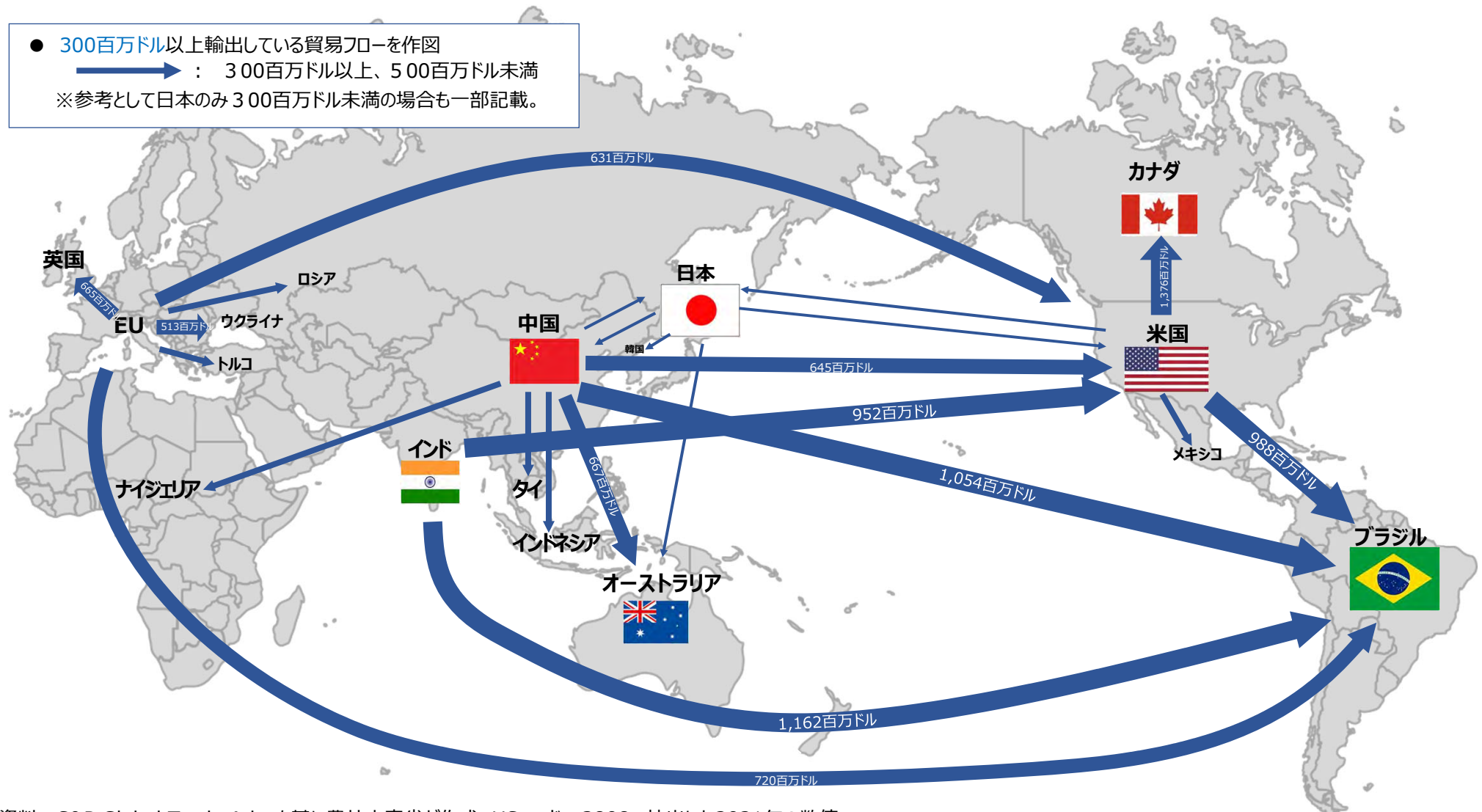


資料： Global Trade Atlasを基に農林水産省作成

3808 (殺虫剤、殺鼠剤、殺菌剤、除草剤、発芽抑制剤、植物生長調整剤、消毒剤その他これらに類する物品(小売用の形状若しくは包装にし、製剤にし又は製品にしたもの(例えば、硫黄を含ませた帯、芯及びろうそく並びにはえ取り紙)に限る。))の集計値。

農薬の貿易フロー（2021年 | 金額ベース）

- 農薬の貿易額について、米国と比肩し世界最大規模の消費国であるブラジルでは、他国への依存が比較的大きい。
- 我が国については、特定の国への依存は特段無し。



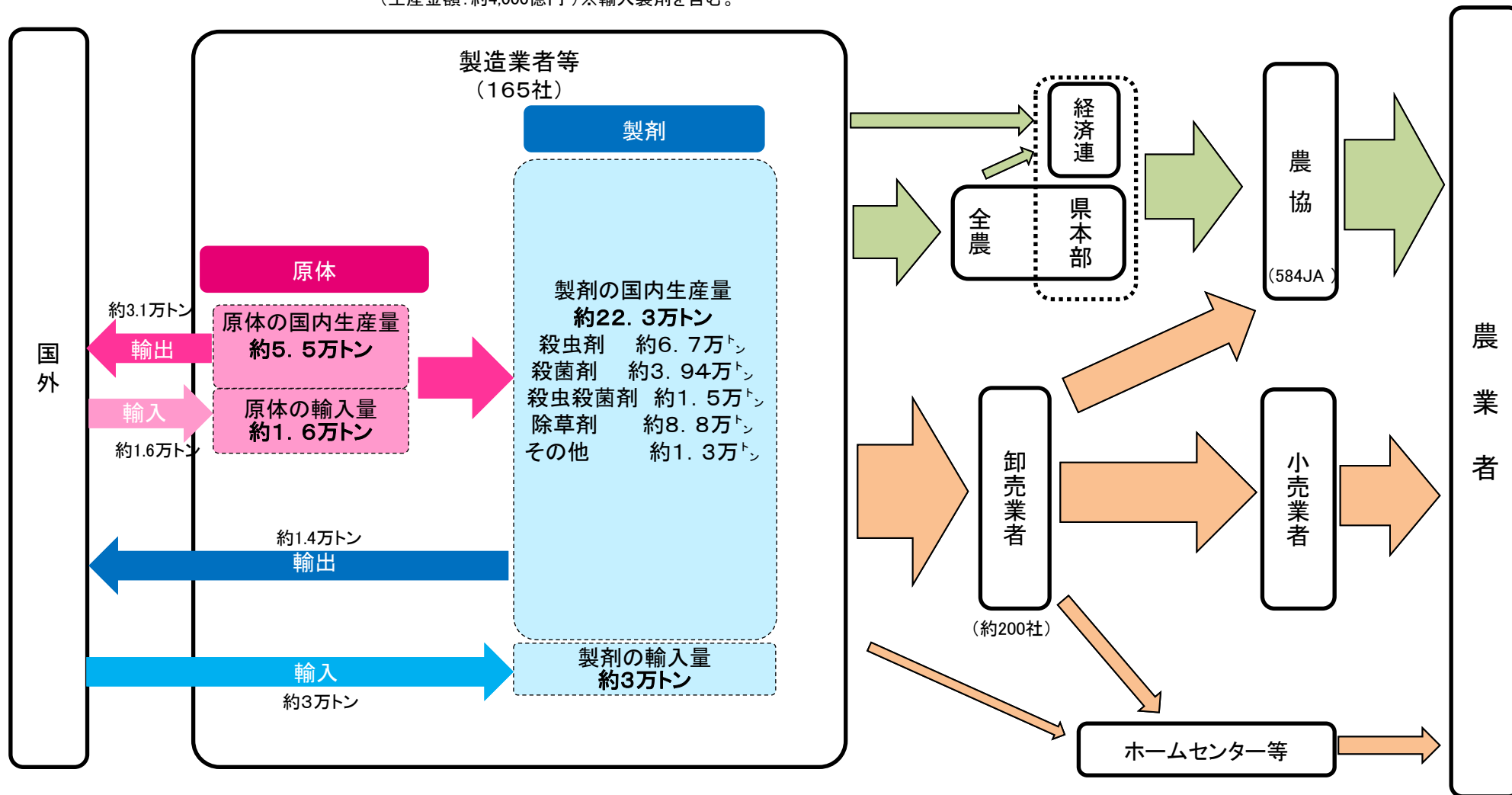
資料：S&P Global Trade Atlasを基に農林水産省が作成。HSコード：3808で抽出した2021年の数値。

注：レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある

農薬の流通構造



(生産金額: 約4,000億円) ※輸入製剤を含む。



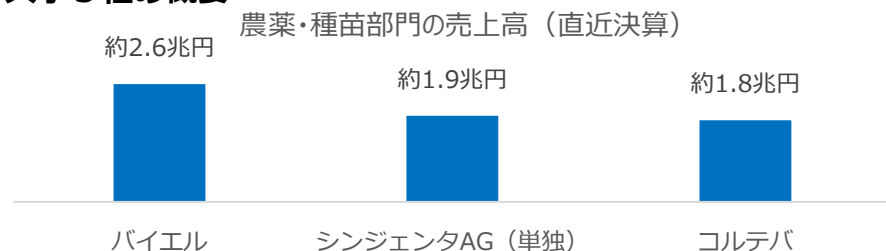
注：生産量、輸入量、生産金額は令和2農薬年度の値。

資料：農林水産省「農薬をめぐる情勢」の資料を一部レイアウト変更。

世界の農薬業界の概要

- 2017年以降の農薬・種苗業界の再編により大手3社に集約。海外大手は、農薬と種子の製造・開発を複合経営（自社製の農薬と種子をセット販売等）している。

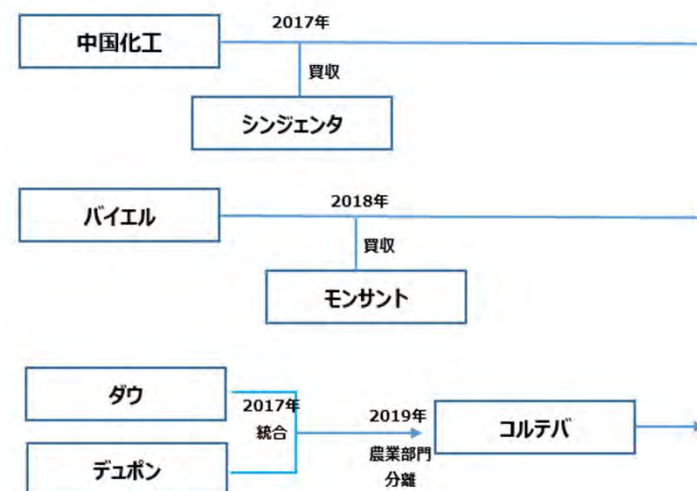
世界大手3社の概要



注：売上高は直近決算の数字。円換算は便宜的に2021年12月31日の終値を基に算出。
シンジェンタAGの親会社の中国化工の連結決算数値は非開示につき、シンジェンタAG単独の数値を便宜的に記載。

企業名・売上	概要
バイエル（モンサント） 売上合計 EUR44.0B(約5.8兆円) うち農薬・種子 約2.6兆円（クロップサイエンス部門） 本社：ドイツ	2018年に独バイエルが種苗世界最大であった米モンサントを買収。モンサントは除草剤の「ラウンドアップ（Roundup）」を開発したことで知られ、1990年代には、ラウンドアップ等に耐性のある遺伝子組換え品種を開発した経緯がある。クロップサイエンス部門で扱う製品分野は、植物形質、化学合成・バイオ農薬、農業デジタルソリューションなどがある。2021年にはマイクロソフトと農業クラウドのプラットフォーム開発で戦略的業務提携を公表。
中国化工（シンジェンタ） 非上場につき連結決算データ非開示。 Syngenta AG単独では、 売上高16.7B\$（約2.0兆円） うち農薬1.5兆円、種子0.4兆円 本社：中国、スイス	中国化工（中国の国営企業）が2017年に買収した農薬大手シンジェンタ（スイス）がグループの主力企業。シンジェンタの売上は約8割が農薬事業。グループ傘下には、イスラエルのジェネリック農薬大手のアマダも擁する。
コルテバ 売上合計 15.6B\$(約1.8兆円) うち農薬約1.0兆円 種子約0.9兆円 本社：米国	2019年にダウ・デュボンの農薬・種苗部門が分離独立して設立。前身のパイオニア社（デュボンが1990年に買収）は、1996年にトウモロコシのゲノム研究を始めた最初の企業。

業界再編



- 2017/6：中国化工がスイス・シンジェンタを買収
- 2017/9：ダウとデュボンが合併
- 2018/6：独バイエルが米モンサント買収
- 2019/6：ダウ・デュボンがコルテバを分社化

大手3社に集約

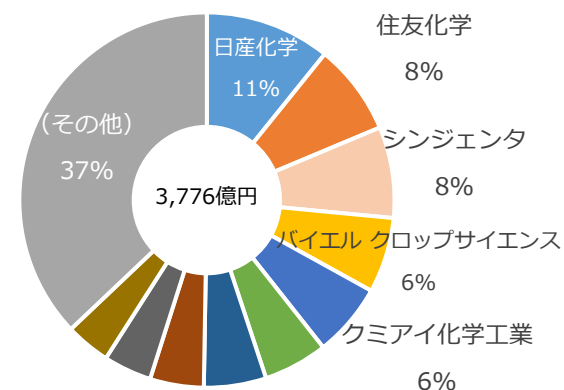
注：売上高は直近決算の数字。円換算は便宜的に2021年12月31日の終値を基に算出。
シンジェンタAGの親会社の中国化工の連結数値は非開示につき、シンジェンタAG社単独の数値。
資料：各社の年次レポート及びホームページ。 ※本資料は一般的な情報を便宜的にまとめたものであり、農林水産省の見解等を表明するものではありません。

国内の農薬業界の概要

- 国内農薬メーカーの市場シェアは一定程度分散している。日本では、野菜や果樹などの種類や品種が多い中、各社が得意とする農薬の分野・領域は様々。

順位	社名	出荷金額 (億円)	シェア (%)
1	日産化学	408	11
2	住友化学	297	8
3	シンジェンタ	297	8
4	バイエル クロップ サイエンス	245	6
5	クミアイ化学工業	239	6
6	北興化学工業	209	6
7	三井化学アグロ	203	5
8	日本農薬	175	5
9	BASFジャパン	157	4
10	日本曹達	146	4
	(その他)	1,400	37
計		3,776	100

出荷金額シェア（国内）



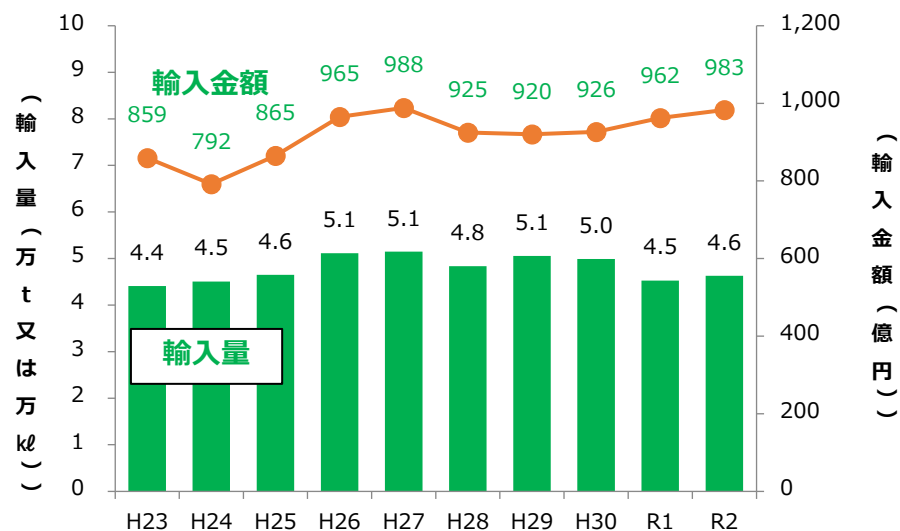
注：令和2農薬年度の数値

農薬の輸入及び輸出の推移

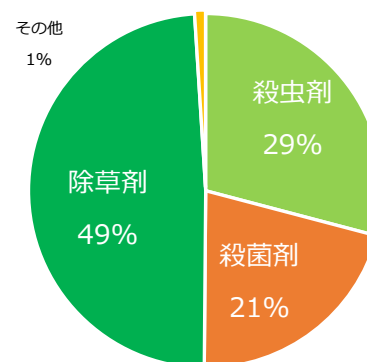
- 近年は農薬の輸出金額が輸入金額を上回って推移。
- 輸出先、輸入先共に一定程度分散されている状況。

輸入

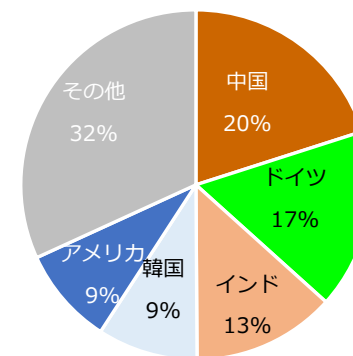
輸入量及び輸入金額の推移



種類別輸入割合 (金額)



農薬の国別輸入割合 (金額)

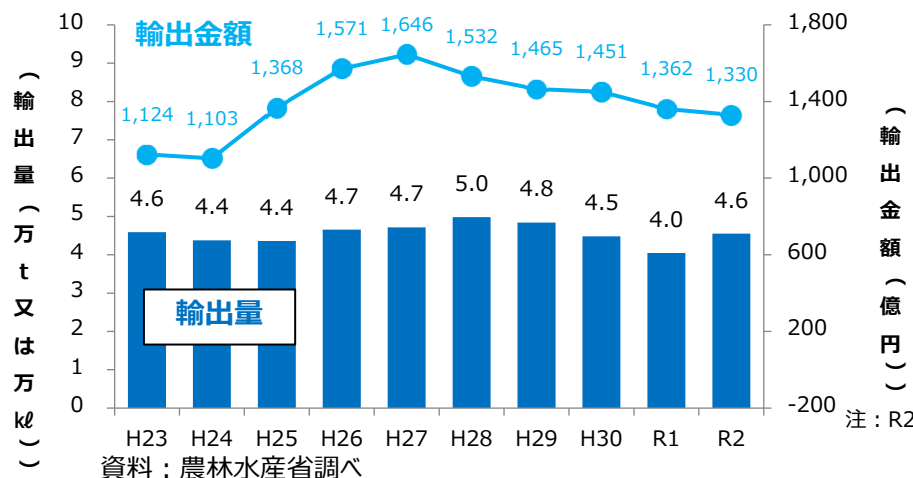


注：R2農薬年度の数値。輸入・輸出は原体及び製剤の合計

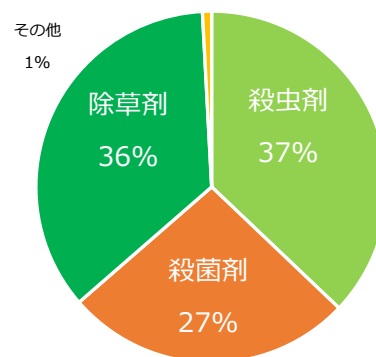
※除草剤の輸入としては、グリホサートイソプロピルアミン塩剤とグリホサートカリウム塩剤の輸入が多い。

輸出

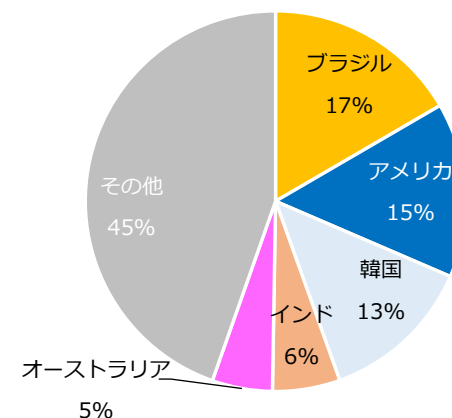
輸出量及び輸出金額の推移



種類別輸出割合 (金額)



農薬の国別輸出割合 (金額)

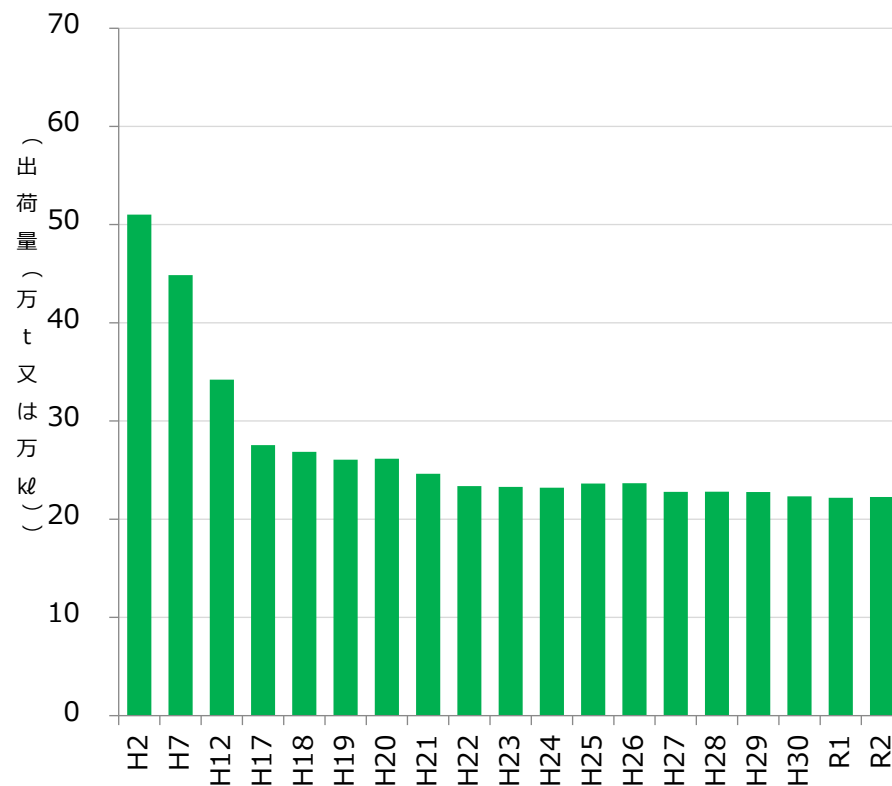


注：R2農薬年度の数値。輸入・輸出は原体及び製剤の合計

農薬の国内出荷量

- 国内の農薬出荷量は、農作物の作付面積の減少等により、約20年間で約4割減少。
- 種類別には、殺虫剤、殺菌剤、殺虫殺菌剤、除草剤が9割以上を占める。

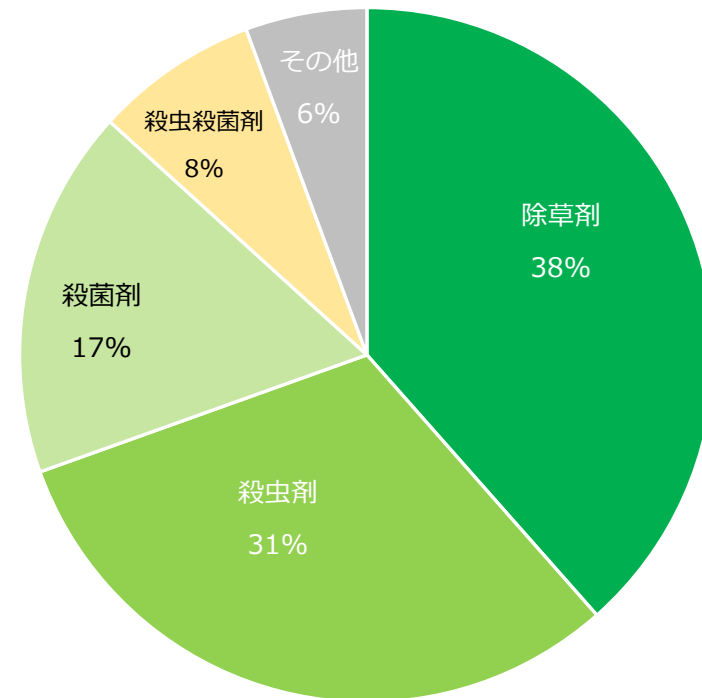
国内の農薬出荷量の推移



資料：農林水産省調べ
 注1：農薬年度（前年10月～9月）
 注2：出荷には輸出分は含まない。

農薬の国内出荷量の種類別内訳

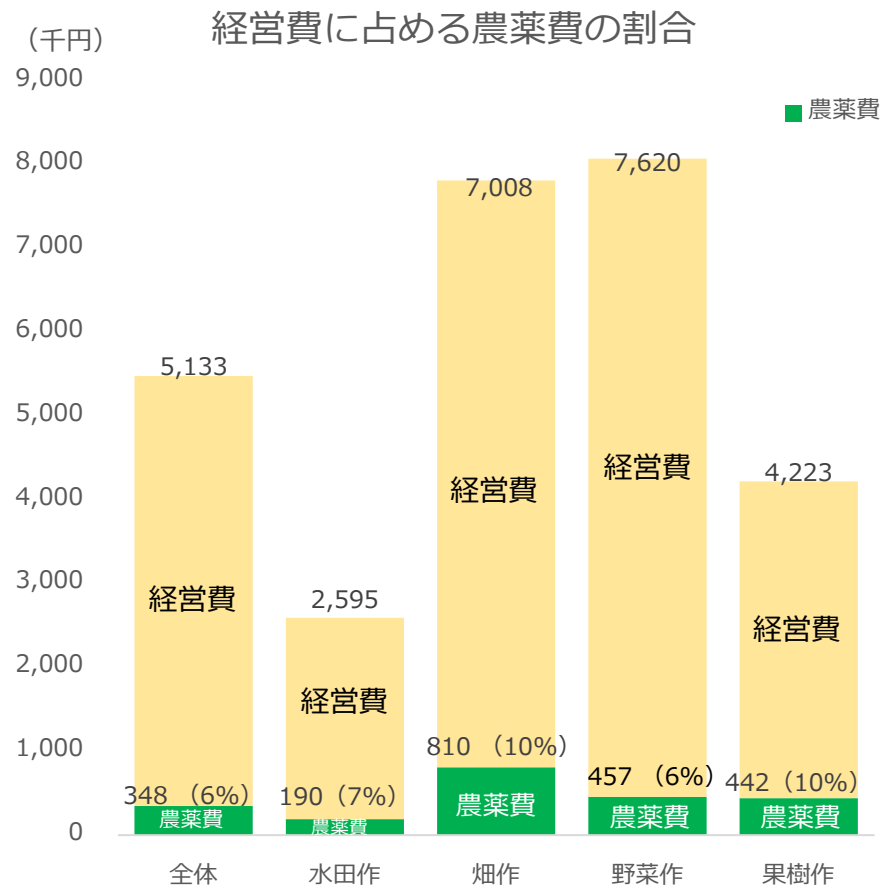
（令和2農薬年度）



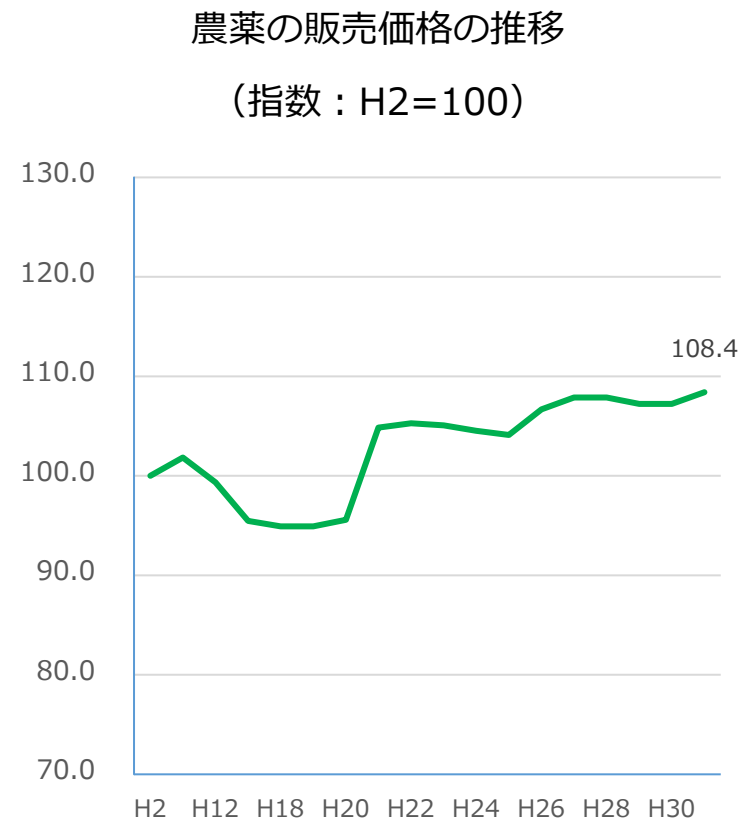
資料：農林水産省調べ
 注1：農薬年度（前年10月～9月）
 注2：出荷には輸出分は含まない。

経営費に占める農薬費および農薬販売価格の推移

- 営農類型別の経営費に占める農薬費の割合は、全体で6%、経営別で7～12%。
- 農薬の国内販売価格は、平成20年に原材料の値上がりに加え、世界的な穀物増産を背景とする需要の増加により約1割値上がりしたものの、以降はほぼ横ばい傾向で推移。



資料：農林水産省「経営形態別経営統計（個別経営）(R1)」



資料：農林水産省「農業物価統計」

資料：農林水産省「農薬をめぐる情勢」から抜粋

詳細は右記URLを参照：<https://www.maff.go.jp/j/seisan/sien/sizai/noyaku/attach/pdf/index-1.pdf>

ジェネリック農薬について

- ジェネリック（後発）農薬とは、先発メーカーの持つ農薬の有効成分の特許の有効期間が過ぎた後に、別のメーカーが製造する、当該有効成分を含む農薬のこと。
- 令和2年3月現在、我が国において登録されているジェネリック農薬は、6成分、74銘柄。
- ジェネリック農薬の登録の申請に当たっては、安全性の確認のために必要なものを除いた一部の試験を免除。
- 農薬メーカーがジェネリック農薬の開発に取り組むかどうかは、市場規模や先発ブランドとの競争、開発コストを勘案して判断。

○ 我が国で登録されているジェネリック農薬

有効成分名	アセフェート (殺虫剤)	プロパモカルブ 塩酸塩 (殺菌剤)	マンゼブ (殺菌剤)	グリホサート イソプロピルア ミン塩 (除草剤)	フェンメディ ファム (除草剤)	プロピザミド (除草剤)
後発品数	9 剤	1 剤	8 剤	53 剤	2 剤	1 剤
後発品の シェア	16%	60%	14%	100%	28%	30%
先発品との 価格差	▲10%～15%	▲約 3 %	▲10%～15%	(先発メーカー が取扱終了)	0 %	—

注1：後発品数はR2年3月時点、後発品のシェアはH30農薬年度（消費・安全局調べ）

注2：後発品のシェアは、有効成分（重量）ベース

注3：先発品との価格差（小売価格）は、農産局調べ

資料：農林水産省「農薬をめぐる情勢」から抜粋

詳細は右記URLを参照：<https://www.maff.go.jp/j/seisan/sien/sizai/noyaku/attach/pdf/index-1.pdf>

ドローンの活用（農薬）

- メーカーと先進的な経営体が協力したセンシングデータに基づく農薬のピンポイント散布が進められており、作業時間の短縮だけでなく、農薬の使用量を抑制する効率的な防除の普及が期待される。
- 昨年に引き続き、農業者個人による散布に加え、農協等のサービス事業者による防除受託の取組が広がっている。
- ドローンに適した農薬登録の拡大に向けて、現場のニーズを収集し、農薬メーカーとのマッチングを実施するとともに地域における登録試験の実施を支援。

ピンポイント農薬散布

(有)アシスト二十一(新潟県)、(株)オブティム 水稻 (8.5ha)

概要

- 撮影用ドローンで空撮した画像を分析し、雑草の発生箇所を検知。
- 分析結果を元に、農薬散布用ドローンによるピンポイント農薬散布を実施。

結果

- ドローンによるピンポイント散布を行うことにより、動力散布機械に比べて散布量を30～50%削減。
- 作業時間も動力散布機に比べて50～75%削減。



空撮



病害虫・雑草を検知



ピンポイント散布

スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）の防除実証

JA三島函南、三島函南農業用マルチローター利用組合(静岡県) 水稻 (3.5ha)

概要

- JA三島函南管内では、数年前から「スクミリンゴガイ」による水稻への深刻な被害が発生。
- これまでの手作業による捕殺や薬剤散布では作業負担が大。
- このため、ドローンによる省力的な防除実証を実施。

結果

- ドローン防除を取り入れたことで薬剤散布にかかる作業時間をこれまでの3分の1まで削減。
- 今後、地域内一帯で共同防除を行うことで、地域内のスクミリンゴガイ発生密度の抑制が期待。



ドローンによる農薬散布



スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

1

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2022 年 9 月中旬までに発表した情報を引用しています。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

英国については、2020 年 1 月 31 日付けで EU を離脱しました。英国の小麦に関する情報については小麦の EU27+英国のコーナーで取り扱います。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--